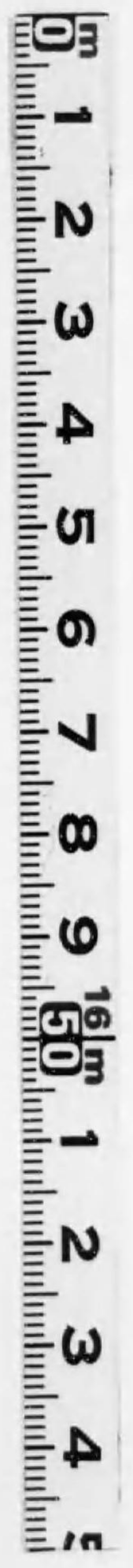
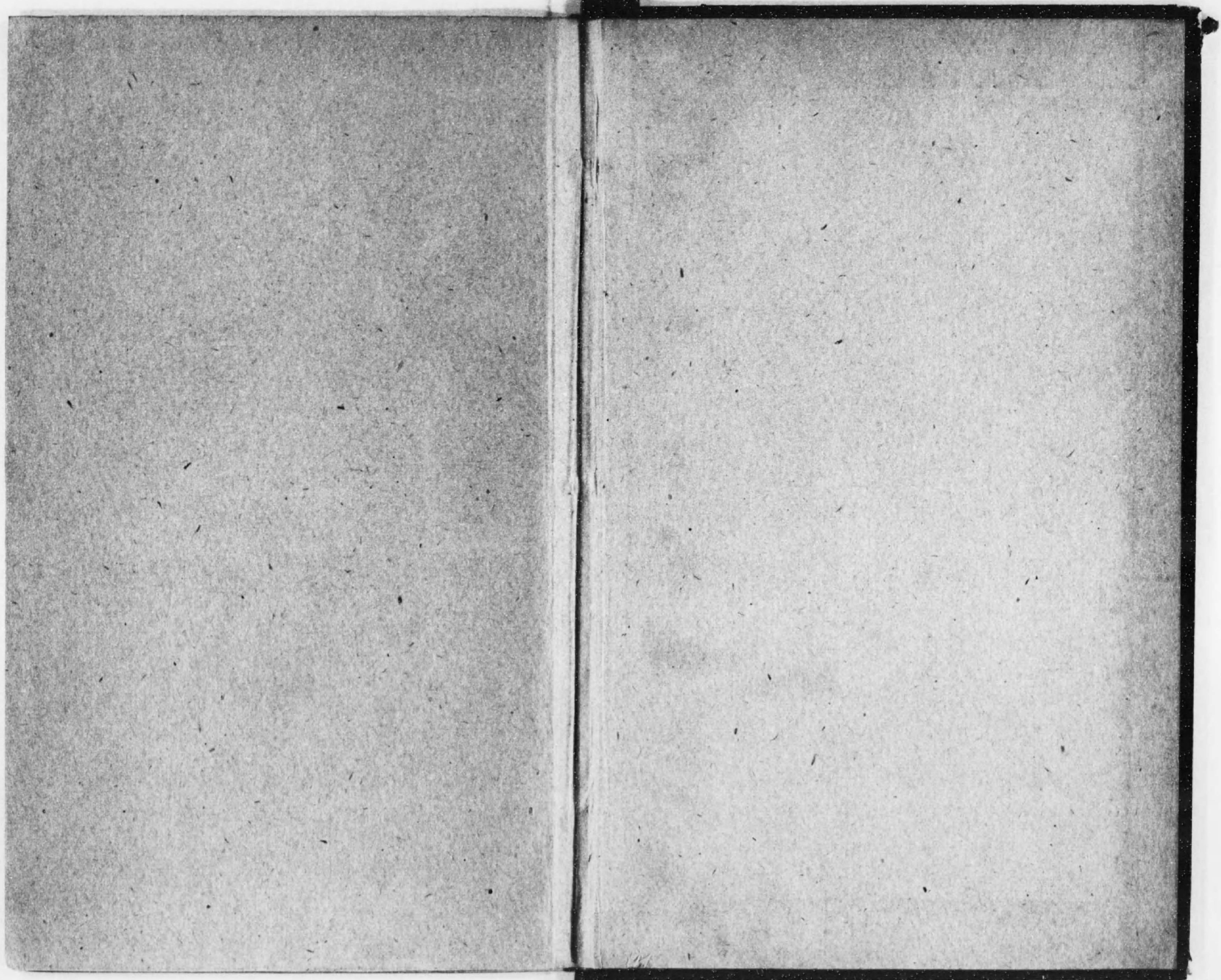


305
41



始





505-41

篇五第史本日の民國

篇 後 代 時 倉 鎌

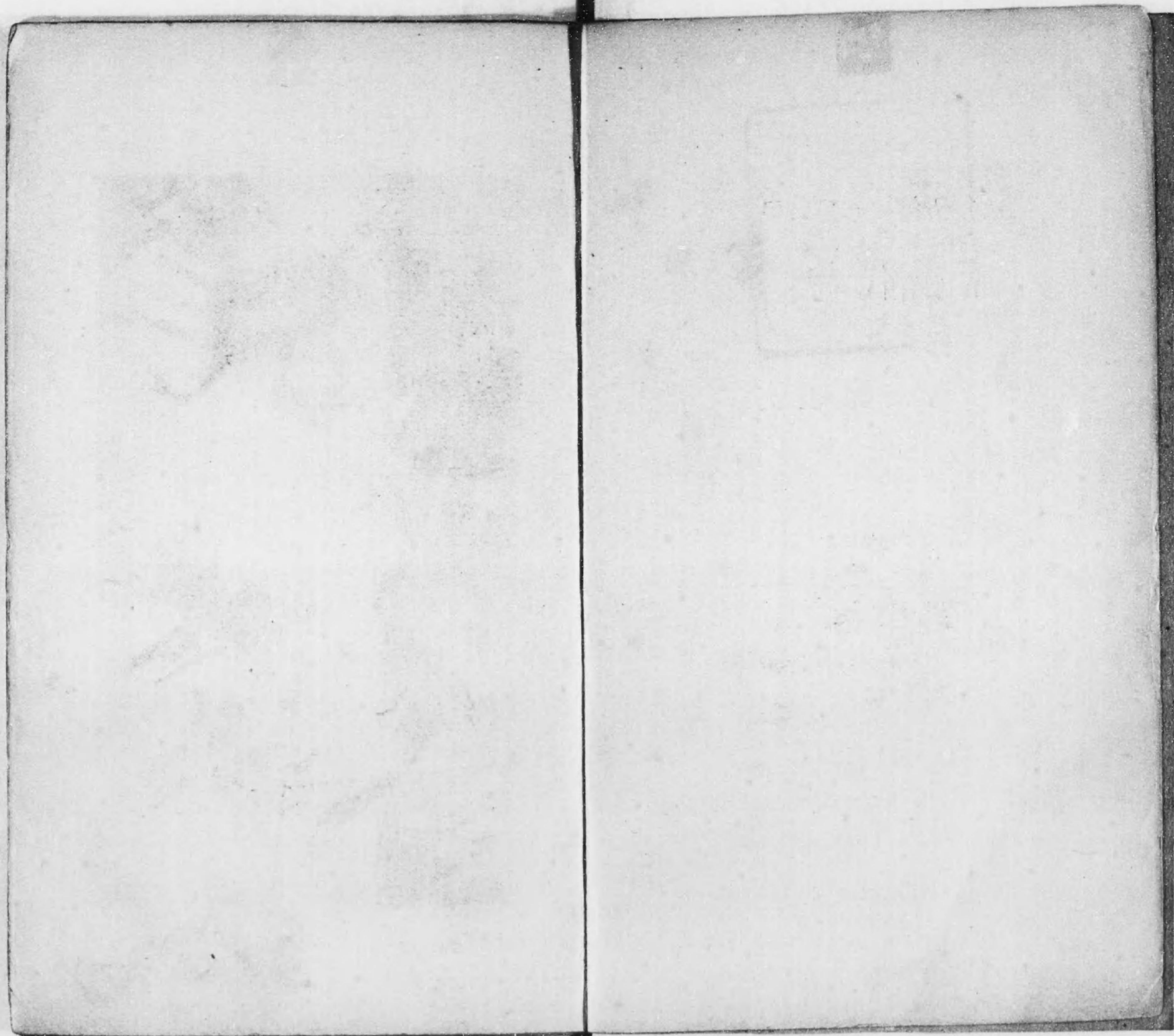
修 監 遙 遣 内 坪

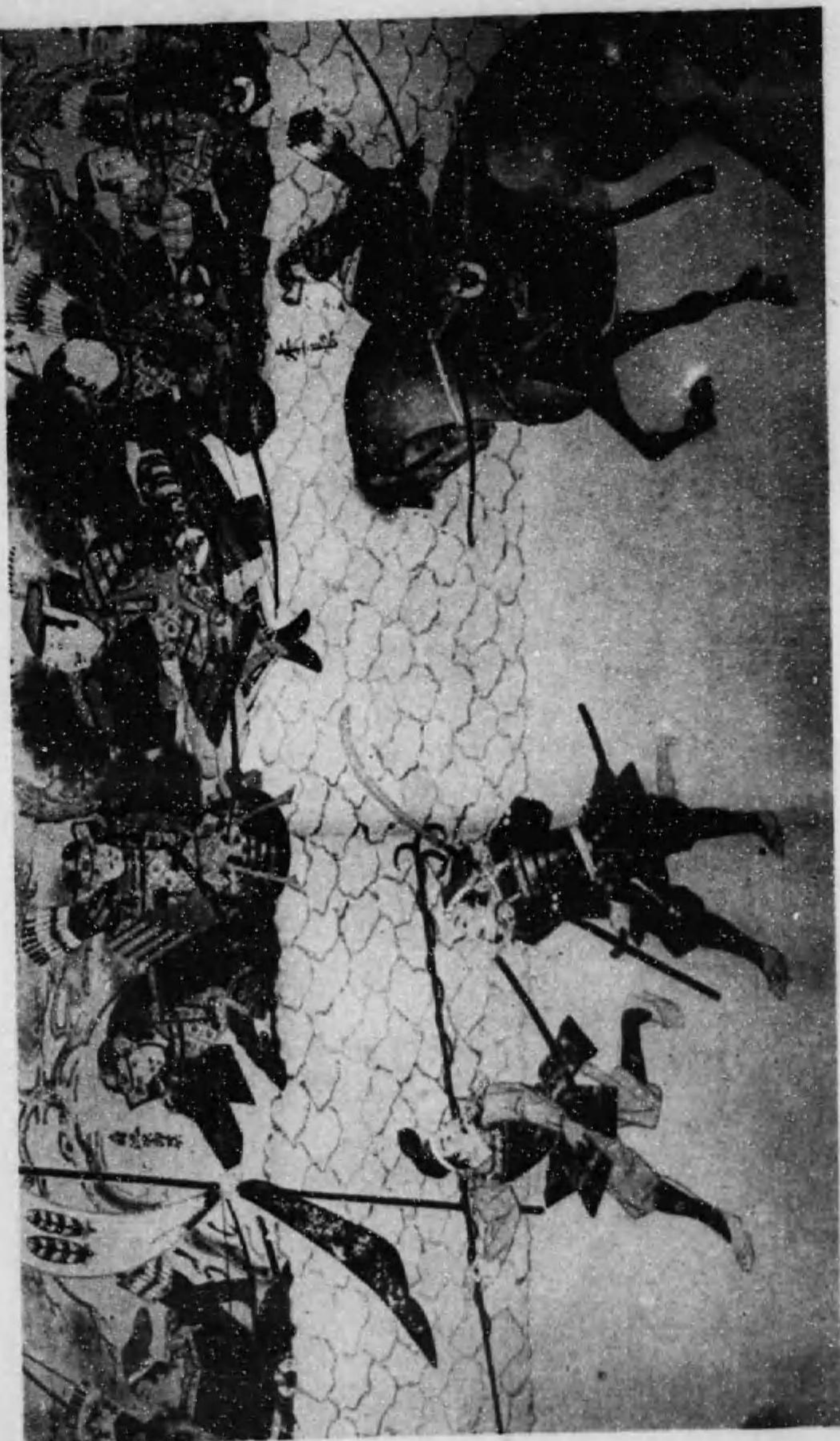
著 溪 梅 須 高



部 版 出 學 大 田 稻 早







の戦捷の程遠は面々目に見えりやとてある。

精刀操断刃のよう、それらの日々に効むる勇士

へは瀟軍を退却してひる光景である。遠の隊の

圖は『蒙古襲来繪圖』の一節で、龍旗は下段に懸

をて然猶も前へて輜輳に瀟國の親分を演じて。

さくも輜に纏るける土臺はまじ、前助も輜官も

轟散干々塵でひ勇士はまじり良ひ以て國賊に外

に離れしやとてあるも、瀟軍の勢が見えりや

是安の勢はひやひやに舞飛の人々まじりて愛國心

示 談 妙

元寇役

弘安の役はどんなに戦罪の人々をして愛國心に燃えしめたであらう。戦争の終局を見るまで烏帽子を戴く武士が、あれば身を以て國難に代らうと神に請はれる土皇が、あり、僧侶も神官もまた熱誠を籠めて神佛に敵國の降伏を請つた。圖は『蒙古襲來繪詞』の一部で、諸將も石壁に集つて敵軍を監視してゐる光景である。嵐の羽の旗は源氏のもので、それらの日に於ける武士の威風凛々たる面影が、裏目に見えるやうである。

序言

總じて打見た眼に色彩が花やかに映る現象は、直ぐに人の興味を惹起し易いが、それとちがつて一見色彩に乏しい質實な現象は、どうしても冷かに看過され易く、若しくは無關心に注意されずに終る事がある。鎌倉文化史は、平安時代のやうにばつとした花やかさ、美しさを有つて居ないので、一體に色合が質實な爲めいくらか興味を惹き難い傾向がないでもない。それに、引續いて起つた源家三代の哀史が、残忍、冷酷、陰險、辛辣などのあらゆる不快な空氣を以て滿されて居るので、一層普通人に嫌惡を感じさせるやうな暗いところがある。さうした點は全く幻滅的で、一種の恐しい謎の感じがする。

けれども公平に摯實に鎌倉時代の文化史を考察すると、此期に入つて、平安末期の頽廢文化が根柢から一掃されて、平清盛の鐵手によつて半ば舊文化が破壊されたあ

とを受けて、新しいエポックが出現したことを痛切に感ずる。そこに硬化した社會の血液を新鮮なものにした新興武士階級の世界が生々と繪のやうに展開さるゝと同時に、奴隸視せられて來た民衆中にも、自然擡頭するものを生じたのが眼に付く。さうした武士、民衆らの要求によつて、新しい政治、新しい宗教、新しい戰術、新しい倫理、新しい經濟が創造された。即ち一個の新社會が激瀾とした元氣で組織された。此點に於て、鎌倉時代は文化革命の幕を開いて海外文化の輸入や模倣のみに安んじないで、國民的自覺の下に、日本特有の文化を打建てた時期である。それらを研究してゆくのは、相當に深い興味のある仕事である。

蓋し鎌倉文化は外形の上に於て、花やかではないが、内容に於ては可也に充實したものを有つて居るのである。京都に於ける南人文化が印度文化、支那文化などを模倣するに傾いて居たのに對して、鎌倉を代表した北人文化はさうした模倣から多く超出して、純日本人らしい新文化を建設することに力めた。平安期のやうに糜爛し

た官能、神經によつて文化が作られず、逞しい骨力によつて文化が生み出された。それには自ら外部から來た時代の刺激もあつたが、それよりは、より多く内部的に醸し出された創造衝動によつて、日本の色彩の濃い文化を造り出した。日本人の性格、趣味、氣象などの反映としての生命力ある文化を生産することに力めた。それは空想的、形式的でなくて現實的、若くは實質的な色合を帯びて居た。さうした傾向が、當時の宗教、倫理、政治、軍事、文藝、實生活などの上に浮び出て居る。

殊に宗教の上では、純日本的なものが創成された。法然の淨土宗、親鸞の淨土眞宗、日蓮の法華宗などは其代表的なものである。勿論、それらは全然、根柢から創造されたのではないが、形式や理窟に囚はれた舊佛教の上に大きな革命を齎した。そして日本人の性質、氣象に適合したところの民衆的な分子を多く包有して、大體日本的宗教としてしまつた點に於て、常に當時の文化に貢獻したのみならず、今日の社會に於ても其生命及び勢力を保持して居るほどの根柢を築きあげた。禪宗は鎌

倉時代に支那から輸入されたが、これも亦日本化されて、新興武士階級の多数を支配する宗教となつた。かうして當時の新宗教は文化の骨格となり、脊髄となつて重要な地位を占めた。それであるから宗教を究めないでは、鎌倉文化を研究することが出来ないと言ふほどのものとなつたのである。

ところが、在來の史家は多く當時の宗教に對して至極冷淡で、正當な注意を拂はなかつた。偶々注意する人があつたと、親鸞抹殺とか、日蓮の龍口法難否認とか云ふ事實考證の詮索に走る傾向があつた。親鸞が實在の人物であるとは今日、其筆跡、畫像などの研究によつて明かにされた。日蓮の事蹟も亦別段疑ひを存すべき餘地がないやうである。それで私はさうした問題について詮議しないで、主として彼等の宗教思想を闡明して、それが當時の文化とどんな交渉を有したかを明かにしようと思つた。云ひ換へると、彼等の新宗教が何故に生れ、何故に時人を動かし、何故に今日まで其勢力、生命を保持して來たかと云ふ點に就いての解説に力を入れた。それに

それらの宗教のために比較的紙數の多くを費すことを惜まなかつた。畢竟、鎌倉文化の脊髄であり、中心であるのは禪宗及び法然、日蓮、親鸞らの新宗教であることとを固く信じたからである。

宗教のほかには尙ほ研究の對象として興味があるのは、當時の新倫理と稱すべき武士道の發達、經濟生活と武人生活との關係、民衆と武士とのために作られた貞永式目、公平穩健を旨とした民衆政治、民間に於ける産業の新興などである。私は宗教に次いで、以上の諸現象に注意してそれらが相寄り、相影響して、有機的に醸し出す新しい空氣の描寫と解説にも力めた。また本叢書の特徴とする民衆生活の種々相についても、及ぶだけ周到に叙述を試みたつもりである。以上は貧弱ながら、在來の鎌倉時代史に於て閑却され勝ちな諸點を研究して、一つに取纏めた私の新しい試みの收穫である。唯々淺識と不文とのために所期の十分の一をも實現し得なかつたのを衷心恥づる次第である。

終りに北條氏の滅亡を略叙したのは、薄田斬雲氏の『吉野時代』に其點を詳叙してあるから重複を避けた爲めである。尙ほ本書述作の上に恩師坪内逍遙博士が慈父の如く私を懇切に指導し誘掖されたことを深謝する。

大正十二年一月

高須芳次郎

内容目次

第一章 頼朝歿後の政治的形勢

第一節 幕府の不統一曝露

中心人物を失へる鎌倉——頼朝時代からの暗闘——爆發せんとする不平
 不満——京都に於ける動搖——頼家の性質と人物——頼家に對する束縛
 ——排斥された梶原景時——景時の傲慢と中傷的言辭——景時と文權派
 との結託——頼家の好色——景時に讒せられた安達景盛——政子の切諫
 ——景時再度の讒言——三浦義村の慨歎——大江廣元が景時に對する同
 情——景時追放さる——景時の謀叛——父の菩提を弔うた景時の女——
 將來に於ける動搖を暗示す

第二節 院政の振興と源通親の政治的手腕

頼朝歿後に於ける京都の政治的形勢——京都に於ける武家派と勤王派——
 ——丹後局の政治的才能——政治上の秘密運動——鎌倉と京都に於ける女
 流政治家の對照——丹後局は才貌兼備の女——丹後局の纖手によつて實

現されたクレーター——源通親の得意——通親の自我主義——通親の幕府派排斥——院政振興——政治家としての通親の一缺點

第三節 女流政治家藤原兼子……………三

後鳥羽上皇の怠慢——親政の實を擧げらる——上皇の文武に於ける嗜好趣味——上皇の享樂生活——上皇に寵せられた美男美女の群——藤原兼子の半生——順潮に向つた兼子の運命——始めて四十五歳で結婚した老嬢——閨閥に縋らうとした藤原宗頼——宗頼と通親との閨閥關係——閨閥によれる頼實の出世——兼子の調停的手腕——兼子巧に上皇に取り入る——兼子と贈賄——兼子の權勢——兼子に賄賂を贈つて破格の立身をした人々——藤原定家ら兼子の勢力に屈す——延曆寺に於ける堂衆と學侶の争ひ——兼子を呪詛した僧侶——政子と兼子との交歡——兼子の失意時代——不振に見えた鎌倉

第四節 將軍頼家と北條時政……………三

地方に於ける騷亂續發——頼家蹴鞠に耽る——遊女愛壽の意氣——白拍子微妙の哀史——微妙の出家——頼家の非常識——訴訟事件に現はれた頼家の無頓着——頼家に愛せられた大夫房源性——頼家急に病む——時

政の疎腕——比企能員の不平——政子屏後に隠れて頼家らの密謀を知る——時政の詐略——能員の非運——能員誘殺さる——比企一族の全滅

第五節 悲劇と隱謀との連續……………四

北條氏の權勢の増大——悲劇中の人頼家——仁田忠常の不幸——政子が頼家に對する冷かな態度——頼朝以來久しく不平を抱いた時政——時政假面を脱す——時政の老耄——時政の虚偽——頼家幽囚の人となる——浴室で暗殺された頼家——頼朝が蒔いておいた業因果——政子の權勢——時政の後妻牧氏の性格——牧氏最愛の女婿平賀朝政——實朝の結婚——重保と朝雅の衝突——政範の死を聞いた牧氏の悲み——牧氏大に重忠父子を憎む——時政と重忠の不和の噂——重忠の硬直——重忠父子と其周圍——時政の野心と術策——最初の犠牲——稻毛重成——義時の心中——牧氏の憤怒——重保亂箭中に死す——重忠の驚愕と決心——潔い重忠の最期——義時の歎息

第二章 佛教界に於ける新機運の流動

第一節 時政の後妻牧氏の政治的野心……………五

家族的葛藤——牧氏の隱謀——牧氏が實朝暗殺の手段——毒殺か刺殺か

— 牧氏浴室に於て實朝を殺さんとす — 隱謀失敗 — 時政夫妻の退隱
— 義時執權となる — 平賀朝雅の死 — 血の地獄 — 疑惑に囚はれた
人々

第二節 宗教改革を促した事情 六一

實朝の聰明 — 壽福寺の行勇 — 行勇、榮西の弟子となる — 禪宗と鎌
倉時代の文化 — 榮西と法然 — 宗教改革の諸原因 — 宗教上に於ける
武士庶民の要求 — 厭世思想の流行 — 滅罪を祈つた武人 — 入宋求法
の日本僧侶 — 支那僧侶の渡來 — 宗教界の巨人 — 融通念佛の創唱者
良忍 — 唯心哲學的傾向を有する他力宗 — 融通念佛宗の特色と原理 —
口稱の念佛 — 念佛弘通に力めた人々 — 重源は法然の先輩 — 重源
が社會事業に於ける偉大なる貢獻

第三節 淨土宗の創唱 七一

宗教改革の趨勢と淨土宗の使命 — 印度支那に於ける淨土宗 — 淨土宗
の教判 — 民衆的傾向 — 法然の修學時代 — 觀空と法然 — 懷疑に沈
んだ法然 — 黒谷に於ける靜思 — 法然に影響を與へた佛典 — 支那の
名僧善導 — 『撰擇集』に含まれた法然の思想信念 — 宗教の中心生命を

把握す — 宗教界に於ける弊風 — 善導の説いた三心具足の要と法然の
信仰の道 — 救世の福音 — 偉大な改革 — 法然に對する迫害の一因 —
「別時念佛」の流弊 — 法然に對する非難の聲 — 宮中を抜け出した二
人の美女 — 安樂房らの死刑と法然の流罪 — 親鸞も配流さる — 法然
死後に於ける淨土宗 — 法然門下の諸秀才

第四節 禪宗の輸入 八五

達磨宗停止の令 — 禪宗が日本へ招來された最初 — 北宋禪を傳へた道
璿律師 — 禪定の方式 — 慈覺と禪宗 — 覺阿の渡宋 — 覺阿禪機を悟
る — 達磨宗開祖と自稱した能忍 — 榮西の發憤と研學 — 榮西再度の
渡宋 — 虛庵に禪を學ぶ — 九州方面に始めて禪風を宣揚す — 京都方
面に於ける布教上の困難 — 榮西の辯解 — 榮西の著書に於て戒めた僧
侶の不品行 — 菩薩戒についての見解 — 『興禪護國論』は偽作であると
の説 — 禪宗の大意を説く — 禪宗の祕密を闡明す — 榮西の豫言 —
榮西が鎌倉に於ける成功 — 鎌倉幕府の宗教政策 — 榮西に歸依した政
子と頼家 — 榮西の方便 — 建仁寺の創立 — 榮西の晩年 — 榮西の門
下 — 能忍と榮西の功績

第五節 律宗、華嚴宗の再興 九六

佛敎界に於ける律宗の趨勢——俊苾の天台再興——俊苾が持歸つた多数の典籍——泉涌寺の開山——二度渡宋した浄業——律宗が再興された所以——華嚴宗の再興——明惠の華嚴宗研究——明惠の隱遁と冥想生活——釋尊に對する仰慕——無私無慾の人——南都第一の學匠——名僧輩出

第三章 政治史上に於ける最も險惡な時代相

第一節 困難な地位に起つた實朝……………一〇五

義時の勢力強し——攝政九條良經暗殺の噂——暗殺の首謀者々々以て擬せられた人々——圓滿な良經の人物——死因は遺傳性の腦疾患——兼實歿す——順德天皇の即位——殺氣充滿せる鎌倉に於ける黨争——兵亂起らんとする徴候——實朝に對する壓迫——實朝の性格——境遇と運命とが激成した悲劇の人——政治家としての實朝——頼朝の遺策踏襲——亡き父に對する敬慕——先例尊重——實朝の温情發揮——訴訟上峻嚴と公平を示す——實朝の言動に現はれた頼朝の遺風——實朝の社會政策——實朝の宗教政策——實朝の對朝廷策——尊皇主義的傾向——幕府の立場を顧慮す——實朝の政治上に於ける缺點

第二節 歌人としての實朝……………一二六

京都文化の憧憬者——和歌の上に於て定家の指導を受く——京都に於ける歌壇全盛——歌人として偉大な上皇——有力な歌人の輩出——「新古今時代」の現出——家隆と定家——定家の歌風——歌學上に一見識を立てた定家——彼れの作歌についての意見——實朝の『萬葉集』研究——實朝の歌風——鎌倉に於ける歌會——實朝の趣味生活——歌を咏んで實朝に嘆賞させた武人——鎌倉を京都化せんとす——學藝獎勵——實朝と長明——偽書百出——長明の閉居——長明の遁世——實朝の武藝閑却

第三節 和田義盛の滅亡……………一二六

義時と義盛とは兩立し難し——義時の眼に映つた義盛——實朝の調停的苦心——泉親衝の謀叛——僧安念をして鎌倉に遊說せしむ——和田義盛の子息ら隱謀に加擔す——義重、義直、胤長ら捕へらる——義盛幕府に赴いて二子を救ふ——義盛再度の嘆願に一族九十八人を率ゐて幕府に赴く——義時の義盛に對する惡意——義盛の缺點——義時、義盛を激昂せしむ——義時の術策——義時の覺悟と用意——義盛竊かに伊勢神宮に訴願す——實朝兵亂を未然に知つて義盛を諭す——義盛の辯解——和解の色を繕ふ——朝夷名義秀の剛力——義村の變心——横山時兼の應援——

義盛一族の滅亡——義村の不明——頼家の子殺さる——文武の實權義時に歸す

第四節 最後の悲劇

三五

實朝の幻滅の悲み——意志の人と情の人の背離——實朝の官爵について
の先例無視——「官打」の説——實朝の沈痛な感慨——渡宋の計畫——陳
和卿の性質と奇矯な行爲——實朝の前身——陳和卿に共鳴す——實朝の
苦悶——渡宋の準備——唐船の建造成る——造船の失敗——支那へ使節
十二人を派す——實朝の官位昇進の熱望——實朝の喜び——昇進につい
ての祝賀——内大臣から右大臣へ——義時が實朝に對する不満——實朝
の反抗——義時が實朝を呪ふ心——政所始——隨兵の選擇——大江廣元
の諫告——仲章の反對——實朝の最期の歌——山鳩頼りに鳴く——細太
刀折れて凶兆を暗示す——雪降る夜——悼ましい實朝の死——公曉の人
物——公曉が復讐の念——公曉を煽動した策略家——淋しい公曉の一生

第四章 新時代に入る序幕

第一節 將軍繼嗣問題

一五二

承久の亂に於ける意義——各種懸案の解決——武家主義と民本主義の勝
利——武士道と北人文化の勝利——家族的專制主義の破壊——實朝の死
と京都の不安——鎌倉の動搖——京都より皇胤を迎へんとす——藤原兼
子の希望——地頭罷免の院宣——再度の奏請——上皇の思召——當年二
歳の頼經、將軍となる

第二節 武士生活に現はれた特殊色彩

一五九

貞永式目制定前の家族制度——總領と戶主、庶子と嫡子——次男が家督
を繼ぐ例——兩親の愛憎による家督問題——家長專制の風——出家入道
の風——女子が家督を繼いだ例——養子制度——財産の相續——所領の
争ひ——尊重された女子の權利——元服の式——儉約第一——頼朝の訓
戒——質素な服装——女子の風俗——武家邸宅——簡素を旨とした建築
——客間——殿舎——單純生活——贅澤せぬ飲食物——武士の無教養——
疎野で活潑な言葉——最大級の感嘆辭——木曾義仲の田舎訛

第三節 武士道の進歩

一七一

實地の鍛錬——弓馬の道の意義——頼朝の武藝獎勵——武的教養——軍
物語に對する熱心——乘馬始、弓場始の儀式——精神的教養の方針——
忠君の御念——報恩的行爲——三浦義明の潔い言葉——主人のみを認む

る忠君主義——勇敢な行爲——自我發揮——父子功名を争ふ——澁谷重國の情誼——武士と宗教——武士の團結——一騎打の戦争

第四節 貴族の生活状態

一七九

生活上に於ける公卿の不安——幕府の勢力に結び付く——公家の勢力挽回を計りし人々——無自覺派——紊亂した性的道徳——再三妻を取換へし實例——奢侈の風習加はる——長夜の宴——遊戯的氣分——本歌を作り代へる遊戯——一人で百首を一時に咏む風——公卿生活と武士生活の對照比較——舊時代と新時代を示す二つの傾向

第五節 討幕の計畫

一八六

承久戦役の諸原因——後鳥羽上皇の自信——急進主義の公卿——幕府崩壞を豫想す——政子と義時の政治的手腕——義時に對する誤つた觀察——西面の武士——上皇の士心收攬——討幕に參與した人々——上級公卿は保守的——下級公卿からの人選——葉室光親の達識——三上皇——祈禱修法の連續——紫宸殿に於ける祈禱——三浦胤義討幕計畫に加はる——城南寺の流鏑馬——伊賀光季召命を奉ぜずして誅せらる——諸國の僧兵集る——敵身方に分れた動因

第六節 承久戦役の序幕

一九六

義時の驚き——從僕押松丸鎌倉に入る——義時の態度——政子の熱切な訓示——一言一句悉く力あり——將士大に感泣す——大江廣元の策戦——政子の明斷——勝算なし——幕軍の勢力——義時其子泰時を激勵す——泰時の質問——義時落雷を恐る

第七節 幕軍の勝利

二〇一

官軍の強味と弱味——幕軍の主要人物と策戦——大勢は幕府に勝算あり——公卿顔色を失ふ——官軍士氣沈衰——幕軍破竹の勢——幕軍の連勝——京都の狼狽——僧兵上皇の命に背く——西園寺公經父子許さる——一日の休養——官軍よく戦ふ——宇治川の激流と信綱の先陣——八百餘人の溺死——泰時決死の覺悟を其子時氏に告ぐ——幕軍悉く河を渡る——幕軍入京す——上皇の院宣——後鳥羽上皇を四辻殿に遷す——三浦胤義らの最期

第八節 幕府の對朝廷策に於ける非難

二一〇

朝臣の處分——寛大な方針——葉室光親の男らしき態度——公卿ら斬らる——中御門宗行の悲痛なロマンス——逃亡者の最後——義時らの非禮不臣——天子を廢す——茂仁親王——空前の異例——三上皇の播遷——土御門上皇の淑慮——配所に於ける御生活——承久戦役と其得失

第五章 新しき時代へ

第一節 戦後經營……………二二九

幕府の經營——六波羅探題の設置——幕府の小模型——新補地頭の任命
 ——政治上に於ける大變革——新補地頭の權限——新補地頭の權暴——
 幕府の地方視察——土地の不當處分——土地率帳の調査——本補地頭と
 新補地頭の暗闘——義時行賞を辭す——兵糧米の撤廢——朝幕關係一變
 ——西園寺公經の全盛——幕府の積極的態度

第二節 義時の急死と北條氏の内訌……………二二六

事實上の日本統一——義時急死す——彼れの死因についての疑い——病
 氣のため——泰時も不臣の責あり——義時の大きい汚點——義時の聰明
 ——政治家としての長所——義時の價值——泰時執權となる——伊賀氏
 の隱謀——光宗らの運動——義時夫妻が女婿に對する愛——隱謀を生み
 し諸原因——三浦義村の態度——義村異心なきを盟ふ——政子緊急會議
 を開く——隱謀者の一分

第三節 舊人物の凋落……………二三四

舊人物の死去——大江廣元卒す——廣元の政治的眼識——政子歿す——
 政子、雄邁と堅忍——悲みを征服す——泰時が活躍すべき新時代——泰
 時の人物——泰時の人望——泰時の無慾——泰時と明惠上人——明惠の
 慈悲——政治上の要訣

第四節 民衆生活の片影……………二三九

庶民の地位——奴婢賣買——好感を以て見られた農民——浮浪人の續出
 ——卑まれた商人の地位——商人の種類——金錢思想の發達——有力な
 富者なし——女齒科醫——勞働者階級——白拍子と遊女——庶民生活の
 經濟的向上——遊女を禁止す——再び遊女設置を許す——桂女——僧侶
 と神官——僧侶の墮落益々甚し——「ぼろく」と稱した墮落僧——賣子
 ——出家入道の心持——實阿彌陀佛——入道した康信——賭博流行——
 賭博の勝敗から喧嘩を生ず

第五節 不安と出離思想……………二四八

天狗の活躍——天狗の惡戯——古狸と鼯鼠——姥に化けた狸——吉兆と
 凶兆——夢想——神佛の加護——神の應驗——盜賊の出沒——盜賊の巨
 魁交野八郎——和歌を詠んだ盜賊——自首して出た巨盜——金錢蔑視の
 思想——聖貧禮讚——無住國師の歌——無住の窮乏と淨土欣求——出離

生活者の一面を代表す——兼好の遣世——簡易生活の高調——趣味の樂園——「大事」の意義——一種のダレツタント——四季の風物に對する嗜好——戀愛の情趣

第六章 武家時代の産業狀態及び市政

第一節 鎌倉の繁昌と市政……………二六一

自然の要害——源光行の『海道記』と鎌倉の賑ひ——千萬軒の家——政教區域と商業區域——市場の所在地——政廳の有様——社寺の美觀——一種の障壁と七城門——一つの大きな城——鎌倉名物の谷——ヤグラ——商業上に於ける七種の座——幕府の商人に對する干渉——組合員の人數を制限す——酒の醸造についての制限——和賀江島——市政狀態と各種の奉行——盜賊を警戒す——市政上の一改革——六十一艘の買運船——鎌倉の缺點

第二節 交通の發達と東海道……………二六〇

鎌倉街道——交通進歩の一因——東海道に於ける旅行日數の短縮——早打注進——京都から太宰府へは十五日——普通京鎌倉間は十四日——頼

朝の交通政策——有益な施設——交通上に於ける一頓挫と種々の困難——東海道は最初六十三次——始めての宿屋——旅情を慰める遊女——東海道の旅——野路の篠原——醒が井の清水——橋本の宿——天龍川の危險——大井川の困難——江尻と清見ヶ關——足柄路と箱根路の分岐點——酒匂から鎌倉へ——設備の不完全——月影の洩れる宿屋——野宿——蟲の垂衣——白晝の盜賊——諸國家人の暴橫——沿道人民の困苦——奥羽方面は原始的——稍々開拓の緒に就く——強賊の出沒止まず——地頭の強慾——交通のために盡した僧侶——福泊——通行税の徵收——關錢を取る理由——兵庫津と東大寺——設備についての改善

第三節 商業上に於ける新傾向……………二六三

爲替の起源——京都市政の衰頹——戦後の京都に於ける不安——群盜の跋扈益々烈し——貧民の暴擧——宛然戰時狀態——爲替手形の流通——割符屋——支那で行はれた飛錢——宋の直便兌換——幕府の爲替保護——幕府の進取的傾向——問丸及び借上の制度——錢貨流通の趨勢——切錢使用禁止——貨幣本位となる——楮幣を用ひた最初——貫高法——度量衡の亂雜——國內の産物五十餘種——支那朝鮮からの輸入品——内地の公定物價——幕府の物價に對する干渉——無盡錢——土倉——一種の金融組合

第四節 武家的色彩を帯びた工藝

二九二

武家趣味と支那趣味——日本刀の名聲と御鳥羽上皇の愛刀趣味——御所作——粟田口の銘刀——岡崎正宗——甲冑製作の進歩——蒙古の甲冑——陶磁器の進歩——舶載の陶器——宋代に於ける陶器業の發展——加藤景正支那製陶法を活用す——唐物・古瀬戸——金華山窯——鎌倉彫——木蘭塗——根來塗——時代蒔繪

第七章 北條泰時の新政治

第一節 幕府の面目一新

三〇一

幕府の移轉——泰時の宣言——泰時の謙讓なる態度——合議制度と評定衆——新人物の擡頭——評定始めの儀——將軍頼朝の結婚——地方の小叛亂——皇族の名を詐稱した狂者

第二節 強硬な對寺院政策の徹底

三〇六

泰時の寺院に對する決心——僧徒の妄動——延曆寺僧徒の横暴——上皇僧徒の熱心を收めらる——連續せる僧兵の跋扈——泰時先づ高野山の僧徒を戒む——幕府の刀狩——石清水八幡と興福寺との争ひ——朝廷の寛

大な態度——興福寺の不平——幕府の要請——石清水八幡への警告——興福寺の嗷訴——淋しい正月——幕府興福寺を諭す——幕府に身方した僧隆圓——幕府嗷訴の首謀者を捕へんとす——興福寺の僧徒城郭を築く——幕府始めて大和に守護地頭を置く——興福寺始めて屈伏す——寺領を支配する國判衆

第三節 外交難と饑饉難

三二六

公卿の墮落——幕府、朝廷の叙位任官に干渉す——九條道家の勢力挽回——家實の失意——時氏病む——泰時の不幸——外交上の一案件——高麗軍來襲の風説——頻々たる船舶の難破——漂着人と海上多事——わが無頼の海員高麗を脅かす——高麗からの來牒——少貳資頼無頼の民九十人を斬る——肥前人高麗を襲ふ——寛喜の大飢饉——強震と不時の降雪——怪星空に現はる——泰時自ら食膳を減す——京の餓ふた民衆——妖言頻りに行はる——社會共產主義の片影——幕府の饑民救助法——浮浪人に對する處置——人身賣買を許す——後に至つて人身賣買を禁ず——地方の亂脈と民衆の悲況——四位仲兼の從者盜賊となる——浪人問題

第四節 貞永式目制定の由來

三三七

公家法制の歴史——制符の特質——訴訟裁判に關する著述——武家法制

の立脚點——貞永式目が生れた所以——公家法制的缺陷——明法家の淺識不學——法律に影響した佛教思想——檢非違使自己の職を罪惡視す——罪囚の冥福を祈る——主義として死刑を廢す——刑律も空文となる——刑罰の緩慢——貴族僧侶の犯罪に對する寛裕——武家側の信賞必罰主義——時政直ちに盜賊を斬る——時代に適切な法文の必要

第五節 貞永式目に含まれた思想と武斷的傾向……………三二六

裁判官の公平を支持するため——太田康連と法橋圓全——清原教隆は式目編纂に加はらず——式目の施行とそれについての宣誓——式目施行の範圍——公家に對する遠慮——泰時の自信——武家法制的精神と由来——頼朝と武家法制——武家に於ける色々の慣例——先例尊重——道理を根據とす——式目が含める道德思想——武家本位の道德——武斷的色彩——獨自の特色——式目の内容概略——追加法の作成

第六節 貞永式目を中心として見た家族制度……………三四五

何事も幕府存続のため——不自然な家族制度——幕府の方針——絶對的に近い親の權利——父は家庭に於ける專制君主——封建制度と嫡子相続法——總領の任務重大——財産の分配率——兄弟會議——一人の繼承者を互選す——養子の許可——讓狀——讓狀の内容——財産相続について

の紛議——不利な子の立場——色々の訴訟事件——不幸な兄——弟の勝利——幕府の保護——財産取戻は親の任意——安堵狀——女子の權利——妻としての權利強し——子女の權利——父子義絶の實例——義絶されても公人としては差支なし——義絶から復縁——若い僧の戀——娘の勸當を許す——個性抑壓

第七節 政局に於ける變調……………三五六

藤原氏の慣習に従へる弊害——道家の實權把握——道家一族の全盛漢望の的となる——美人短命——後堀河上皇の好學——上皇の崩御——公武の不幸續出——怨靈思想の蔓延——道家の二女、近衛兼經に嫁す——西園寺公經の調停——頼經の上京——北條時房三浦義村の卒去——後鳥羽順德二上皇の崩御——四條天皇の崩御——後鳥羽上皇の望み空しくなる——奇怪な巷説——怨靈の祟り——困難な大問題——泰時三日三夜寢食を忘れて考思す——泰時神慮を伺ふ——幕府の決意——忠成王と邦仁王——源定通の内部運動——薄倖な半生を送つた邦仁王——幕使容易に到らず——邦仁王擁立に決す——幕府非難の聲——西園寺系の人物勢力を占む——泰時歿す——泰時の功績——疑ふべき心事なきに非ず——歌人としての泰時——北條政村の歌

第八章 鎌倉文化の興隆

第一節 三浦一族の滅亡……………三九〇

幕府の小動搖——頼經の政治的野心——北條氏の冷酷な態度——幕府慣用の密計——頼經の心事——頼朝將軍となる——頼經の出家——經時歿す——名越光時の野心——光時の失敗——頼經京へ追ひ歸さる——三浦氏の叛亂——三浦父子の倨傲——安達景盛と三浦氏との争ひ——景盛三浦一族を倒さんと計る——泰村と光村の性格——頼經と光村の關係——阻はれた三浦一族の運命——北條氏、幕府の根據地を悉く手に入れんとす——先づ畠山和田二氏を倒す——邪魔になる三浦氏——三浦氏の亡滅は時の問題——頼經の策略——北條氏の挑撥手段——景盛一族不意に三浦氏を襲ふ——三浦氏の悲痛な最期——千葉秀胤父子殺さる——景盛の退隱

第二節 宮廷政治家の盛衰……………三七七

頼經の隱謀事件の影響——道家の關東申次——道家の勢力大に減す——道家が家庭に於ける憤み——父と子の烈しい争ひ——實經の不運——後嵯峨上皇の勵精——六人の評定衆——院政の刷新——道家其次子に遺産

を與へず——良經と時頼の握手——良經幕府の勢力に縋る——道家の急死

第三節 鎌倉文化の特質……………三六三

民衆的色彩——平安文化と鎌倉文化——濶濶とした生氣——宗教の民衆化——文學も武家の色彩を帶ぶ——貴族文化の打破——鮮明な日本の色彩——政治、文學、法律、宗教の日本化——日本人の缺點——日本の精神の反映——民力ある文化——警察制度の振奮——裁判制度の進歩——善政思想と社會政策——經濟交通方面に於ける進歩の緩漫——時代の新人としての北條時頼——鎌倉文化興隆期のベトロン——當年二十歳の執權——時頼の母松下禪尼の庭訓——禪尼自ら破障子を繕ふ——儉約を重く見た政治——引付の新設——權利思想の發達——訴訟の三種類——訴訟事件の處理——行届いた審理——原被兩造の三問三答——再審上告——裁判開始から判決を下すまで——判決文は勝訴者へ——直訴

第四節 禪宗の勃興……………三九四

宗尊親王を將軍に擁立す——幕府の宗教政策と禪宗保護——禪宗の好運——有名な禪僧——道元と榮西——臨濟禪と曹洞禪——道元の閱歷と修養時代——始めて禪宗に接す——道元の入宋——歸朝後の道元——越前

内容目次

永平寺に赴く——山上に於けり禪刹——道元と時頼——上皇より紫衣を賜ふ——道元の文書傳道——支那に於ける禪宗——禪宗の起原——心から心へ——禪宗の標語——靜慮——事理圓融の境地——「事」と「理」——圓融無碍——本來心を徹見す——對悟の座禪を排す——道元が解釋した座禪の意義——修行を尙ぶ——日々の生命を尊重す——辨圓——藤原道家の歸依を受く——辨圓の門下——隔世の感

第五節 渡來の支那禪僧と其影響 四〇六

禪と日本文化——支那禪僧渡來の事情——道隆——建長寺の建立——禪寺の稱號の最初——剛大の氣——日本に於ける禪師號の最初——兀庵——兀庵先づ時頼らを驚かす——武人本位に説いた禪の要訣——寸刃を施さずして覺悟を辟く——武人が禪宗に共鳴せし理由——大休——子曇——祖元——祖元の氣膽——祖元が時宗に與へた訓言——祖元の蒙古襲來豫言——一山——一山の學識——梵語に精通した石梁仁恭——禪宗勃興の現象——日本禪僧の輩出——禪宗の地理的分布

第六節 禪宗と武家文化 四一五

時頼の禪味——時宗の徹底した禪境——戦死前の遺偈——長崎高重が決戦前の參禪——菊池武重らの禪三昧——玄關と書院——三種の建築様式

——和様と唐様——觀心寺様——唐様——圓覺寺の舍利殿——配置の具合——牡丹唐獅子と寶相花唐草——造庭林泉上に於ける影響——池、島、瀧——遣水——立石の趣味——過渡期の現象——茶と禪味——榮西が茶を推奨した所以——禪學上の見解——醫學上からの見解——茶の保健的効果——梅尾は日本第一の茶所——宋元の畫風輸入——肖像畫

第九章 宗教改革の新聲

第一節 佛陀の豫言と末法思想 四二四

日本的宗教の渴望——有識者間に瀰漫した末法思想——五濁惡世——正像末の三時——墮落の世相——五箇の五百歳——『大集經』に於ける佛説——戒定慧の三學——歴史眼に映つた世相の推移と成佛の道——圓淨堅固——佛教史上の趨勢——讀誦多聞——佛滅後一千五百年の時代以後——奈良の大佛と佛教美術——道綽の豫言——末法についての説——救世の念願——親鸞の末世觀——日蓮の末世觀——白法隱没——世紀末思想——いりも深酷——純日本的佛教生誕の時

第二節 親鸞の半世 四三三

眞宗の特質——佛教改革運動の叫び——人間味の多い宗教——早く味つ

た生の悲み——叡山に學ぶ——奈良に赴く——聖徳太子の示現——努力
 精進——興福寺の經藏に入る——『華嚴經』を講ず——内部精神の動搖——
 眞生命への憧憬——法然を訪ふ——法然の教示——無明長夜の夢醒む——
 一生の大轉機——自力修行から他力修行へ——一身上の變動——兼
 實の質問——僧俗に對する功德に差別なし——結婚問題——僧侶の偽善
 を打破せんとす——性慾の懺み——美しい玉日姫を娶る——浄土宗を咀
 ふ叡山の人々——親鸞に對する不常な嚴罰——越後の流浪生活——暗き
 曠野に起ちて——親鸞の布教

第三節 浄土眞宗の提唱

法然の訃報を聞く——傳道のため關東巡回——親鸞の弟子——新しい家
 庭——聖フランシス教團と眞宗教團——同朋同行——同行らの分布地——
 門徒と先徳——高田門徒——労働と聖賢——教信沙彌の德行——傳道
 のための道場——教團の制規——新宗旨を説いた著書成る——親鸞の信
 仰生活——今昔の感——質素な生活——念佛者取締の沙汰——小波瀾——
 文書傳道の大成——質實な態度——雋銳な氣風の閃き——隱遁生活の
 二十三年間——親鸞と『浄土宗傳燈系譜』

第四節 浄土眞宗の教義

若き時の親鸞が見た時代——幻滅的人生——貴族文化の頹廢——北國に
 於ける試練——平凡人のための宗教——親鸞の人物と性格——念佛成佛
 是れ眞宗——二雙四重の教訓——易行中の易行——眞宗の要點——彌陀
 の手に惡人賤婦も救はる——久遠の彌陀——浄土和讃の特色——彌陀の
 光明を咏嘆す——女子の五障三從——女人嫌厭の思想

第五節 日蓮の修養時代

日蓮と親鸞の比較——鎌倉時代の宗教的巨人——新時代の氣運——更生
 を象徴する時代——哀世的と光明的——日蓮が見た當時の佛教界——佛
 陀の本懐を求めて——日蓮を生んだ國——天照大神の御厨のあるところ
 ——旃陀羅が子——日輪を拜む母——奇瑞——日本第一の智者たらん
 ——二十一日間の祈禱念願——燦爛たる寶珠——鎌倉遊學を志す——鎌
 倉に於ける名僧——留學三年——叡山及南都へ——俊範に従學す——天
 台、傳教の正系——諸方に遊學——胸中疑團の氷解——法四依——日蓮
 の覺悟と決心——故郷へ歸る

第六節 日蓮宗の開創

靜かな森の祈り——清澄山上の黎明——太陽に向つて開宗を宣す——一
 大勇氣——最初の信念告白——浄土宗、禪宗を排す——日蓮に向つて怒

りを感じた人々——確乎とした信念——釋尊に従へ——最初の法弟は父母——鎌倉に入る——第一の高弟日昭——道路布教——眞實な叫び——迫害加はる——淨土宗を非難する所以——禪宗を攻撃する所以——眞言を撃つ所以——律を斥くる所以——四箇格言の根據——折伏の必要——天變地異の續生——『立正安國論』を時頼に上る——無意味の祈りを排す時頼は日蓮を解せず——草庵焼失す——下總方面の布教——神道研究の傳説——伊豆へ流さる——伊東朝高の歸服

第七節 法難續出と上行菩薩の自覺

小松原の刃難——日蓮負傷す——日本一の法華經の行者——日蓮諸大寺に警告状を與ふ——蒙古國の使來る——日蓮から警告を受けた人々——正法に目ざめよ——日蓮豫め死罪を覺悟す——再度の諫告——日蓮排斥運動——眞觀を難詰す——眞觀の人物事業——小乗戒に拘泥す——日蓮反對者の疑議——行敏と日蓮の論戰——行敏敗北——叔尊から戒を受けた貴婦人——貴婦人ら眞觀に同情す——龍口法難起る——死の島へ——峻烈な迫害と日蓮教團の困難——日蓮から離れ去るもの多し——日蓮教團の瓦解状態——日蓮の佐渡生活——阿佛房の歸服——重要著述成る——日蓮赦されて鎌倉に歸る——身延に於ける文書傳道事業

第八節 日蓮の教義及び思想

波瀾多き一生——日蓮の眞意——日蓮の宗教に於ける特徴——支那に於ける佛教の發達——天台大師の出現——天台宗は佛教の正系——新宗教起る——妙宗出現の意義——正しい佛教の統一——思想上に於ける美點——轉合的美觀——國家的現實的の色彩——世界宗教の最後歸着所——日蓮の複雑な人格——多角的——内部から統一——親鸞と日蓮の人格對照——巨江と秀峰の趣——日本人中に於ける傑出せる風格——日蓮の教判と五綱——五綱の意味——五段相對と五重三段——佛教に對する史的內在的批判——其歸着點——民衆の知識程度——精密な考察——法華一乘の國——教化の順序方法——上行菩薩の使命——本門と述門——三大秘法——「一」と「三」の妙趣——法身、報身、應身との三身——「妙」の一字——本迹兩門に於ける十妙——宇宙の至美、至善、至眞——本門の本尊と本門の題目及び戒壇——法國冥合——近代的解釋——「事の一念三千」——天台大師の思想——内觀的に見た「理の一念三千」——心理學的發達の至極——三千世間と一念——十界の内容——六凡四聖——地獄的と佛的——十如是——體用因果及び本末究竟等——十界十如の法則——一草一木一微塵にも三千世間を具有す——日蓮が尊重した「事の一念三千」——國性開顯と變的世界統一

第九節 新興宗教の宣傳と文書傳道に伴ふ出版事業……五二七

熱心な傳道——法然の大原談義——旅行して六十萬人を教化す——奥羽地方巡教——辻説法——一千六百回の説教——宗教文學——副産物——遺文について史家の説——生命ある文章——文章上から見た法然、親鸞、日蓮——一番多く文を書いた日蓮——法然の文章——親鸞の文章——日蓮の文章——佐渡時代の偉大な文章——身延時代の圓熟味——遺文の上に現はれた私的生活——日本文學中に傑出した自傳——代表的文章——珠玉の如き短文——活社會の問題を批判す——實生活と宗教の光明——最初の印刷事業——佛典印刷——經文の書寫に一萬餘人の協力——一切經書寫のため一萬三千餘人の僧集る——冥福を祈るための佛書印刷——最初に出た法然の著書——印刷業者の状態——高野山の出版事業——興福寺の出版事業——地方に於ける出版

第十節 新神道の展開と本地垂迹説……五二八

時宗と熊野權現の靈告——神佛習合の最初——本地垂迹思想の片影——鎌倉時代に於ける進歩——佛本神迹説と神本佛迹説——本地垂迹説の起源——神は衆生中にあり——佛教思想で解釋した日本の神々——眞言神道——天台神道——日本的自覺の上に起ちて——公顯の神本佛迹思想

——三身三諦の理と神祇——五種の神——天照大神の垂迹と釋尊——度會行忠の神道説——幼稚な宇宙觀——神書五部作——五部作の内容——伊勢神道の發達——神の三分類——新神道の芽

第十章 國難と國民意識の進展

第一節 流行病と天災地變……五三七

北條氏に附随ふ黑影——義時の病的傾向——消化器病と神經病——怪異を見た重時の狂的發作——政村の女唄はる——同族骨肉間の鬭争——北條氏一家の短命——悲惨な死を遂げしもの多し——京都政治家の腦疾患——病因不明——當時の疾病——一萬人の癩病者——臨時に將棋を差す——近衛家實の療養法——針博士——各種の悪疫——火事と地震の頻發——大地震續く——正嘉の大地震——修羅の巻——死者二萬人——永仁の大地震——死者二萬三千——大疫癘流行す——平然として死を恐れざるに至る——灰色の世界

第二節 京都文化の流入……五四四

京都文化の色彩——時頼の武藝獎勵——武士の京風増加す——歌仙とし

て知られた葉室光後の下向——一目千首和歌會——『宇治川集』の貶稱——
 藤原爲家——定家の政略手段——越部禪尼の嘆息——和歌と世俗的地位との關係——二條家と六條家との争ひ——歌人としての爲家——文學の俗化——阿佛尼——歌道の争ひと政權の争ひ——傳授に囚はれた和歌——小説の不振——『源氏物語』の研究——河内本——隨筆文學と佛教思想——清淨受胎説——軍紀文學——『平家物語』——『神皇正統記』と『愚管抄』——文學の民衆化——宗教文學の生産——京都文化の流入

第三節 時頼の晩年……………五五

僧良賢の謀叛——時頼歿す——北條政村——時頼の廻國説は虚偽——假空の人背砥藤綱——早熟の人時宗——政村が執權としての特色——五攝家の成立——五攝家と時頼——二上皇の關係圓滑を缺く——兩統迭立の遠因——落書によつて政治上の缺陷を諷す——暫く政權争奪の跡を絶つ——宗尊親王の異圖——悲痛な親王の逆運

第四節 蒙古の國勢と野心……………五三

空前の一大危機——歡樂の夢破らる——成吉思汗の覇圖——第二回歐洲遠征——恐るべき戰禍——ローマ法王の特使——高麗の亡命客趙鼎——忽必烈の野心——高麗、日本の國民性を知る——高麗の意向——國信使

潘卓——蒙古の國書頗る暴慢——威嚇的文句——朝廷に於ける元老會議——返牒を與へず——時人の蒙古に對する感想——法皇の憂慮と祈禱——時宗の地位

第五節 第一回の來襲……………五七

蒙古の出征準備——菅原長成の答書——日本は神國也——幕府の硬論——宏覺禪師の蒙古調伏——忽必烈怒る——趙良弼來る——日本の國防についての用意——高麗、日本との交通を絶つ——趙の日本國情偵察——忽必烈の決心固し——政村歿す——龜山上皇の院政——時宗の祈願文——四海平和の祈り——蒙古襲來——宗助國らの戰死——蒙古軍の殘暴——日本軍の勇戦——彼我戰術の相違——蒙古軍の節制ある進退——鐵砲——九州武士も倂易す——暴風雨にて敵艦覆没——蒙古軍の死者一萬三千五百人——朝廷の震駭

第六節 日本の外征計畫と第二回來襲……………五六〇

幕府元使五人を斬る——北條宗頼長門守護となる——蒙古人用心番と北條實政——四里に互る石壘を築く——外征計畫——武田信時——出征人員の調査——無理な計畫——士氣大に振作す——降服軍の始末——時宗の沈勇——元軍の來襲——我軍の夜襲——河野通有の意氣——通有負傷

に屈せずして敵將を捕ふ——大友貞親の善戦——颯風大に起り元艦覆没す——張禧の勇氣——上皇身を以て國難に殉せんとす——日本の大勝と神風の説——第三回侵略の準備——蒙古襲來についての文化的意義と考察——愛國心と國民的自覺——海外貿易の發展——元人日本の復讐を恐る——勇敢な日本人——禪僧雪村友梅の沈毅——支那文化の刺戟——マルコ・ポロの日本紹介——幕府の經濟的窮迫——恩賞を與ふべき餘裕なし——武士の驕りと窮乏——行賞のため二十餘年の苦心

第七節 德政令の發布と武人社會の經濟的疲弊……………五九四

幕府の財政的窮迫——財政の基本——所領の意義——所領に附纏へる弱味——色々の領主——複雑な所領——一圓の地——弱味に對する防禦法——時代の推移——文化の進歩と武士の京都化——奢侈の傾向——生活難の波——所領の質入賣買——表面の體裁を繕ふ——御家人の苦境——承久戦後に於ける經濟的影響——四一半博奕の流行——土地臺帳の整理——幕府の禁令——軍費支出上の苦心——融通の利かぬ時代——蒙古襲來後の御家人、非御家人の生活難——頻々たる恩賞の要求——德政令の發布と德政の意義——德政的傾向——朝廷の德政——德政令の内容——債權者の大恐慌——金錢融通の途塞がる——債權者の應急手段——德政文章——貧民救助の意味——社會共產主義の傾向

第十一章 鎌倉末期の狀勢

第一節 金澤文庫の創設と新興の儒學……………六〇五

政教上の小波瀾——注目すべき現象——北條實時の人物——實時の好學——清原教隆の藏書趣味——文章博士仲章の書籍蒐集——實時の藏書についての熱心——金澤文庫の設立——主として政法經濟の書を蒐む——臨終に當つて『群書治要』の校訂——金澤文庫の功績——宋學徐ろに起る——『論語朱註』の開版——龜山天皇の禪宗に對する熱心——後醍醐天皇と宋學——文學を好まれた花園天皇——僧玄慧——學問研究の新傾向——花園天皇の識見超邁——僧侶の手によつて傳へられた宋學

第二節 皇位繼承問題と北條氏の滅亡……………六一三

龜山、後深草二上皇の不和——兩統分立の形勢——大覺寺派の失望——龜山上皇の出家について——巨盜淺原爲頼宮中に闖入す——色々の風説起る——伏見天皇の宸怒——大覺寺統の即位運動——爲兼の配流——幕府の態度——兩統迭立の議——吉田經長の東下——兩統迭立の勢漸く定る——北條氏の僭越——後醍醐天皇の王政復古計畫——人材拔擢と德政建議——北條氏の失政——長崎高資の專恣——幕府の無力を暴露す——

倒幕策の進行——楠木正成の義兵——一頓挫——鎌倉及び六波羅陥る

第三節 武家趣味、佛教趣味の美術……………六二二

鎌倉期に於ける繪畫の特質——大和繪の進歩——住吉慶恩と藤原隆信——藤原信實——歴史畫の代表作——蒙古襲來を畫ける傑作——宗教畫の勃興——宗教の勢力と繪畫——新しい肖像畫——日本最古の肖像畫——唐の手法と肖像畫の興趣——面貌上の個性發揮——物語畫と風景畫——彫刻界の特色——康慶の作品と運慶の優秀な技倆——威力的な彫像——外部的緊張——運慶を中心として——鎌倉の大佛——佛像以外の彫像——書法の一進歩

第四節 社會生活と趣味生活……………六二九

どん底の社會——穢多の首領彈左衛門の祖先——特殊の職業團體——穢多の名稱——佛教家の穢多排斥——爲政者の非常識的差別觀——穢多の變遷——人買業の流行——人間の買入——變形の人身賣買法——幕府、人買商の存在を認む——當路者の賤民に對する冷淡——「一揆」の語——社會事業——社會奉仕的な事業の實現——慈善病院と救貧——禁酒運動——平家琵琶の特懸——田樂の流行——高時と賴法師——田樂の種類——囃入の大假裝行列——日本演劇の起原——呪師猿樂——一種の樂劇——

——延年の舞——賴朝の舞樂獎勵——延年頭——開口、連事、風流——猿樂の勃興——今様と宴曲——曲舞——枕飯——將軍宣下の大儀——武家の紋と公家の紋

(目次終)

圖畫目次

圖 版

元寇役……………	卷 頭
配所の法然上人……………	八〇—八一
武士の住宅……………	一六〇—一六一
黒木御所址……………	二〇八—二〇九
旅行の有様……………	二七二—二七三
日蓮『立正安國論』を獻ず……………	四六四—四六五
一遍上人の弘教……………	五二八—五二九
長濱の石壘址……………	五九二—五九三

* * * * *

挿 圖

源頼家畫像……………	四
梶原景時木像……………	六
文覺上人像……………	二〇
源頼家廟……………	四五
北條義時花押……………	五二
俊乗坊重源像……………	六八
法然上人畫像……………	七三
源實朝木像……………	一〇八
藤原定家像……………	一一九
大江廣元書狀……………	一四五
藤原頼經像……………	一五八
櫓 門……………	一六七

貴族の生活……………	一八三
北條泰時花押……………	二〇八
明恵上人像……………	二二七
鎌倉時代の遊女……………	二四三
博奕打……………	二四六
鎌倉地圖……………	二六三
商 人……………	二六五
鎌倉時代に於ける民衆生活……………	二七〇
蒙古軍の兜……………	二九五
北條時房花押……………	三六二
藤原頼嗣花押……………	三七二
北條時頼木像……………	三九〇
建長寺山門……………	四〇八
佛光禪師像……………	四二二
書院床……………	四二七

圖畫目次

親鸞上人筆蹟……………	四三四
清澄山二王門……………	四六九
日蓮上人畫像……………	四八三
一遍上人像……………	五一八
藤原爲相像……………	五四八
北條時頼墳墓……………	五五六
北條政村花押……………	五五八
忽必烈畫像……………	五六七
北條時宗花押……………	五七〇
龜山上皇銅像……………	五七五
筑前今津の石壘遺趾……………	五八二
マルコ・ポロ……………	五九一
北條實時畫像……………	六〇六
後宇多天皇宸筆……………	六二三
北條貞時花押……………	六一四

龜山天皇御木像……………六一五

北條高時花押……………六一九

運慶木像……………六二六

琵琶法師……………六三四

鎌倉時代後篇

第一章 頼朝歿後の政治的形勢

第一節 幕府の不統一曝露

中心人物を失へる鎌倉

すべのて事物は中心を失ふと、不安と動搖とを生ずることを免れない。鎌倉幕府は、其中心人物となつて居た頼朝が歿して大倉山の法華堂に葬られると、間もなく、不安な空気が鮮明に現はれ始めた。ひとりそれは、鎌倉ばかりでなかつた。京都でも、何となき動搖の色がほの見えて來た。在來、頼朝の人格的重量によつて、一切の不平や暗闘を抑へ付けて、兎も角も平靜を保つとを得たのが、今其重量が取除かる、に及んで

暗い蔭に潜んで居た所の不平、暗闘の活劇が漸く露骨に明るみへ出て來たのである。蓋し鎌倉の將士は、何れも實力を備へて、蠻氣、霸氣があり、質實剛健の性質を有して居たから、之を統御してゆくのは可也に困難なことであつた。畢竟、頼朝の名望と大才とを以てして始めて統御し得たのである、而も頼朝在世の時分から、武權派と

頼朝時代
の暗闘

文権派との暗闘の色合が既にほの見えて居た上に、頼朝の措置に對しても亦窺かに不平を抱いて居たものが相當にあつたのである。例へば、頼朝の帷幕に參して政治上に寄與した大江廣元、三善康信及び彼等と提携した梶原景時らに對して、和田義盛、三浦義村らの武權派が強い反感と不平を抱いて居た。また頼朝が常に北條時政を抑へて、問注所、侍所の長官たるべき地位を時政に與へなかつたとは、時政の胸中に大きな不満を起さしめた。尙ほ一歩進めて云ふと、頼朝自己の立場からいつも文權派の云爲を可として成るべく、武權派を抑へ付けてゆかうとした態度は、陰に武權派の喜ばない點であつた。けれども頼朝の人格的重量はさした不平、不満をやつと抑へ付けて來たのである。ところが、其重量が頼朝の死と共に消滅すると、鎌倉の將士は在來、我慢に我慢を重ねて來た不平不満を一時に放出しなければやまない勢を示し始めた。京都でも、矢張不安の空氣が仄かに動いて居た。頼朝の死を以て、朝家の一大事と見做し、或は國家の動搖を生じはしまいかと見たものがあつた。それに源通親の反幕府的な態度が、一時京都の朝廷で勝利を占めるやうな趨勢を馴致したとが幕府の勢力を減少する一因となつた。かうして北人文化を代表して居た鎌倉と南人文化を代表してそれに對抗して來た京都とは、ひとしく、頼朝の死によつて落着きを失つた形となつた。

爆發せんと
する不平不
満
京都に於け
る動搖

つた。そしてそれから新しい形勢が生み出されようとした。此時幕府では、頼朝以上の人物又はそれと同等の俊傑を要したのであつたが、實際では、それに反對な現象を見た。正治元年正月、頼朝の後を繼承した頼家は、單なる貴公子であつた。當時彼れは年齢十八歳で父祖の辛苦を知らずに華美な空氣中に生長したので、政法、軍事の知識に乏しく、將士を統御してゆくだけの力量手腕にも缺けて居た。或史家は彼れを一概に暗愚だとして居るが必ずしもさうではなかつた。寧ろ彼れは、貴公子風を帯びた直情徑行の人で、血氣に逸り輕躁に傾いたところがあつた。それに父頼朝のやうに政治上のことに精勵する風が彼れにはなかつた。唯京都文化を憧憬して蹴鞠や宴遊や漁色に耽り、青春の享樂に身を委ねようとする傾向が強いのみであつた。彼れが、かうした人物、性格を以て不平、不満の空氣が濃厚に漲つて居た鎌倉幕府の中心に居るとは、寧ろ彼れのために大きな不幸であつた。

頼家の周圍には、險惡な形勢が絶えず見えて居た。殊に多年、頼朝の事業を助けて來て、而も其地位の向上を望んで得なかつた北條時政の眼が鋭く異様に光つて、頼家の運命を呪咀する様に見えた。けれども頼家はさうしたとに少しも氣付かなかつた。彼れは鎌倉幕府が如何にして組織されたか、また如何な人物によつて支持されたか、と云ふこ

頼家の性質
と人物

を少しも考慮の中に加へなかつた。そして彼れは其小主觀の命するがま、に行動した。私的感情の奔逸するに任せて、それを理性で調攝するのを知らなかつた。彼れは其嬖臣小笠原長經、比企宗朝、同宗員、中野能成らに取巻かれて、宴樂の日を送つた。彼れは、それらの嬖臣の云ふとばかりを聞いて、幕臣中に於ける先進、耆宿らの云ふとを兎角輕視する風があつた。そして私情に驅られて、政務を妄斷する弊風があつた。さうしたとは、彼れの母、政子が打捨て置かれぬと見た點であつた。それは、將軍の威令が前代のやうに行はれぬ恐れがあるからだ。



源頼朝家畫像

以上のやうな事情から、政子は、正治元年四月十二日、訴訟事件について、爾後頼家が獨斷專決すること^(三)を一時停止した。そして北條時政、同義時を始め、大江廣元、三善康信、中原親能、三浦義澄、和川義盛、八田知家、比企能員、藤九郎蓮西、梶原

頼家に對する束縛

景時、藤原行政らの十三人の合議制によつて、訴訟を裁斷することにした。北條氏は時政父子が共に合議員に加はつて、權勢上、優越した形を示した。かうした合議制が實施されて以來、頼家の權力は少しづつ、削減されるやうになつた。それに對して頼家はひどく不快を感じた。彼れは、政子、時政らの爲すところが、將軍を無視したものだとして、強い反感を抱いた。其一端は早くも一週日後に現はれた。其時、頼家は自ら令を發して、其嬖臣小笠原長經以下五人のものが鎌倉で如何に狼藉を働くとも、彼等に向つて何人も抵抗することを禁ずると同時に、彼等五人の外は召命がなくて頼家に見ゆることを固く禁じた。それらのことは、一層鎌倉に於ける將士を悦服させる力を弱めた。果然、正治元年十月、武將六十六人が一致して、梶原景時排斥運動を起した。それが先づ、頼朝歿後の幕府不統一を曝露した第一歩であつた。

梶原景時は、有り餘る才幹のために頼朝在世の時から衆怨の中心となつて居た。彼れは元來、平氏に屬して居たが、頼朝の危急を石橋山で救ひ、後、頼朝の勢威が漸く加はると、土肥實平の手を誦じて、頼朝の麾下に降つた。彼れは武邊一方の人物ではなかつた。文事の素養があり、且つ政治家らしい冷酷なところがあつて、好んで他の弱點を剔抉するに妙を得て居た。さうした點が、殊に頼朝の忍克な心に投じて、次

排斥された梶原景時

第に重川さるゝに至つた。

それで景時は、自己の才幹や頼朝の寵を恃んで、傲慢の風を増長させ、誰れ彼れの差別なく、凌辱を加へて自ら快とする風があつた。範頼の如きは、度々、景時のために壓倒され勝ちであつた。義経は景時の暴慢を憎んで、事毎に其鋭鋒を挫いたので、景時の毒舌に罹つて、頼朝との間を疎隔された。既に頼朝と兄弟の間柄であるところの範頼、義経に對してさへ、此通りであるから、景時が他の諸將に向つて、如何に傲慢で、苛酷であつたかは略々想像し得らるゝことである。



梶原景時木像

彼れは侍所所司(次官)を以て、既別當を兼任して居たが、尙ほそれを以て満足しなかつた。建久三年、或日、別當和川義盛の喪に通る機会を利用して、侍所別當(武官統領)の名を假りたいと切望したので、義盛が喪に籠つて居る間だけ、其職に補せられた。ところが義盛の喪が終つてからも尙ほ其職に留つて、ひどく義盛の感情を害したことがあつた。けれ

ども景時は、一向、さうした自己の缺點を反省しなかつた。そして文權黨の領袖大江廣元、三善康信らと結託して、いつも武權黨を抑へ付ける先驅となつた。また彼れは曾て鎌倉幕府に向つて反抗した城資永らを容れて其身方とした。また彼れは頼朝が力めて武將の勢力を滅殺して、子孫のために害となるものを除かうとする下心があつて、景時の云爲を制禦しないのを知つた居て益々跋扈した。彼れの鋭い舌は、毒蛇のやうに必ず人を傷けなければやまなかつた。此事は鎌倉中の將士を憤慨せしめて、文權黨に對する憎惡を強めさせた。けれども頼朝が生きて居る間は、何れも胸を抑へて沈黙を守つて居た。

景時は、頼家の世になつてからも、尙ほ頼朝在世の時とひとしく、權力を揮つて人を凌いだ。和田義盛、畠山重忠、三浦義村らは、武權黨の領袖として、景時の暴慢に復讐しなければやまぬと切齒した。今、頼朝の死は彼等に其好機を與へた。そしてまた一方では、義盛らを激發せしむべき事件が持ち上つた。それは、景時が例の如く、其毒舌で結城朝光、安達景盛らの中傷したからである。

正治元年七月、頼家の好色と景時の毒舌とのために、鎌倉中が大騒動を惹起さうとしたことがあつた。事の原因は、安達彌九郎景盛の蓄妾にあつた。景盛は元宮女であ

つた美人を京都に求め得たので、人知れず圍つて楽しんで居た。其女は容貌の優麗な點で、鎌倉中に類がないと云ふほどであつた。ところが漁色の傾きがある頼家は、景盛の愛妾の事を聞いて非常に心を動かした。彼れは主君の威光を亂用してまでも、景盛の愛妾を奪ひ取らうと思つた。そして窈かに其好機の來るのを待つて居た。

ところが正治元年七月、室平四郎重廣が強盜の群を率ゐて三河に武威を揮ひ、庶民を惱ましてやまぬとの報があつたので、頼家は景盛を呼んで其討伐を命じた。景盛は其愛妾と暫しの間も離れかねて、一應使命を固辭した。けれども頼家はどうしても許さなかつた。景盛も仕方なしに悵然として三河へ赴いた。其不在中、頼家は景盛の愛妾を召出して、留めて歸さなかつた。

そこへ景盛が間もなく、三河の亂を平定して鎌倉へ歸つて來た。其時、彼れを失心せしめたのは、平生殊愛を加へた愛妾が頼家の手に奪はれたことであつた。彼れは日夜、其事のみ思ひつめて、頼りに煩悶し、且つ頼家の不法を怨んだ。それらの事を見て、景盛を讒しようとしたのは梶原景時であつた。景時はいつもさうした機會を利用することをよく知つて居た。で景時は頼家に向つて、景盛が愛妾の事から、ひどく頼家を怨んで謀叛の様子があると云ふ旨々虚構して告げた。それを聞いて、頼家は一圖

景時に讒せられた安達
景盛

に景時の言を信じ、小笠原其他の嬖臣を集め、先づ景盛に一撃を加へようと氣色ほんだ。

其事が、間もなく頼家の母政子の耳に入つた。政子は景盛に何の罪もないことを知つて居るので、非常に驚いて先づ景盛の邸へ駈付け、人を頼家の許に急派して、特に説諭を加へた。「先君薨後^(四)まだ幾日も経たぬ上に姫(次女三幡)が次いで世を去り、私は悲歎に暮れて居る。そこへまた劍戟を動かすやうなことがあつたら、亂世の源をなすであらう。景盛には少しも罪がない、まして先君が憐愍された人である。今彼れを殺さうとするのは非法である。若しどうしても彼れを殺さうとするなら、先づ妾が箭に中つて死なう」。頼家もかう云はれて、止むなく、景盛を殺すことを思ひ留まつた。此事は、政子の權威ある諫言によつて一段落を告げたが、景時が景盛を讒した一事は、武權派の憤りを激増せしめた。

かうして景時は益々衆怨の的となつて居た折柄、彼れが新たに繰返した中傷手段は、到頭彼れを自滅へと導いた。當時、結城朝光は頼朝の冥福を祈り、其厚恩を追慕して、「忠臣は二君へ仕へない」と述懐したことがあつた。景時は、不圖それを聞いて牽強附會の説を朝光の片言隻句に結び付け、頼家に讒した。其事をやがて阿波局から朝光へ

政子の切諫

景時再度の
讒言

三浦義村の
慨嘆

話したので、正直な朝光は非常に驚いた。彼れは其親友三浦義村の許へ駈付けて、「一身上に大事が出来た」と告げた。そして景時のことに及ぶと、義村は慨歎して「今度の難儀は救ひ難いかも知れぬ。凡そ文治以來、景時めの讒言によつて、命を殞したものは数少くない。景盛が誅せられようとしたのも彼れの毒舌に罹つたからだ。君のため、世のため、速かに彼れを除かねばならぬが、干戈に訴へて勝敗を決するのは、世を亂す恐れがある。寧ろ宿老たちに此事を話して對策を講ずることにしよう」と云つた。そして直ぐに使を宿老らの許へやると、和田義盛、藤九郎運西らが義村の邸へ來た。

で、義村から、朝光の事や、景時の讒言などを詳しく話すと「景時めまた有爲の士を舌の先で失はうとするのか？速かに同意連署して景時の横暴を幕府へ訴へ出ることにしよう。萬一、吾々の訴へが採川されない場合は、死生を持つて極力諍ふよりほかはない」と義盛、運西らが決意のほどを示したので、義村は直ぐに其翌日、畠山重忠、千葉常胤、小山朝政らの重なる御家人六十六人と鶴ヶ岡八幡宮の廻廊に集つて一同の賛成を得てから、景時彈劾の訴狀へ連署して幕府に差出した。其訴狀は、中原仲業の筆に成つたものである。

大江廣元が
景時に對す
る同情景時追放さ
る

景時の謀叛

ところが、其訴狀を手にした大江廣元は、景時が白派の一人であるのみならず、彼れ自らも思慮するところがあつて、容易に^(五)それを幕府で披露せず握り潰さうとした。それを知つた義盛は非常に憤つて、廣元が景時を擁護しようとするのを難詰した。廣元は一面、景時の多年の功勳を思つて、卒爾に彼れを處分することを不可としたが、義盛らに詰られて、止むなく、十一月十二日に入つて、それを披露した。で頼家は其訴狀を景時に下して、是非を決すべき旨を傳へた。で景時は思ふところがあつて十三日、子息、親戚らを具して、相州一ノ宮に赴いた。そして十二月九日、機を見て鎌倉へ歸ると諸將士の同盟排斥に逢つて、十八日、到頭、追放され、其邸宅も亦沒收された。で彼れは再び一宮に下向して、城を固め、萬一の變に備へる準備をした。彼れは、身邊に逼つた危機を其儘傍觀しようとはしなかつた。自分の才略で、新しい運命を展開しようとした。

景時の計策は、彼れ自ら鎮西管領の宣旨を賜つたと唱へて、武田信義^(六)を戴いて、九州方面の將士を集め、鎌倉幕府に反抗しようとした。それで彼れは正治二年、子息、郎従らを率ゐて、一ノ宮を發して京都に向つた。此時、幕府は三浦義村らに命令して、景時を追撃せしめたが、京都では、景時出奔の報を得て、一時不安の念に襲はれ、朝

廷では修法を行はれたと云ふ有様であつた。ところが景時は二十日、駿河清見ヶ關附近の狐崎と云ふところで、地方武士のために要撃されて一族悉く戦歿した。當時、幕府は京都及地方に於ける景時の餘黨を厳しく追窮して、剩すところがなかつた。そして景時の美作國守護職及び彼等父子の所領を没收して他の將士に與へ、また義盛を待所別當の職に復せしめた。かうして久しく權勢の地位にあつて、人に憎まれて居た景時の滅亡したことは、鎌倉や京都で當然の事だとされた。傳ふるところによると、景時の女は後に残つて、父の死を悼み、榮西の教化を受けて佛道に入り、亡父らの菩提を弔つたさうである。

景時の滅亡事件は、少からず、幕府の威信を損じた。何となれば、それによつて、内部の不統一を表面に曝露すると同時に、將士が一時秩序を破壊して、殆ど無政府状態に陥つたことを示したからである。畢竟頼家の不明と無能とが、かうした事件を起させた一因となつたにちがひないけれども、既に其種は頼朝在世の時から早く蒔かれて居たのである。必ずしもそれを頼家の不明、無能のみに歸するわけにゆかない。そして此事件は鎌倉幕府の動搖、不安が尙ほ容易に除かれ得ないであらうことを暗示した。どうしても文權、武權の兩黨を事實上北條氏が一統してしまふ迄は、衝突、暗闘が避

父の菩提を弔つた景時の女

將來に於ける動搖を暗示す

け難い自然の勢あつた。

(一)『明月記』に「朝家大事何事過之哉、怖畏逼迫之世歟」とある。

(二)頼家は其後、陸奥國葛田郡新熊野社僧坊領の境界に關する訴へを親裁したとがある。

(三)『吾妻鏡』正治元年十二月十八日の條參照。

(四)『吾妻鏡』參照。

(五)『吾妻鏡』に廣元の胸中を叙して「心中獨周章。於景時護佐者。不能左右。右大將軍御時。親致昵近奉公者也。忽以被罪科。尤以不便也。密可廻和平。儀歟之由。猶豫之間、未披露之」とある。

(六)文學博士三浦周行氏の『鎌倉時代史』には「武田信光を戴いて」と云々とある。ところが、『保曆間記』には「然間謀反を思ひ、祕に武田兵衛尉有義を大將軍に取立、天下を顛すべきと内談す、是源家好みを思ふ間、他家に心を不寄、頼朝情を思ふ故に、彼一門を專とす、此事會弟伊澤五郎信光、略これを知て、兄の在所へ押寄する、有義は逐電し、家屋に一報の書あり、謀反梶原契約の狀明白、信光鎌倉へ持來」とある。『吾妻鏡』にも「廿八日乙卯。晴陰。入夜伊澤五郎信光自甲斐國參上。申云。武田兵衛尉有義。請景時之約諾。密欲上落之由。依問其告。爲尋子細。發向彼館之處。遮而有申言歟之間。兼以逃亡。不知行方。於室敢無人。只有一報之書。披見之處。景時狀也。同意之條勿論云々とある。それらによつて、信光を戴いたのではなく、有義を戴いたのであるとが確かだ。

(七)『玉葉』に「景時討伐必然云々。天下悦也。積惡之輩。盡數滅亡」とある。

(八)『沙石集』 (九)『愚管抄』

第二節 院政の振興と源通親の政治的手腕

鎌倉幕府が一時、統一から分裂に赴かうとする形勢を暗示しつゝ、あつた時、京都に於ても、幕府の勢力が停頓して、不振に陥らうとする氣勢を見せた。蓋し、頼朝は朝廷を尊崇する精神を明かに有して居たが、それと同時に鎌倉幕府の勢力を漸次宮廷に向つて伸ばさうと力めて居た。彼れが後白河法皇に奏請して、九條兼實を攝政に推したのも、其女を入内せしめようとした噂を立てられたのも、宮廷の内部に勢力があつた丹後局の歡心を得ることに力めたのも、最後の第三回の上京を企てたことも、畢竟、其勢力を京都朝廷に扶植し、伸張しようとした爲めであつた。ところが、頼朝が歿すると、彼れの意圖は中途に挫折してしまつた。のみならず、幕府には、内訌が続いて起りさうな具合で、京都の政治方面へ注意するだけの餘裕を殆ど持たなくなつた。それにつれて、京都では、院政の振興や反幕府派の擡頭、活躍を促がすに至つた。

京都朝廷では、勤王派と武家派との二派が交互に一起一仆しつゝ、あつた。頼朝が幕府を創設するまでは、後白河法皇の寵眷によつて、近衛基通が攝政として勢力を振つて居た。彼れは勤王派に屬してゐたと云つてもよい。それ以前にあつては、平清盛の

頼朝歿後に於ける京都の政治的形勢

京都に於ける武家派と勤王派

勢力を背景とした近衛忠通や木曾義仲の武力に據つた松殿師家らが攝政として時めき何れも武家派を代表した。九條兼實の擡頭は、頼朝の勢力を背後に荷うたもので、彼れが基通を排して攝政となつたのは、明かに武家派乃至幕府派の勝利をほめかしたものである。殊に後白河法皇崩後に於ける幕府派の勢力は大に京都朝廷に伸びて、頼朝と兼實との政治的提携は圓滑に功を奏したのである。

ところが、兼實の政治的勝利を見て、第一に不快に感じたのは、源通親——村上源氏で土御門とも中院とも稱した——及び丹後局らである。殊に當時丹後局の勢力は輕視するわけにゆかなかつた。彼女は鎌倉に於ける政子に對して、卿局と共に京都に於ける政治的婦人を代表して居た。勿論、丹後局も卿局も、政子ほどに雄々しいところや、時局を大觀するだけの識力もなかつたが、京都の女性らしい優し味と圓滑な社交的手腕とを有つて居た。そして彼等は裏面に廻つて奔走し、周旋し、時としては非凡の才略を廻らすやうな長所を有つて居た。かうしたところが、政治的婦人として彼等を或程度まで成功せしめた所以であつた。

丹後局らが活動した時代は、不思議に女流政治家が前後して輩出した。それは、頼朝歿後に於ける特異の一現象である。元來、鎌倉幕府では、法制上、僧侶及び婦人が

丹後局の政治的才能

政治上の秘
密運動鎌倉と京都
に於ける女
流政治家の
對照

政治上のことに容喙するのを固く禁じてゐたが、男尊女卑の思想が未だ左程勢力を得ないで、婦人が政界に濶歩すべき餘地が十分にあつた。加ふるに政治上の内密運動となると、賄賂や色々の利益交換などが人知れず行はれて、其都度婦人の周旋などを要する場合が少くないために、制規の通りゆかない事が往々あつた。さうした事情は、丹後局や卿局らを活躍せしめたのだと解釋してよい一面がある。そして鎌倉では、政子が尼將軍の名の下に政治的活動を續けたほかに北條時政の夫人牧氏、義時の夫人伊賀氏などが前後して政治上に於ける勢力發揮を見せた。蓋し京都の二女性の政治活動は、主として、朝廷に於ける幕府の勢力が萎靡して、院政に伴ふ宮廷の腐敗などが自然彼等をして乗すべき機會に觸れしめたことにもよるところが多い。鎌倉に於ける三女性の政治活動は、雄邁な武家の氣風を受けて、自然政治に深い興味を有ち、且相當の野心や虚榮心や才略を抱いて居た結果によるところが少くなかつた。いづれにしても、政治上、東西を合して、五人の女傑が、前後して歴史の舞臺に現はれて、各自思ふまゝ、に花やかな一幕を演出したのは、平安時代に紫式部や清少納言らが思ふまゝ、に文學上に活躍したのと相對して、そこに女性史に於ける時代の相異や世相の推移を見ることが出来る。

丹後局は才
貌兼備の女

話の道筋が少し横に外れたが、さて本筋に戻ると、こゝに丹後局の人物に就て一言しなければならぬ。彼女は延暦寺執行澄雲の女で、高階榮子と云つた。最初、相摸守平業房に嫁して二男三女を生んだ。ところが、治承三年に至つて、業房が平清盛のため伊豆へ流されると、彼女は後白河法皇の宮に入つて殊寵を受け、程なく懐胎して皇女觀子を生みまゐらせた。そして其年十一月、清盛が法皇を鳥羽殿に幽閉し奉つた時、局だけは特に隨侍することを許された。

彼女が、かうして法皇の殊寵を得たのは、嘗に美貌のためばかりではなかつた。才氣が潑刺として、事毎に法皇の思召に適ふやう、忠實に仕へまゐらせた爲めであらう。彼女が政治的に勢力を伸ばすべき土臺は、先づこゝに築き始められた。其勢力發露は第一に後鳥羽天皇の擁立について現はれた。後白河法皇が、群議を斥けて、高倉天皇の第四皇子後鳥羽を立てられたのは、主として丹後局の獻言によるのである。次ぎに基通に代つて攝政となつた兼實に對して、丹後局は窃かに對抗して、寧ろ失意の基通に身方したので、頼朝が望み通りに攝政家領を一つ手に收めることが出来なくなつたのも、亦彼女の暗中飛躍によるのである。殊に建久七年十一月に於けるクーデターは彼女が源通親、梶井宮承仁法親王らと謀計を運らしたため、兼實一派に一大痛撃を

丹後局の織
手によつて
實現された
クーデター

加へた。當時、兼實は突如として、關白を免ぜられ、其弟慈圓は天台座主の要職を取り上げられてしまつた。それは結局、朝廷に於ける幕府派の勢力失墜を意味した。それに續いて、源通親が政治方面に縦横の手腕を押つて、到頭後鳥羽天皇に讓位をす、めて、第一皇子が踐祚された。それが土御門天皇で、通親の女承明門院の所出である。當時、後鳥羽は十九歳でゐらせられたが、弱年で讓位されるのは頼朝の好まぬところであつたにも關らず、源通親が獨斷で決行して、巧みに外戚の地位を占め得たのである。それらの事について、頼朝は少からぬ不満を感じ、幕府の勢を伸ばすため、第三回の入洛を計畫して居るうちに歿してしまつた。

爾後、源通親は、丹後局が政治活動のあとを受けて、殆ど彼れの獨舞臺とも見るべき目ざましい働きを示した。建久九年には後院別當に補せられて、院中の實權を掌裡に收めた。通親は陰險な人物で、巧緻な手腕術策を有つた政治家であつた。彼れの擡頭は、丹後局と提携したのが一因となつて居るにちがひないが、其素質が政治家として適當して居たによるとも亦一因を爲して居る。彼は大きに云ふと、勤王派の一首領であるが、もつと適切に云へば、反幕府派の勢力を糾合して其政治的立身を計つた自我主義者である。勿論丹後局とても、嚴密に考案を加へると、反幕府派と云ふと

源通親の得意

通親の自我主義

が出来ても、勤王派だとは云ひ兼ねる。要するに、通親の第一目的は、自己の立身出世にあつた、政治的野心の實現にあつた。それに、頼朝が歿すると、彼は得意の術策を弄して、其勢力の増大を計つた。正治元年正月二十日、彼は右近衛大將の地位を得た。すると、彼は其翌日、急に門を閉ぢて、故らに頼朝の死に對して弔意を表した。それは畢竟、除日を行ふ都合上、彼れが一時、頼朝卒去のことを發表せず置いたのである。そして彼れが、右近衛大將となつた日に、父の死に逢うて官を解かるべき筈の頼家が、右近衛中將に補せられた。それは通親の意から出たことである。

かうして彼れは、叙位のことなども、攝政に計らないで、獨斷で專行する場合があつた。次に彼れは、自黨の地盤を固めるため、京都に於ける幕府派の勢力を一掃し去らうと力めた。其一端とも見るべきは、正治元年二月、藤原能保の遺臣左衛門尉中原政經、小野義成、後藤基經らを抑へて、其處分を幕府に迫つたことである。頼朝の歿後、京都の風雲は何となく穩かでなかつた。折柄、中原政經らが、能保の後に對して加へた通親の處置に不満を抱いて、今にも襲撃しさうな様子が傳へられた。通親は其事を聞くと、直ぐに院中に身を隠し、在京の武士に命じて警衛に當らせると共に、政經らを抑へしめ幕府に其の處置を迫つた。そして通親はそれを好機として、平生幕

通親の幕府派排斥

府派と稱すべき參議西園寺公經、右近衛少將持明院保家、左馬頭源隆保らを一網に羅織して出仕を停めた。後、彼れは降保を謀叛の名の下に土佐國へ流し、また頼朝が深く歸依して居た僧文覺の人物を好まないで、一時佐渡に遠流した。かうして通親の反



文覺上人像

對黨が除かれて了ふと、彼れは益々得意の境地を占めて六月二十二日の任大臣節會には、内大臣に任ぜられた。彼れの宿昔の望みであるところの大臣、大將たることは、こゝに成就した。當時同じ日に彼れの政敵兼實の子良經が勅勘を免されて、左大臣に榮轉したのは、矢張如才のない通親の思惑から割出されたものと見える。

院政振興

通親の活躍時代は院政振興の時でもあつた。後鳥羽上皇は何等幕府の制肘を受けず、思召のまゝ、に事を擡げられた。正治二年四月、皇子守成親王を皇太弟に立てられる時にも、幕府に向つて諮問されなかつた。また有事の日には、直ぐに京都守護や、在京の武士に命令を發して、彼等を官兵として征討の事に當らせることにされた。正治

政治家としての通親の
一缺點

二年七月、謀叛の形跡があつた佐々木經高を幕府が寛典に處しようとした際、朝廷では嚴罰を加へしめられたのも、院政振興の結果である。同年十一月、近江の柏原彌三郎が、佐々木信綱のために誅せられたのは、違勅の罪によつたのである。

以上の如く、院政が毫も幕府の制肘を受けなくなつたのは、頼朝の歿後、鎌倉が多事を極めたからだだが、一つは通親の巧みな手腕に俟つところが少くなかつた。唯通親が朝廷の威光を發揮することや、自家の權勢伸張にのみ意を川ひて、積極的に善政を布くと云ふ抱負、理想の一端をも示さなかつたのは、彼れの一大缺陷であつた。そして彼れは建仁二年十月、五十四歳で歿した。彼れが頓死したので、色々の風説を傳へられたが、恐らく、腦溢血の類ではなかつたらうかと思はれる。

(一)『續本朝通鑑』、『大日本史』、『愚管抄』參照。

(二)『吾妻鏡』參照。

(三)弘安七年の新式目に、「可_レ被_レ止_ニ僧女口入_一事」とある。

(四)『愚管抄』參照。『玉葉』には、「法皇無雙之寵女。殊寵無雙。不_レ異_ニ李夫人揚妃_一歟」と記して居る。

(五)『増鏡』、『源平盛衰記』、『愚管抄』參照。

(六)『玉葉』に、「終日評定。女房丹後並冷泉局。法皇三人同居。又以_ニ御書_一遺_ニ前攝政家_一。又奉_ニ

封書「往復及三兩三度」云々とある。

(七)『愚管抄』に「頓死の體なり、不思議の事と人も思へけり」とある。

第三節 女流政治家藤原兼子

通親歿後の院政は、形式上、一段振つたやうであるが、實質的には頼唐し始めた。通親の居た時代には、任官叙位なども割合に穩當に近かつたが、後鳥羽上皇がすべてを親裁さるゝに及んで、漸く偏頗の傾向が生じた。蓋し上皇は、最早幕府の勢力を輕視すべきものと誤認され、且つ聊かも憚るべき人物が廷内に居ないのに安心されたと見えて、遊行や蹴鞠などに日を費し、女調によつて、政治を左右さるゝやうな、傾向を招致された。丹後局と相列んで、政的活躍をした卿局が時めいたのは、かうした際であつた。

當時上皇は通親の系統に屬して居た基通の攝政を罷めて、左大臣良經に其後を繼がせて、親政の實を示された。爾後、承久三年に至るまで、京都の政治はすべて上皇の思召によつて左右され、其間殆ど幕府に諮問されたことがなかつた。文覺の如きも通親時代に遠流されたのが、上皇の親政時代に入つて、召還の恩命に浴し、太政大臣藤原頼實も、矢張上皇の思召によつて、新たに皇太弟傳を兼任するに至つた。

後鳥羽上皇
の怠慢

親政の實を
擧げらる

上皇の文武
に於ける嗜
好趣味

上皇の享樂
生活

上皇は多情多感で、快活な氣象を有せられ、且つ多方面な才能、趣味を持つて居られた。文藝上では、詩歌、殊に歌合を好まれた。建仁元年七月、和歌所を二條殿に置き、藤原定家同家隆を始め基通、良經、俊成、有家、雅經、源通親、同通具、具親、僧慈圓、沙彌寂蓮らを寄人とされ、後、更に藤原清範、隆信、秀能及び鴨長明らをも其中に加へられた。上皇は武藝上に於ては、相撲、競馬、水練、流鏑馬、犬追物、笠懸などを嗜まれた。殊に遊獵を愛せられた。また政治上に於ける參考に資するつもりで公事の習禮を催され、上皇親ら大臣大將となつて、強盜就縛の有様を親しく見られ、或は親ら罪人を糾問されたことなどもあつた。それに上皇は刀劍の鑑識について優れた眼を以て居られた。それから察すると、上皇が如何に多方面の趣味、才能を具へて居られたかを知ることが出来る。此點から察しても、上皇は有爲英明の資を有せられた。けれども後に討幕の計畫を進めらるゝ頃の緊張味は、通親歿後の頃には未だ發揮されなかつた。それに上皇には政治上の達識がなかつた。一時、院政は頼唐し始めたのである。

當時、上皇は、銳意、善政を布くよりも、寧ろ享樂生活を送られることに忙しかつた。二條、京極、水無瀬、鳥羽、宇治などの御所や離宮を新築されて、壯大な結構を

つくされた。そしてそれに要するところの費用は、主として成功と稱する賣官の收入によつて支持された。「成功」と云ふのは、米萬石、絹萬匹を朝廷へ献上するものに限つて、國司に任命さる、特權を設けたことである。それは白河天皇以來の弊風であつたが、上皇の時代に入つても繰返され、除目毎に多數の剩員を生じ、無能不才の輩が國司となるやうな現象を見た。それに、女調や請托や賄賂などのために、官位を特に進めらる、ものが少くなかつた。心あるものは、深くそれを嘆いたほどである。

上皇は、また美男美女を少からず愛せられた。美男を愛せらる、風は、曾て後白河法皇にもあつた。容貌優雅な基通が特に寵用されて、最後まで法皇の庇護に浴することを得たのは其一例である。上皇も亦卿局の養子家嗣を此上なく愛せられたので、當時「上皇第一の寵人」と稱せられた。また上皇が愛せられた宮嬪には、歌界の才媛が少くなかつた。七條院女房越前、宮内卿、俊成の女などは其代表者である。美人の名が高かつた承明門院在子、修明門院重子を始め、坊門信清の女、西御方、丹波局——以前は白拍子で名を石と云つた女——なども、上皇の殊寵を受けた。其他白拍子を度度愛せられたが、龜菊の如きは、其中の随一人とも云ふべき女であつた。かうした時代に卿局が活躍したのは當然と云はねばならぬ。卿局は丹後局のやうに

上皇に寵せられた美男美女の群

藤原兼子の
中生

美人ではなかつた。彼女は刑部卿藤原範兼の女で名を兼子と云つた。彼女は其親戚の人々を通じて、上皇とは特別の深い因縁を有つて居た。其叔父高倉範季は上皇を養ひまゐらせて、踐祚の時も専ら忠誠をつくし、且つ其の女重子(修明門院)を宮仕へさせた。また彼女の姉範子は最初法勝寺執行能圓の妻で、上皇の乳母を勤めて居た。能圓が平家と運命を共にして歿落すると、源通親に愛せられて其夫人となつた。其時、連子の在子を通親の養女として上皇の妃としたのが承明門院である。かうした關係上、兼子は早く立身しなければならなかつたに關らず、久しく埋れて居たのは、主として叔父範季が窃かに義經に同情して、頼朝の反感を挑撥した爲めであつた。

ところが、運命は一轉して、兼子が擡頭すべき時代が徐ろに近付いた。それは建久九年になつて、上皇が承明門院の生みまゐらせた土御門天皇に位を譲つて、専ら院政を行はせられた上、通親と丹後局との提携によつて行はれたクーデターで、京都に於ける幕府派の勢力が覆される、次ぎに頼朝が歿する、修明門院が上皇に寵せられて其所出の順徳天皇が皇太弟に立たせられると云ふ具合に、すべての形勢は兼子の一身に取つて順潮に進んだのである。其結果、七十歳に近い範季が三位に叙せられ、兼子は典侍に任ぜられた。それが彼女の擡頭すべき最初の榮進であつた。

順潮に向つた兼子の運命

始めて四十
五歳で結婚
した老嫗

閨閥に縋ら
うとした藤
原宗頼

こゝに奇とすべきは、彼女が四十五歳で始めて結婚したことだ。蓋し彼女は久しい間、宮仕への中に日を送つて、獨身生活を守つて來たのであるが、少くとも表面丈でも、さうした童貞を保ち得たのは一つは其容貌が丹後局ほどに優れて居なかつた爲めでもあつたらう。彼女が最初の良人として迎へたのは權中納言藤原宗頼である。宗頼は當時の閨閥によつて立身しようとする公卿間の風潮を一身に代表して居た。當時彼れには頼子と云ふ妻があつた、また宗方と云ふ子もあつた。頼子は後鳥羽上皇の第一皇女春華門院（昇子）の乳母であつたから、從三位に叙せられて一時勢力を伸ばしたが、政治上、兼實系に屬して居たので、兼實失脚後は一向振はなくなつた。宗頼だけは、兼實の家禮でありながら、運命を其主人と共にせず、ひとり宮廷に留まつて、院の執事別當を勤めて居た。かうして宗頼は深く權勢に憧憬れた人物であつたから、一度兼子から結婚を申込まれると、有頂天になつて、在來の妻子を冷かに見捨て、兼子を妻とした。其結果、宗頼は新妻の庇蔭によつて、太政大臣頼實が辭した土佐國を賜つた。後、累進して正二位權大納言に上つた。

宗頼の立身は閨閥に負ふところがある上に姻戚の關係を利用して巧みに通親に取入つた爲めでもあつた。彼れは通親の嫡子通光を女婿として、愈々雙互の關係を深めた。

宗頼と通親
との閨閥關
係

上皇が特に愛して居られた守成親王が土御門天皇の皇太子と成らせられると、通親が皇太弟傳となつたにつれて、宗頼は東宮權太夫となつた。かうして彼れは通親の在世中のみならず、歿後に至つても、其遺産を管理したほどの關係を作つた。勿論、彼れの背後に兼子が巧妙な社交術を發揮して居たのは言ふ迄もないことである。

閨閥によれ
る頼實の出
世

ところが、建仁三年正月、宗頼が病歿すると、彼女は同年であるところの藤原頼實を第二の良人に迎へた。それは彼女の四十九歳の時であつた。頼實は通親のため排斥されて久しく不遇の地位に居たが、閨閥によつて一身の出世を計りたい一念から、三十年來連れ添つた妻を見捨て、兼子と結婚した。爾後彼れは新妻の勢力によつて地位を回復し、また先妻の所生麗子を入内させる事について運動した。其結果、麗子入内の事だけは成功して、元久二年四月、其實現を見た。そして麗子は女御から中宮となつて、陰明門院と稱せられた。かうして頼實の得意時代が漸く近附いた。

當時、攝政藤原良經も亦其女を入内させたいと熱望して居たので、頼實と烈しい競争の形となつたが、此間に起つて雙方を調和し、妥協を成立させたのは兼子であつた。其條件は良經の女を皇太弟（順徳天皇）の踐祚後に必ず入内させるやう盡力すると云ふことであつた。それらの事から、兼子の勢力、手腕の侮り難いものがあつたことがわ

兼子の調停
的手腕

兼子巧みに
上皇に取り
入る

兼子と贈賄

兼子の權勢

かる。

兼子が、後鳥羽上皇の特寵を得た理由は、上皇が未だ幼少で居らせられた頃から、其坐右に侍して、上皇の氣質や趣味をよく知りぬいて、巧みにそれに應じて行く呼吸を解した爲めでもあつた。男女の寵人などの取持について、彼女は始終、上皇のためによく働いた。また修明門院とは従姉妹の間柄であつたから、何彼と世話をつくした、かうして兼子は卿局として政治方面にも影響する程の力を有するに至つたのである。けれども兼子には政子のやうに政治上の識見がなかつた。單に自己の榮達を主眼として行動した。彼女の優れた社交術は、それがため間斷なく用ひられて、却つて宮廷に腐敗を齎すやうな場合が少くなかつた。一つは裏面運動によつて自己の榮達を計らうとした公卿らが、彼女の勢力に縋つて其目的を達しようとしたからでもある。それで公卿が彼女の許に、贈賄することは、一つの慣例のやうになつて居た。當時、兼子の良人頼實は前相國として、院の別當の首席を占め、院廳下文に署判して居た上に、卿局の兼子は院の中次を勤めて上皇よりの沙汰は局を以て申出され、また局の女房奉書として出ることになつて居た。それから臣下から院へ奉呈すべきことも一々、彼女の手を経て居た。そして彼女は其間に起つて、巧みに上皇の意に協ふやうに役目を勤

めたところから、承元元年には、從三位から從二位に昇叙された。で彼女は卿二位または二品と人々から呼ばれた。

かうした彼女の地位を利用しようとした公卿のうちには、榮進の目的を達したものが少くなかつた。藤原國道を始め、實宣、教成、公清などは、何れも、彼女に贈賄して著しい出世をした。實宣は其邸宅、土地などを彼女に贈つたので、四人の上臈を超えて藏人頭となり、參議となり、檢非違使別當を経て、納言の位に上つた。教成は丹後局から讓られた嵯峨若狭堂を彼女に贈つて、參議に任ぜられた。

さうした事から兼子の富は著しく増大した。元久元年には、新邸を作りて頼實と共棲したが、白河中山にも別邸があつた。中山には堂を作つて上皇の祈願所とし、上皇の行幸を仰いで盛大な堂供養を行つた。安樂心院と稱せられたのがそれである。而も彼女は富める上にも尙富まうとして、時には、八條院御領近江國吉富庄を押領しようとして院に訴へられるやうな失態を醸した(五)ことさへもあつた。

それらの事から、彼女の跋扈を好ましく思はぬ人々が一部に居た。而も藤原定家の如きは、其弊害を憤りながら、建暦元年九月、彼れが從三位に叙せられたのは、主として兼子の力に縋つた爲めであつた。其日記『明月記』には、彼れが其の以前にそつと

兼子に賄賂
を贈つて破
格の立身を
した人々

藤原定家ら
兼子の勢力
に属す

延暦寺に於
ける堂衆と
學侶の争ひ

兼子を訪問して、昇叙希望のことを切に依頼し、除目の前日、兼子から昇叙の内報を得て、飛ぶやうに兼子の邸を訪ひ、禮を述べたことが記されてある。のみならず、定家は其子爲家の出世についても亦兼子の助力を借りた。また良經の子道家は叙任のことが内奏によつて行はれることを嘆きながら、大納言から内大臣に昇らうと切望した際には、兼子の内奏によつたのである。いづれにもせよ、卿二位としての兼子は、滿廷の卿相を其紅唇によつて支配したのである。さうした點に於て、彼女は確かに一個非凡の才物であつた。けれどもそれがため、政治を毒したことが少くなかつた。兼子はさうした身でありながら、流石に女性らしい優味と弱味とを有つて居た。例せば彼女は僧侶のためにひどく苦められ、惱まされた。蓋し當時の僧侶中には矢張、兼子の勢力を利用して自己の利を計らうとするものがあつた。建仁三年延暦寺の堂衆と僧侶との間に入浴の順序争ひが原因で、平素互に抱いて居た不和の感じが一時に爆發して戦ひ合つた時、院では彼等を制止しても聞き入れないので、官兵を派して討伐を加へた。そして堂衆を處分して其所領を沒收した。事の裁決については、主として兼子及び其狎僧であつた某法眼ほふけんが運動によつたので、元久元年、堂衆を遠流に處した時、某法眼も亦幕府の請によつて同刑に處せられた。

兼子を呪咀
した僧侶

政子と兼子
との交歡

兼子の失意
時代

かうして延暦寺の騒動は一段落を告げたところが、建暦元年に至つて、上皇が新たに堂衆の勅勅を免じて、彼等の所領を還付されようとなされると、學侶が不平を起した。そしてそれは兼子が院司藤原光親と協議して、堂衆を庇護した爲めだとわかつた。で學侶は大に憤つて、二人の名を書いたものを金毗羅こんびら大將の脚下に籠めて頻りに呪咀した。それを聞いて、兼子は非常に憂懼して、急に自筆の起請文を彼等に遣はし、やつと呪咀から免れた。それで堂衆の赦免は中止されてしまつた。

それらは、流石に女性らしい弱味を示して居るが、鎌倉幕府に對しては、また彼女の如才ない社交振りが鮮明に發揮されて居た。彼女は尼將軍政子の機嫌を取ることに ついては頗る力めた。坊門信清の女が三代將軍實朝に嫁する時は、中山にある兼子の邸から、行装美しく出立したほどある。また政子が熊野詣をかねて入洛した時は、兼子が政子を度々其旅館に訪うて親しく懇話した。且つ出家後の女人が叙位にあり付いた先例が乏しいのに、彼女は、尼將軍としての政子のために周旋して、從三位に叙せられるやうに取計らつた。そして破格に天顔を拜する光榮にも浴せしめようとしたが、これは勝氣の政子が辭退した爲め、其儘立消えとなつた。けれども其後政子が間もなく、從二位に陞叙されたのは、矢張兼子の内奏に基づくものと察せられる。東西

の女傑の遭逢は、そこに自ら好個の對照を爲して居た。そして其時分は、兼子が得意の頂點にあつた折で、爾後次第に下り坂となり、寛喜元年八月、七十五歳で頭部の腫物を病んで死した。要するに承久元年頃までの院政は、一面女流政治家兼子によつて彩られたところが少くなかつた。承久の初め頃から、上皇は漸く兼子を疎んじて、別に院政上、緊張した閃きを示さる、やうになつた。

結局、頼朝死後に於ける京都の政治的趨勢は、以上の如く上皇の親政となつて、皇威は以前より遙かに増した。そして和歌の如きは、殊に隆盛を極めて有力な歌人が續出した。幕府は頼朝在世時代のやうに積極的な態度を以て、朝廷に對することがなく、一時受動的態度の下に定着して居た。けれどもそれは、幕府の實力が衰へたことを意味しては居なかつた。内訌のために受動的態度を餘儀なくされて居たのだ。ところが京都では、其實力が減少し、基礎が搖いだものと誤認して、勢ひに任せて、後に討幕を企てられたので、一敗地に塗れるやうな悲劇が起つたのである。

(一)藤原定家は「除目偏出_レ自_レ親慮云々。建久之間、入道殿下(兼實)御直言不_レ叶_レ時儀、時移之後至_二于去年_一猶内府(通親)執權憚思食之間、除目之面猶尋常、於_レ今權門女房偏以申行、殿下(良經)御力不及歟。後鑿可_レ聽者也」と嘆じて居る。「權門女房」とは恐らく、郷局で

不振に見えた鎌倉

ある藤原兼子も暗に指したのであらう。

(二)『玉蕊』參照。

(三)『明月記』に宗頼が土佐國を賜つたことを記して「幸人宗頼給_レ之。新妻之故也」と鋭く皮肉らしいことを述べて居る。

(四)『明月記』參照。

(五)同上。

(六)『玉蕊』中、建曆元年九月八日の條に「凡近代之政、不_レ謂_レ智、不論_レ英華、只以_二内奏之者_一所_レ被_レ許任也」と云つて居る。

(七)『明月記』參照。

(八)『愚管抄』に政子と兼子と評して「女人入眼の日本國いよくまことなりけり」と云つて居る。奇抜で面白い。

第四節 將軍頼家と北條時政

京都朝廷の威光が頼に恢復されようとしつゝ、ある時、鎌倉では、不安、動搖の空氣が尙ほ収まらないで、内訌や地方の騷擾が續發的に起つた。正治二年八月には陸奥の芝田三郎が幕府の召命を拒んで誅せられた。建仁元年正月には景時の一味と目された越後武士城長茂及び甥の資盛らが自棄的に叛して、これも亦誅せられた。續いて同三

地方に於ける騷亂續發

年五月には、頼朝の弟阿野全盛が謀反して常陸に流され間もなく殺された。かうして幕府の當局者は、少しも心を休める暇がなかつた。

けれどもさうした形勢に對して、案外、平氣であつたのは頼家である。彼れは、一個の「傀儡將軍」(Puppet Shogun)に過ぎないのを心中ひどく憤つて、反感と不平を抱いて自棄的行動を執つた。彼れは元來鎌倉文化よりも、より多く京都文化に共鳴し易いところがあつたが、彼れの境遇は自ら彼れをして平生好んで居た蹴鞠などに熱中して平生の鬱悶を遣る様にならしめた。そして京から斯道に熟達した紀行景を呼びよせた。行景は建仁元年九月、鎌倉に着いて蹴鞠の師範を始めた。爾後、頼家は近侍らに従へて、頻りに鞠に耽つて、肝心の政務を怠つた。北條泰時はそれを憂へて、中野能成に説いて諷諫させた、ところが頼家は却つて怒つて、餘計に蹴鞠に熱中した。泰時は頼家の怒りを避けて、暫く鎌倉から去つことがあつた。翌建仁二年正月早々から、頼家は蹴鞠を行ひ、爾後毎月それを續けた。彼れが建仁二年正月の末に中原親能の龜ヶ谷邸で蹴鞠を試みようとした時には、母政子が上野の一族新田義重の卒去を口實として、當分遠慮するやう、切に諫止したことがあつた。頼家は蹴鞠の後に、酒宴を催す場合が多かつた。さうした時、いつも知康が鼓を打つて興を添へた。時には白拍子を

頼家蹴鞠に耽る

遊女愛壽の意氣

呼んで歡を加へたともあつた。頼家には、白拍子、遊女などからんだロマンスが語り傳へられる。それは愛壽と微妙の二美人に關することである。頼家が建仁元年六月、江島明神へ參詣した時、相摸川の邊を逍遙して、大磯に一泊したことがあつた。其時彼れは遊女を呼んで歌曲を聞き、旅寐の淋しさを忘れたが、其夜、第一の美人であつた愛壽が顔を出さなかつた。それは傍輩に其美しさを咀はれ、其名字を隠して書出されなかつたからである。愛壽はあとで其事を知つて、召に洩れたのを悲み、出家落飾してしまつた。ところが頼家は深く愛壽の志を憐れんで、多くの纏頭を與へて慰めた。けれど愛壽は清いブライドを持つて居たので、纏頭を高麗寺に寄與したま、何處へか出奔した。そこに愛壽の凛とした心が映し出されたのである。當時の遊女には、さうした氣概のある女が居た。

微妙は頼家が建仁二年三月、比企能員の邸に於ける花見の宴で、始めて見た美女である。彼女は京都の良家の女で鎌倉へ來て白拍子となつた。歌舞音曲に長けて居たところから、頼家の感賞に入つた。彼女には悲痛な運命が附纏うて居た。それに對して能員が同情して、頼家の前で其事を愁訴せしめた。其時、彼女は、頼家から事の次第を問はれると、はら／＼と落涙して暫く物を云ふことが出来なかつた。頼家が更に答

白拍子微妙の哀史

へを促がすと、微妙は始めて泣きやんで、一家の悲劇を話した。それによると、去る建文年間、父右兵衛尉爲成が他の讒言のために獄に投ぜられ、やがて他の囚人らと共に奥州へ流された時、微妙の母は非常にそれを悲んで、間もなく病歿した。後には七歳になつたばかりの微妙が孤兒として取残された。彼女には兄弟姉妹も親戚もなかつた。彼女は多年父の安否を氣遣ひつゝ、成長した。そしてどうしても父の存亡を知りたい一念から、唯ひとり京を出て鎌倉へ来て白拍子となり、機を見て幕府に訴へ出て父を救ひ出さうとして居たのである。

微妙の出家

それを聞いて、頼家以下、一座のものは皆彼女に同情して、落涙しないものも一人もなかつた。頼家は直ぐに使を奥州に派して、微妙の父の存亡を確かめるであらうことを許諾した。そして其夜は酒を痛飲して、鶏鳴を聞いてから始めて比企の邸を出た。其後、微妙は尼將軍政子の前で舞踊を見せて、深く憐愍された。ところが、こゝに微妙に取つて、大きい悲痛であつたのは、奥州へ赴いた使の者が歸つて、微妙の父が配所で既に歿したと報じたことである。微妙はそれを聞いて、烈しく泣いたまゝ、卒倒した。そして其後、人生の無常を感じて、其情人古郡保忠が、甲州へ赴いて不在中である際、断ち難い愛の思ひを捨て、榮西禪師の導きによつて出家の身となつてしまつた。

頼家の非常識

政子は益々微妙を憐み、深澤の里のほとりに居所を與へた。微妙の半生は、かうして悲痛な光景の中に幕を閉ぢた。

其後、頼家は、蹴鞠と共に遊獵の方にも心を寄せた傾きがあつた。それに稀に笠懸などの遊びをも行つて、いくらか武藝によつて、身心の倦怠を忘れようとしたともあつた。けれども政治上のことについては、依然、直情徑行で、稚氣を脱しなかつた。彼れの爲すところは、稍兒戯に類して常識以下に墮する趣が見えぬではなかつた。

殊に最も非常識であつたのは、彼れが諸國豪族の領地に關する帳簿を點檢して、治承以來の新給地五百町以上に過ぎたものは、一律にそれを削つて、近侍に與へようとする計畫を立てたことだ。彼れが正治二年十二月、其事を令しようとした時、大江廣元の如きは、非常に驚き、これは一大珍事である。若しそれを實施されたら世の謗りを招くであらう」と嘆息した。宿老らは周章して、三善康信に特に頼家を諷諫せしめた。それがため、頼家もやつと實施を見合はせた。萬一、それを實施するとならば、地方豪族の感情を害し、惹ひて幕府の基礎を搖かすべき恐れが必然に存したのである。

彼れはまた陸奥國葛田郡新熊野社僧坊領の境界についての訴へを親裁した時、書類として提出されて居た境界繪圖を展けて、其中央へ筆を以て無造作に一線を引き「土

訴訟事件に
現はれた頼
家の無頼着

地の廣狹如何は、各自の運によるよりほかはない」と手輕に鷹揚に申渡した。それは正治二年五月のことであつた。

以上の二事件の中で、前者については、大夫房源性が頼家のために参割したことがあるかも知れない。源性は蹴鞠に練達して居たところから、頼家に愛せられたが、彼れは一面、筆札に巧みで算數の術にも長けて居て、田畝を一見すると、直ぐ其廣狹段歩を計つて少しも誤たなかつた。正治二年八月、陸奥伊達郡の豪族が境界のことについて争ひを起した時、頼家は特に源性を派して、親しく實情を檢視せしめたことがあつた。さうした關係から考へ及ぼすと、源性が治承以後の新恩地のことについて何等か頼家に建言するところがあつたのではなからうかと思はれる。勿論、確證はないがさう推測されないでもない。

頼家が政治家として爲したことは、概ね以上の如くであつた。そして彼れは建仁二年、從二位に叙し、征夷大將軍となつた翌年夏、突如として病に罹つた。其苦惱が尋常でなかつたところから、トはせると、「靈神の祟りだと判じた」と「吾妻鏡」に出て居る。それがため、頼家は病氣平癒を祈願して、自筆の「般若心經」一卷を伊豆國三島社へ奉納した。

頼家に愛せられた大夫房源性

頼家急に病む

時政の疎腕

當時頼家の病氣は、次第に重きを加へて、最早助かりさうにも見えなかつた。八月二十七日には、既に呼吸を引取りさうな様子であつた。それが動機となつて、鎌倉の宿老間に家督問題が持上つた。此時、北條時政は其手腕を揮つて、自家の權勢を擴張すべき機會を失はなかつた。蓋し頼家の妾若狹局は、比企能員の女で、既に當時六歳の公子一幡を設けて居た。若し一幡に頼家のあとを繼がせるとすると、勢ひ比企氏の勢力が頓に増大することは云ふまでもない。ところが、それは政子を始め、北條一家の喜ばないことであつた。で、政子と北條時政父子らの間で協議した結果、關東二十八ヶ國及び總追捕使の職を一幡に與へ、關西三十八ヶ國を頼家の弟千幡(實朝)に與へることにした。

それが決定されると、第一に不服であつたのは比企能員であつた。彼れは、若狹局を通じて「家督のほか、地頭職を分たる、ことは、威權を二分することになつて、後に確執を生ずる原因となりませう」と窺かに頼家に上申した。頼家は驚いて、直ぐに能員を病床に呼び寄せ、俄に密談に及んで、偏に北條時政父子を追討すべき計議を運らした。時に政子は頼家の看病のため、來合はせて居て、人知れず、屏後に隠れて頼家能員らの密談を聴取し、北條父子を誅すべき旨を計りつゝ、あることを知つた。で、

比企能員の不平

政子屏後に隠れて頼家らの密謀を知る

時政の詐略

政子は驚いて急使を時政の許に派し、書面で能員らの隠謀を時政に告げた。時政はそれを手にすると顔色を變へて激怒したが、暫く思案した後、大江廣元の家を訪うて能員謀叛の事を告げ、天下のため能員を誅すべき必要を述べた。廣元は別にそれに反対しなかつたので、時政は大に喜び、匆忙として家に歸つて、新田忠常、天野民部入道、蓮景らを招き、能員誅戮のことを談合した。そして結局、造立の藥師如來の佛事に託して、能員を誘ひ寄せ、一氣に誅しようと決意した。で時政は自分ひとりの所爲と世の人に思はれるのを避けるため、再應、大江廣元を招きよせ、重ねて能員誅戮のことを話した後、工藤五郎を能員の家遣はし「かねて宿願のため造立致した藥師について、今日供養を遂げる折柄で御座るから、何卒結縁のため御越し下されたい」と申入れさせしめた。

能員の非運

能員は別に時政の胸中を疑はずに、即刻招きに應ずる旨を答へた。ところが、能員の子息、郎従らは、時政の平生から考へて、其心事を怪み、「招きに應じて行かれるなら、武装した郎従を悉く引きつれて赴かる、が宜いでせう」と諫告した。けれども能員は恐しい運命が彼れを待つて居るの知らずに「妄に人を疑ふのは宜しくない、却つて亂を生ずる原因だ」と云つて僅かに七八人の郎黨を従へてて名越にある時政の邸に赴いた。

能員誘殺さる

ところが、時政はかねて能員誘殺の準備をして居たので、能員が邸へ這入つてくると突然、忠常、蓮景の二勇士をして能員を捕へさせた。それと見て郎従らが驚くと、其六人を斬倒し、僅かに一人のみ誤つて逃してしまつた。そして間もなく、能員を裏の山下へ伴つて手早く其首を刎ねた。

比企一族の全滅

此危急から逃れ出た一人の郎従が馳せ歸つて、能員の一族に事を告げると、いづれも武装して、子息宗員の統率の下に一幡の小御所に集つた。其數百餘人に上つた。時政は政子と計つて、江間小四郎義時、同太郎泰時らの諸將士を派し、烈しく戦つて焔火の中に能員の一族を全滅せしめた。そして其際、一幡は無残にも焼死した。次いで幕府は能員の與黨を糺弾して、其甥鳥津忠久に對し、大隅、日向、薩摩の三國守護職を褫奪し、また平生頼家に愛せられた中野能成らを拘禁した。かうして比企氏對北條氏の争ひは後者の勝利に歸して一段落を告げた。それは建仁三年九月のことである。

(一) Clement: "A Short History of Japan."

(二) 『保曆間記』に「頼家病を受けき、此人多死靈故にや、大方人望にも背けるか、病氣次第に難儀」云々と記して居る。尙『明月記』、『北條九代記』、『吾妻鏡』等参照。

(三) 『島津國史』及び『吉見系圖』参照。

北條氏の權勢の増大

悲劇中の人頼家

仁田忠常の不幸

比企氏對北條氏の争ひに於て、著しく眼に着くのは、政子及び時政らの權勢が非常に増大したことである。勿論、頼家の無能を前にして、實力ある彼等が次第に地歩を占め來ることは當然であるが、其權限が急速に擴大されてゆくを見逃すわけにゆかない。それと反比例に、頼家の勢力が殆ど皆無に近いものとなつたことも亦認めねばならぬ。

當時の頼家は、全然悲劇中の人物であつた。彼れは九月に入つて、其病が稍快方向つたが、比企一族及び愛兒一幡の死が、彼れの頭に鋭く刻み付けられて居て、懊惱し、悲憤した。そして速かに當の敵時政に復讐しようと思つて、先づ和田義盛、新田忠常の二人に望を囑し、堀藤次親家に二人への密書を託して、時政を討たうと計つた。ところが、義盛は前後を思慮して、頼家の無謀に與みするとの危険を察し、頼家から來た密書を時政に示した。時政は義盛の厚意を謝した後、政子の許可を得て、忽ち堀親家を抑へ、工藤行光に命じて親家を誅せしめた。そして忠常は、僅かの誤解から謀叛者のやうに見做されてこれも加藤景廉のために殺された。かうして頼家が頼みに

に思つた人々は前後して、時政のために倒されたので、彼れは一段と悲憤の情を増した。

政子が頼家に對する冷めた態度

頼朝以來久しく不平を抱いた時政

時政假面を脱す

けれども頼家は、籠の中の鳥同様、最早どうすることも出来なかつた。其上政子は、頼家の心中を一向察しなかつた。「彼れは重病のため、家門を治めてゆくに堪へない」と云ふ理由の下に頼家を出家させた。そして頼家が京から呼び寄せた行景や知康らを歸洛させた。それは頼家が、沁々孤獨の悲みを知つた。それは二十二歳の秋である。かうした間にあつて、北條氏の恐しい鐵手は始終、源氏の正系を滅亡の方へ導くやうに動いて居た。其中心人物は勿論時政である。時政が何故かくまで、頼朝の遺兒を迫害するかは、頼朝と時政との關係について考察を加へないと分らぬ。元來、時政は頼朝の覇業を最初から助けて、功勞があつたに關らず、實際、それだけの恩賞を以て酬はれなかつたとは既に前にも述べた。けれども頼朝に對して萬一、不平がましい素振を示すと、其猜疑の眼で鋭く睨まれて、悲しい犠牲に供せられるのは明かである。彼れはそれを知つて、黙々として居た。彼れは能ふ丈の忍耐を重ねて來た。けれども頼朝が歿すると、彼れの忍耐はもう續かなかつた。溫柔の假面を投げ捨て、野心の鋒先を現はして來た。それは、ある意味に於て、頼朝が時政を冷遇したことに對する

時政の老獪

痛切な復讐でもあつた。

それに時政は、老獪な點に於て、色々の陰謀を運らす點に於て、鋭い手腕に於て、恐るべき人物であつた。彼れは力めて將士に恩を施すと共に、頼家に對して始終迫害の手を伸ばし、險辣な手段で、羊のやうに弱い頼家を惱まし續けた。殊に頼家が比企氏に身方したことに對しては深く不快を感じ、嘗に頼家をして出家せしめたのみならず、續いて頼家が尙ほ生きて居るうちに、其訃音を眞實らしく京都に傳へて、千幡(實朝)に對して、將軍職の宣下あるやう奏請した。其傍若無人の態度は、時政獨有の長所であつたらう。朝廷では幕府の奏請によつて實朝に對し、建仁三年九月、征夷大將軍に補し、從五位下に叙するとの宣下があつた。それは頼家が出家を強ひられたのと同じ日であつた。

時政の虚偽

頼家幽囚の人となる

出家後、頼家の病は餘程快方に向つた。けれども幕府では將軍としての頼家を廢立すべきことは既に決したのであるから、今更彼れを鎌倉に留めて置けなくなつた。で時政らは、頼家を眼の上の瘤のやうに見てまるで狂人扱にして、無理に伊豆修善寺に幽閉した。頼家の生活は、押込同然で、餘りの淋しさに堪へかねて、一書を政子の許に送り、切に近臣の入侍を懇求したが、許されなかつた。かうして頼家は鎌倉に残した

浴室で暗殺された頼家



源頼家廟(修善寺)

愛見のことを思ひ、或は昔の榮華を回顧しながら、わびしい、うら悲しい日を送つて居た。そして彼れは秋の月を仰ぐにつけ、木枯の音を聞くにつけ、春の花や、初夏の若葉などを見るにつけて、涙ぐましい感傷的な心持になつた。彼れが歿したのは、元久元年七月十八日で二十三歳の時である。

頼家の死については、『吾妻鏡』の中に其記事がないのは、故ら省いたものだと思はれる。彼れの死は、病のためではなくて、北條氏の刺客の手に罹つて、浴室で殺されたのである。刺客の名は正史に記されて居ないが、或る野乘には金窪行親だとして居る。そして刺客を使喚した主謀者は、時政とも義時とも隔々に傳へられて一定して居ない。どうも時政の發意で、義時がそれに

参劄したのではなかつたか？ いづれにもせよ、頼家が北條氏のために悲惨な死を遂げたことは確である。

頼朝が蒔いて置いた業因業果

政子の權勢

頼家の死を聞いて、其遺臣が非常に悲憤して、亂を起さうとしたが、それは直ぐに幕府のために鎮壓された。かうして頼家の悲劇の幕が閉ぢられると、やがて三代將軍實朝の時代が來た。ところが、實朝の前途に對しても亦頼家と同様、一抹の暗雲が漂うて居て、何となく底知らぬ不安を感じしめるやうな點があつた。蓋し頼朝が生前に於て、其近親、同胞などを殺した罪業が、其子の頼家、實朝、其孫の身にまで深酷に應報したので、結局、業因業果の種を蒔いたのは頼朝であり、更に遡つて云へば父を殺した義朝だと云ふ風に同時代の人々は考へた。

實朝が將軍となつたのは十二歳の時であつた。彼れは早熟の才を有つて居た。當時母政子の權勢は正に朝日が東天に昇つたやうな具合で、大抵、幕府の號令は、政子の意志から出た。建仁三年中、鶴ヶ岡の造營や諸國地頭分狩獵を停止することなどは、政子の發意によつたものである。政子の飛躍につれて、北條氏の勢力も亦伸びた。時政は實朝を名越の邸へ迎へ、自ら教書に署名して家人に所領を給し、また舊領を安堵させた。かうした發展の途に於て、勢力争ひから先づ衝突したのは畠山重忠である。其

時政の後妻
牧氏の性格

牧氏最愛の
女婿平賀朝
雅

争ひの背後には、時政の若き後妻で大舍人允宗親の女牧氏が潜んで居た。

牧氏のことは戯曲にも書かれ、また高井蘭山の『星月夜顯晦録』にも稍々委曲をつくして描かれて居るが、歴史的に力めて正確を期することになると、牧氏のことは割合に臆氣で、わかりかねるやうなところがないでもない。唯こゝに斷言し得るのは、牧氏が政治家的傾向を有つた一女傑で、虚榮心が強く、奸智に長け、女性に通有な私愛に偏する傾きがあると共に侮り難い機略を抱いて居たことである。

牧氏の希望の一つは實朝を倒して其女婿平賀朝雅を將軍の地位に坐せしめたいことであつた。朝雅は甲斐源氏の支流で、頼朝の猶子に當り、時政の女で牧氏の所生を嗣つた。彼れは建仁三年十月京都守護として赴任し、其勢望朝野を傾けた。そして常に上皇に親近しまゐらせて居た。彼れは元久元年、平氏の餘黨平基度が伊勢伊賀に起つた時、幕命を受けて討伐に赴き、到る處敵を破つて凱旋した。後、殘黨が起ると、また彼れの手で鎮定した。其功によつて、彼れは伊賀、伊勢の守護に任ぜられた。かうした一器量ある朝雅を牧氏が其女婿として親愛したのも無理ではなかつた。

畠山重忠が減じた原因は色々あるが、近因の一つとも云ふべきは、牧氏最愛の女婿朝雅の感情を害したことにある。それがやがて牧氏を怒らしめ、また惹ひて時政の

實朝の結婚

重保と朝雅の衝突

感情をも害し、且つかねてから重忠と不和であり、其硬骨を喜ばぬ際のことであつたから、北條一家がそれを機會に重忠を亡ぼさうとする具合になつたのである。

先づ近因について述べると、實朝が略々其夫人と定つて居た噂のある足利義兼の女を好まない爲め、更に性質、容貌共に優美な坊門前大納言信清の息女を夫人として迎へることになつた。そして當年十三歳になる信清の女が行装美しく京都を出立する前、幕府は其出迎として局たちを始め北條政範、結城朝光、畠山重保、佐々木盛季、千葉常秀ら十餘人を鎌倉から上洛させた。それは元久元年十月十四日のことである。

畠山重保が、平賀朝雅と衝突したのは此際である。それは六角洞院にある朝雅の邸へ朝光、重保らが集つて酒宴を開いた時、其父に似て硬骨な重保が、ちよつとしたことで朝雅を悪口したのである。朝雅はそれを立腹して云ひ返し、雙方諍論に及んだ。其際、朝光らが仲裁に入つて事なく濟んだが、朝雅はいつまでも重保の言動が自分を侮辱したものだと思ひ込んで、復讐しようとして居た。其折柄、重保らと共に上洛した政範が病死したので、其郎黨らが計を齎して鎌倉へ歸る序に、朝雅から一書を託して重保のことを牧氏に讒言したのである。

牧氏は先づ政範の計を聞いて深い悲みに沈んだ。政範は牧氏の所生で時政の末子で

政範の死を聞いた牧氏の悲み

牧氏大に重忠父子を憎む

時政と重忠の不和の噂

あつたから、夫婦は特に政範を掌中の珠玉のやうに熱愛して居た。政範が十六歳で従五位下左馬助に任ぜられたのは破格の榮進で、それは時政夫婦が政子に懇願したにふるのである。さうしたわけであるから、今政範を喪つたことは、時政は勿論牧氏に取つて非常な失望であり、悲みであつた。ところへ彼女所出の長女を娶つて居る朝雅からの手紙が来て、重保の無禮を誇大に報じて寄越したので、牧氏は嚇となつて重保の所爲を憤つた。そして其憤りは、やがて平生から時政と仲がよくなかつた重保の父重忠の上に向けられた。で牧氏は悲みと憤りとから感情が激して、時政に重忠父子が逆謀を企て、居る旨を讒言したのである。

時政は牧氏の讒によつて、在來重忠に對して抱いて居た悪感情を激せしめられたかどうか、明かでないが、少くとも重忠に對して害を加へようとする決心を強めたと見てよい。と云ふのは『明月記』のうちに「元久元年正月、關東に叛亂があつた。時政は重忠のために敗られて山中に逃れ、廣元は害されたとの報があつて、京都中騒いだ」とあるのを見てわかる。勿論『明月記』の著者は後、其の訛傳であることを知つて天狗の處爲に歸して居るが、火のあるところに煙が颯るとすれば、無意味に近い荒誕な訛傳も、時政對重忠の險惡に近い關係を暗示して居るやうに思はれる。

蓋し重忠の性格は、到底いつ迄も、時政と提携してゆき得ない特徴があつた。彼れは資性剛直で、少しでも曲つたことを好まなかつた。そして氣概があり、腕力があつて、いつも戦争の時は必ず其先鋒となつた。要するに彼れは軍人肌の典型的人物であつた。頼朝が彼れを信じて、其子孫擁護のことを遺言したのは、一に重忠の剛直、雄武を頼母しく思つたからであらう。

ところが重忠の剛直と氣概とは、寧ろ彼れに禍した。彼れは硬骨な直言のために却つて同僚の怨みを挑發したことがあつた。また一度梶原景時の毒舌に罹つて禍を招かうとしたことがあつた。そして頼朝の歿後は、鎌倉の空氣が險惡になつて、いづれも心にそれを感じて居たから、虚偽や奸策や暗闘や呪咀や——利己の思想と言動とが正に渦を卷いて居た。さうした中であつて、假面を付けることの出来ない重忠父子の如きは勢ひ孤立するか、他の陥擠の良に罹るかしなければならぬ運命の下に居た。そして重忠の眼には、たとひ姻戚上の關係から好意的に見たとしても、恐らく頼朝歿後に於ける政子、時政らを中心とした北條一族の行動は、不正とも不快とも奸譎とも見えなかつたことであらう。北條一族の言動は重忠の是認し難いところであると同時に、重忠の言動は北條一族の政治活動上の妨害となり、支障となつて、たとひ時政の前妻の女の

重忠の硬直

重忠父子と
其周圍時政の野心
と術策最初の犠牲
者

稻毛重成

聲であつたとしても、到底存在を許して置くことの出来ないやうな點があつたらう。要するに、それらの事が時政對重忠の不和となり、やがて時政がどうしても重忠を除かねば、既定の術策を施行し難いとして、偶々牧氏の讒謗に刺戟されて、重忠を亡きものとしようとするに至つたのだと解してよからう。然しこれは時政らの政治的野心の上からすると、ひとり、重忠にのみ適用され得るのみではない。三浦、和田一族の如き強盛な人々の上にも亦適用さるべきことであつた。たとひ、人物性格上の差異があるとしても。

さうした形勢の上に於て、重忠父子は、其最初の犠牲者となつたのである。時に元久二年四月頃、鎌倉の形勢が何となく不穩であつた。逆臣があつて、將軍を襲はうとして居るので兵具を用意して萬一に備へて居るとの噂が起つたので、近國の武士は鎌倉に馳せ集つた。畢竟、時政らが重忠らを誘ひ出して一撃を加へようとして、さうした噂を立てしめたのであらう。また時政は其女の聲で常に北條家に媚びて居た稻毛三郎重成に密謀を授けて、故らに重成をして其子息郎従らを引具して鎌倉に馳せ參ぜしめた。で世上ではそれを怪み、色々の風聞を生じた。五月三日には、幕命によつて、これらの馳せ參じた人々は大半歸國したが、重成は依然鎌倉に留まつて、時政の密謀

に與つた。蓋し兵亂が起るであらうと云ふことに託して、重忠父子を誘殺しようとしたのである。そして其計策に欺かれて、六月二十日先づ重保が鎌倉に來た。

『吾妻鏡』によると、重忠父子を害するについて、時政から義時、時房の二人に相談に及ぶと、二人共に重忠の忠直を賞揚して、其逆謀を企てるわけがないことを述べ、時政の反省を促がしたとが記されてある。時房は暫く措いて、義時が時政を諫めたこと云ふことは、どうであらうか？ 其邊どうも首肯しかねる節がある。或は義時の胸中到底重忠の存在を許して置けぬとしたのだが、親戚で且つ幕府の元勳でもある重忠のことであるから、一應は形式的に父の反省を求めたのではなからうか？ 當時義時が四十一歳の分別盛りで、智謀に富んだを思ふと、ともすると、北條氏に身方した『吾妻鏡』の記事を丸で正面からのみ解釋しがたい事情がある。

牧氏の憤怒



北條義時花押

それから『吾妻鏡』では義時、時房らの諫言を牧氏が憤つて、使者を義時の許に急派して重忠を曲庇することを責め、「妾が家のため、子孫のため、忠となるべき重忠らを除かうとするのに、御身が

重保亂箭中に死す

重忠の驚愕と決心

それを抑止する、のは、此繼母に讒者の悪名を荷はせようとなさるのか」と詰つたので、義時も力なく「此の上は賢慮に従ひませう」と答へた事が記されて居る。

何れにても、重忠の亡滅は免れ難い運命であつた。彼れの子息重保は、鎌倉に着くと間もなく、時政の旨を受けた稻毛重成の息小澤重政及び佐久間光友らのため不意に攻められて、三十餘人の郎従と共に、それに十倍した敵と戦ひ、雨と注ぐ亂箭中に勇戦して主従悉く討死した。重忠はそれとも知らずに折柄、舍弟長野重清、同宗重らが他國に居るので、僅かに家の子郎等百三十餘人を従へて、鎌倉に向ふ途中、武藏國二俣川の邊で、始めて鎌倉の様子を聞き、重保が討死したことを知つた。そして時政らの讒言のため、鎌倉から大軍が押寄せて來て、重忠を謀叛の首魁として誅戮を加へようとして居るのを知つた。此時ばかりは、物に動ぜぬ重忠も、非常に驚いて、深い悲痛に打たれたが、やがてすべてが免れ難い運命であることだと思ひあきらめて、「かうなつた上は潔く大軍を迎へて討死しよう」と決然として覺悟の臍を固めた。

其時、彼れの部下は少數の兵で大軍に當ることの不可を説いて、切に退却して後圖を爲すことを勧めたが、重忠は「退いて自己の心事の清白を疑はれるよりも、いつそ潔くこゝで討死しよう」と云つて、義時が率ゐて來た大軍を邀撃することにした。そ

深い重忠の
最期

義時の嘆息

鎌倉時代後篇

五四

して重忠は勇士の最期を示すため、快く奮戦して義時の後陣までも斬り進まうとの勢を示した。彼れは真先に進んで来た安達景盛の部下加治次郎、飯間太郎の二人を斃して、無雙の勇力を現はしたが、愛甲季隆の手練の矢に中つて、重傷を負ひ、「今はこれまでだ」と云つて切腹してしまつた。それは元久二年六月のことで、彼れが四十二歳の時である。重忠の部下も亦悉く奮戦して戦場の露と消えた。

後で、義時は重忠が僅かばかりの部下を引きつれて居たのを見て、「彼れには叛謀の志がなかつたのである。でなければ、あんな少勢で出てくるわけがない」と云つて、其無實の罪に倒れたのに同情し、鎌倉に歸ると、父時政に説いて、重忠父子を禍の魔手に導いた稻毛重成父子らを誅したことが『吾妻鏡』にある。要するに『吾妻鏡』では、義時が徹底的に始終、重忠の同情者、理解者となつて居るが、果してどうであつたらうか？ 私には一つの謎のやうに思はれてならない。

(一)『猪隈關白記』に「源朝臣頼家、去朔月薨去之由」云々とある。かうした虚偽の報告を時政がした爲め『一代要記』のやうに「十月二十三日、任右兵衛佐、頼家卿蘇生出家」云々の説を生じた。

(二)『愚管抄』には「頼家入道をばさし殺してけり、とみにえとりつめざりければ、頸にを

をつけ、ふくりを取りなどして、殺してけりと聞へき」とある。刺殺説は『梅松論』、『保暦間記』、『北條九代記』、『増鏡』、『鎌倉大日記』、『武家年代記』、『承久記』などにも出て居る。以上の書が大抵、頼家に向つて刺客を放つたものを時政だとして居るが、ひとり『増鏡』、『武家年代記』のみは義時だとして居る。

(三)文學博士坪内逍遙氏作『牧の方』参照。

(四)『保暦間記』に「牧の女房と申す人、心武く驕れる人なりけり」と記して居る。

(五)朝雅は、朝政とも記した書がある。或は朝政の方が正しいかも知れぬが、大抵の史書は朝雅と記して居るので、其方にして置いた。

(六)『顯晦錄』には重保と朝雅との諍論を興味多いやうに潤飾して記して居る。

(七)『古今著聞集』には、重忠の強力のことが記されてある。『保暦間記』には「重忠は弓箭を取つても無雙の仁也、當將軍の守護の人也」と賞揚して居る。

第二章 佛教界に於ける新機運の流動

第一節 時政の後妻牧氏の政治的野心

將軍實朝の時代は、先づ畠山重忠の死によつて舅、聲の間に於ける悲劇の血痕を印せられたが、其暗殺の魔手は一轉して、實朝の頭上に伸びようとした。それは政子對時政の後妻牧氏、義時對時政、實朝對朝雅の權力争ひから來たことで、其騒動の中心に活動したのは、政子、牧氏ら二人の女流政治家であることは、頼家の時と趣を異にした點である。そして大體に於て、北條一家の内訌と云ふべき趣があつた。

蓋し政子や義時らは、時政の前妻の子であつたから、後妻として來た牧氏と自然調和し得なかつたことは、世間に於ける多くの實例に徴しても明かである。殊に牧氏は虚榮心が強く、わが所生の男女を偏愛する傾きがあつたから、男優りの政子や智謀に長けた義時とは、到底相容れることが出來ない狀勢にあつた。けれども時政は、若い後妻の才貌に心身を打込んでともすると、牧氏の嬌舌に左右されさうな場合が多かつた。それに牧氏所生の子女にも、時政の愛が集注された趣があつた。政範のことだけ

家族的葛藤

牧氏の隱謀

でも、既にそれが明かである。かうした點に於て、時政の周圍に於ける前妻の子と後妻との間には、隱微の間に葛藤が行はれて居たのである。

さうした葛藤の上に強い刺戟を與へて、北條一家の内訌を激生したのは、牧氏が其女婿平賀朝雅を實朝に代らせようとした陰謀事件である。牧氏の強い虚榮心や大きい權勢慾は唯々其老いた良人が執權として關東に時めき、女婿朝雅が京都守護職として勢威があると云ふだけで満足して居られなかつたと見える。それに前妻の長女であるところの政子が尼將軍として、半ば政治上の實權を握りつゝ、あることが羨ましくてならなかつたと見える。で彼女は朝雅を將軍の地位に据ゑるなら、何でも自分の思ふ通りの事が出來るとの考へから、先づ實朝を亡きものにしようと企て、さうしたことに抜け目のない時政をも陰謀に加擔せしめたのである。

牧氏が如何なる逕路により、如何なる方法を以て實朝を殺さうとしたか、在來の史料だけでははつきりしない。實朝が將軍となつた時には時政邸に居たが、後建久三年九月、政子が阿波局の上申によつて牧氏の異圖あることを知つて自分の居所へ引取つたとあるのを見ると、早くから牧氏の野心が其顔色、舉措の上に現はれて居たと見える。其後、元久二年閏七月、牧氏が實朝を殺さうとした時は、或書に實朝を時政の自

牧氏が實朝暗殺の手段

毒殺か刺殺か

牧氏浴室に於て實朝を殺さんとす

邸へ招請したと記されてある。次ぎに牧氏がどんな方法で、實朝を殺さうとしたかと云ふことはどうも明かでない。或は毒殺しようとして失敗したので、夜の暗にまぎれて、實朝を刺殺しようとしたとし、或は浴室へ案内して殺害しようとしたと傳へられて居る。何れが眞實であらうか？ 私は後者の説の方が事實に近いのではないかと推測する。勿論、別に大した根拠があつて云ふのではないが、前者の方法は餘りに念が入り過ぎて、どうも小説的であると思はれるからである。且つ頼家なども、矢張り浴室中で失はれたことが、『保曆間記』『鎌倉大日記』などに載つて居るのを見ると、實朝に對する暗殺の方法も矢張同一手段に出たのではあるまいかと推すべき理由があるからだ。然し牧氏は實朝を邸に預つて居る中に、機を見て手を代へ、品を代へて、實朝を亡きものにしようとしたと見た方が、一層眞に近いやうである。浴室暗殺の計畫は彼女が最終に用ひたのではなかつたか？ ところで、此浴室での實朝暗殺計畫は見事に失敗に歸した。それは政子が時政夫婦の舉措に不審を抱いて、急に義時を時政の邸へ赴かしめて、實朝を事なく救ひ出させた爲めであつた。そして政子が三浦義村、結城朝光らに命じて、實朝を時政の邸から義時の邸へ移らしめると、今まで時政に従つて居た武士は大抵去つて、義時の邸へ赴いてしまつた。そして彼等は嚴重に實朝を護

隱謀失敗

時政夫妻の退隱

衛した。蓋し武士らの頭には、「實朝は源氏の正系であり、且つ私らの主君だ」と云ふ感じが深く印象されて居たからである。かうなると、流石老獪な時政も、策を施すべき術を知らなかつた。結局彼れは牧氏と共に寛典に處せられ、薙髮して七月二十日、伊豆北條に退隱した。蓋し實際は、政子に迫られて、止むなく頭を低れ體よく追放されたのである。一説に彼れは、頼家と同じやうに修善寺に幽閉されたと傳へられて居るが、北條へ退居したと云ふ方が本當であらう。尙ほ此時、時政に殉して出家したものが多かつた。

義時執權となる

時政が政治的に没落すると、其後を繼承して執權の地位に就いたのは義時である。「執權」の稱は『吾妻鏡』に於て、こゝに始めて點出されて居る文字である。畢竟、政所別當の代名詞であるが、爾後、すべて「執權」の文字が用ひらるゝこととなつた。當時義時は直ぐ牧氏陰謀の始末を付けるために、牧氏が擁立しようとした朝雅を倒すつもりで、命令を京都に居る武士に傳へ、家人を集めしめて朝雅を誅せしめることにした。で京都に居て、義時の命令に接した佐々木廣綱、同高重、後藤基清、五條有範、源親長らは、七月二十六日の曉天に先づ院の御所に赴き、旌旗を翻して四門を閉ぢた上、朝雅を六角東洞院の邸に襲うて、一時敗北したけれども、刎頭勝つて朝雅の首級を得

平賀朝雅の死

た。當時、朝雅はよく戦つたが、山内持壽丸のために矢を射中てられ、悲愴な最期を見せた。

其後、幕府は、大内惟義の子惟信を伊賀、伊勢二國の守護に任じた。惟信は朝雅の甥に當るのである。また京都守護の任は中原親能の子藤原季時に委ねた。ちやうど親能も當時京都に留まつて居て、季時を補佐した。かうして牧氏の陰謀事件はすべて落着いたのである。

血の地獄

頼朝他界以來、五六年間に梶原景時父子の没落を最初の悲劇として、活修羅の場面をそれからそれへと展開した。頼家の死、比企能員の自滅、一幡の無残な最期、畠山重忠、仁田忠常の冤死、稻毛重成の自ら求めた應報、平賀朝雅の戦死など、殆ど血の地獄、無道無慈悲の世界を見るやうな活畫圖が展開された。それがため、將士は互に疑ひの眼を以て相對するやうになつて根も葉もない様な噂が徒らに人心を動搖させ且つ暗くした。折柄、下野の豪族宇都宮頼綱が謀叛したと云ふ説が傳はつたので、頼綱は非常に驚いて、一書を義時の許に送り毫も他意なき由を述べた。そしてそれだけでは尙ほ安心しかねて、自ら鎌倉に赴いて事情を詳しく述べようと思つた。ところが、義時はどうしても頼綱に面會しようとしないので、止むなく結城朝光の許に自分が切つた鬚

濡惑に囚はれた人々

を差出して、義時へ宜しく冤を明かにするやうに頼んだ。此一事を以てしても、當時の鎌倉には、如何に重苦しい空氣が満ちて居たかを想像することが出来よう。

(一)『吾妻鏡』参照。

(二)『保曆間紀』参照。

(三)『顯晦錄』参照。

(四)『保曆間紀』に「七月二十日奉請て、湯殿にて失ひ奉らんとしける」云々とある。

(五)『愚管抄』参照。

(六)『北條五代紀』参照。

第二節 宗教改革を促した事情

實朝の人物は、大體に於て、頼家よりも、ずつと優れて居た。頼家は政治的に殆ど無能力者のやうであつたが、實朝は稍々病弱^(一)ではあつたらしいが、才氣が夙に穎脱して居て、元久三年七月に安藝國壬生莊地頭職の訴を親裁した。時に彼れは僅かに十三歳であつた。また彼れは早くから禪宗に親む機會を得た。それは建仁三年十月、十二歳の時、壽福寺の僧行勇を呼んで、『法華經』の讀誦を受けたとでもわかる。爾後彼れは行勇に歸依して、度々壽福寺に參詣した。そして禪堂で、行勇の教へを受けたり、行

實朝の聰明

壽福寺の行
勇

行勇、榮西
の弟子とな
る

勇を導師として佛事供養などを營んだ。

行勇は、わが國に於ける禪宗の始祖と云はれた榮西の高弟である。彼れは相模國酒匂の人で、始め玄信と云つたが、後に行勇と改めた。治承五年十月、頼朝の命によつて、鶴岡八幡宮の供僧となり、慈月坊に住んで居たが、傍ら永福、大慈の二寺を管して居た。頼朝が歿した時は、夫人政子が行勇を請じて戒法を受け、如實禪尼と號した。かうして行勇は始めから、頼朝一家と佛縁が深かつた。後、行勇は、正治二年榮西やうさい禪師が鎌倉に壽福寺を建立すると、間もなく禪宗に歸して、其法弟となつたのである。行勇は深く榮西に心服して、供僧職を有俊に譲り、専ら禪宗を研究して其要旨を極めた。彼れが壽福寺に住するに至つたのは、榮西示寂のあとを受けたのである。

かうして、行勇は始終鎌倉に留まつて、主として禪宗を説き、傍ら密乗のことも説いたとが、實朝を始め鎌倉將士の精神に多少の影響を與へたがひない。また禪宗と鎌倉文化との關係はそれ以來、漸次密接なものとなり、後には武家の宗教と云へば、主として禪宗だと云はれるやうになつた。それでこゝに禪宗のこゝについて、其傳來の逕路などを述べることにしよう。

わが國禪宗の始祖と云はれた榮西は、鎌倉時代に於ける新宗教勃興の氣連に乗じて

禪宗と鎌倉
時代の文化

榮西と法然

宗教改革の
諸原因

出た偉才である。すべての巨人は、必ず新機運に伴うて現はれる。彼れより少し先立つて出た淨土宗の始祖法然上人(源空)の如きも、矢張さうした新機運の中から出た傑物である。何故當時宗教界に新機運が動き始めたかと云ふと、それには、色々の原因があつた。

今其主要なる原因を擧げると(一)僧侶の墮落、(二)時代の變革に伴うて起つた武士、平民の勢力増進、(三)厭世思想の流行、(四)支那との交通に伴ふ新文化の輸入、(五)鎌倉幕府の宗教政策などである。平安末期に於ける僧侶の墮落は實に甚しかつた。曾て、傳教、弘法らによつて打建てられた新宗教も、名利の念に囚はれた僧侶のためにひどく汚濁されてしまつた。何事にも祈禱、修法を第一として、成佛得道の觀念や、戒律などを閑却した。そしてともすると兵火を以て他を威嚇し、世と人とを救濟すべき佛僧が却て他から救濟されねばならぬ破目に陥つた。でなければ徒らに空虚な戲論に囚はれて、貴族の玩弄に甘んずるやうな弊害に墮して居た。正に『大集經』などに於て豫言された末法濁惡の時代が來たことを少數識者に痛感せしめた。かうした行詰つた状態はどうしても新宗教の興起を促がさなければやまなかつた。

それに、鎌倉幕府の創立と共に生じた時代の變革は、武士の擡頭を促した。彼等は

宗教上に於ける武士、庶民の要求

宗教上、浮華、繁瑣な理論や修行などを好まないで、すべて簡單、明瞭な宗旨を要求した。難行道よりも易行道、自力宗よりも他力宗、貴族的よりも庶民的な宗教をもとめてやまなかつた。武士の擡頭につれて、稍存在を認められた平民とても、矢張り其宗教的要求に於ては、大體武士と相似て居た。結局、彼等は其生活、趣味の上に没交渉であるところの宗教を排して、彼等に深い親みのある宗教を要求した。此點からも亦新時代にふさはしい宗教が生れなければならなかつたのである。

更に當時の社會には、厭世思想が流行して居て、佛陀の手に繼らうとする傾向が鮮明に現はれて居た。蓋し保元、平治の亂以來、權力爭奪の悲劇が度々繰返されて、肉親、同胞の間に於ける道德的背離が度々演出されたばかりでなく、今日の勝利者は、明日の敗北者となり、昨は榮華に耽つて世に時めいたものが今は零落の淵に陥つて、世のはかなさを嘆つと云ふやうな有様があり餘るほど眺められた。殊にそれが平家没落前後に烈しかつた。「平家の一門でなければ人でない」とまで謳はれて居た全盛が、一朝、義仲や頼朝が兵を擧げるに及んで根柢から打破られて、一族多く壇ノ浦に敗死すると云ふ悲痛な運命に囚はれた。それに治承以來、度々、天變地異などあつて、人命、家屋を毀損することが少くなかつたので、人々は彼是思ひ合せて、深い厭世思想

厭世思想の流行

滅罪を祈つた士

入宋求法の日本僧侶

支那僧侶の渡來

に沈んだ。中には、戰場に幾度も出入して、敵を殺傷したとを深く悔いて、滅罪の生活に没入しようとするものもあつた、さうした不安、懺悔の心からも、新しい宗教が自ら痛切に要求されたのである。

次に平安時代に遣唐使の派遣をやめて以來、日支の交通は殆ど絶えたやうであるが、其間、僧侶中には、求法のため渡海の危険をも恐れないうで、身を商船に託して支那へ赴くものが往々あつた。それらの人々が支那の新文化をわが國に招來したわけである。そして鎌倉幕府の創立前後は、宋の衰頹時代で、夷狄が四方から亂入して、元が新興の勢を示した。其際、元に屈服することを好まなかつた僧侶の中には、わが國に亡命し來つて新宗教を宣傳するものがあつた。或は幕府から親しく招聘された名僧などもあつた。それらの人々の傳道や刺戟などによつて、わが行詰つた宗教界に新機運を醸し出すべき一原因を附與されたのである。尙ほ他に鎌倉幕府の宗教政策が、かうした趨勢を助長したことも數へ入れてよい。それは舊宗教を成るべく抑へて、新宗教に身方したのである。

要するに、以上の諸原因が錯綜して、宗教界の革新を促した。空也、良忍、重源などは、さうした新機運を直覺して、先づ革新の先聲を發した人々である。そしてそれ

宗教界の巨人

が法然の時に至つて、明瞭に具體化するべき時機に入つた。法然が浄土宗を提唱して上下の人々を風靡し、門下から幾多の英才を出したに次いで、榮西、能忍らの禪宗鼓吹を見た。高辨(明恵)の華嚴宗、俊蒞、貞慶(解脱)らの律宗、親鸞の眞宗などが、或は起り、或は中興された。一遍の時宗や良觀の律宗再興や日蓮の新宗教、道元の禪宗興隆などが續起した。かうして、日本宗教史上、前にも後にも見られないほどの活氣と生彩とを見るに至つた。

融通念佛の創唱者良忍

でこ、には、法然、榮西らのを述べる前に一應、それらの宗教革新の先驅をした人々のことを略述したい。空也及び其法弟千觀のことは、既に『平安時代』で述べたから、それと前後して、鳥羽天皇の院政時代に出た良忍上人の事から述べる。良忍は融通念佛の創始者で、法然、親鸞の宗教を理解するには、遡つて良忍の宗教を知らねばならぬ。良忍は藤原道武の子で尾張知多郡島田郷の出身である。十三歳の時佛學修業のため叡山に上り、苦學十年の後顯密二教に通じ、聲明業をも極め得たので山を下り大原に退いて、來迎院を建て、そこに清い隱遁生活を送つた。

彼れは日夜、華嚴宗の奥義を極めようとして、一心不亂となり、心を西方浄土によせて、『阿彌陀經』を讀誦し、毎日に念佛すること六萬遍に及んだ。そして二十餘年の

唯心哲學的傾向を有する他力宗

靜思の結果、永久五年五月十五日正午、面前に阿彌陀(三)如來が現はれて、直ぐに往生の正因を彼れに示した。其時、如來は「一人一人、一切人一人、一行一切行、一切行一行、是を他力往生と名づける」と述べ、更に偈を説いて「十界一念、融通念佛、億百萬遍、功德圓滿」と云はれた。で良忍はそれを彌陀の直接として遵奉したのである。概言すると、融通念佛宗は華嚴法華の原理を攝取した唯心哲學的傾向を有する他力宗で、浄土宗や眞宗と區別して「性具圓頓の他力」と稱せられた所以である。

融通念佛宗の特色と原理

此宗の所依の經典は『華嚴經』『法華經』で、浄土の『三部經』を傍依として居る。其特色は、彌陀から直接受けた偈文にある通り、人々が念佛修行をすると、其功德によつて自性本具の徳相が現はれ、其身そのまゝ、佛身となつて、佛土に生ずることが出来ることと解釋したところにある。そして宇宙の事と理とは、互に融通して、圓融無礙であるから、これを宗教的方面にあてはめると、一人で一切人を攝し、一切人が一人に入り、彼此融通するわけだから、一人が稱名念佛すると、衆人のために功德となり、衆人が稱名念佛すると、各一人のために功德となる。そして念佛の一行を以て萬行に通じ、萬行を以て念佛に通攝する。かうして人々は融通してやまぬから、是れやがて自他共に成佛する所以であるとするのである。また人々が念佛する時には「口稱(四)の念佛」と云つ

口稱の念佛

念佛弘通に
力めた人々

て、大聲を出して懸命に唱へるがよい、それによつて直下に唯心的に極樂淨土に行く
ことが出来る」と云ふのである。

良忍の融通念佛は一面、唯心哲學的であるが、他面平民的な諒解し易いところがあ
つた。其弘布のために應用した聲明業は日本に於ける聲樂の根原の一つである。そし



後 人には、覺鑿、永觀、實範などが居た。永觀
乗は貧民、病者、囚人の友となつて、好んで彼
等に物を施し、懇切に説教した。また「大和
源 尙南無阿彌陀佛」の別稱を得た重源上人（俊
乗房）があつた。重源は俗性を紀氏と云つて、
像

のである。「法然上人行狀畫圖」などによると、法然の弟子となつて居るやうだが、どう
であらうか？ 年齢から云ふと、重源の方が二十歳も年長であるのみならず、其大佛
建立の發願が高野山へ參詣した時、弘法の夢の告げによつたと云はれて居る。また大
佛の勸進については、法然の推舉によると傳へて居るやうであるが、重源がそれに取

重源は法然
の先輩

か、つたのは、法然が開宗後幾年も経たぬ頃で、重源を推舉するだけの名望が未だな
かつた頃であつた。何れにもせよ、重源は遙かに法然の先輩であつたことは確かであ
る。それで彼れを法然の弟子と見るのは、どうであらうかと思はれる。

重源が社會
事業に於ける
偉大な貢

彼れは良忍と同じく『法華經』、『華嚴經』などを尊重し、且つ阿彌陀佛名を人々に附
けた。之は重源によつて始められたのである。また重源は社會事業のために、非常に
力を入れた。大佛の修理建立のほかは港を修築し、橋梁を架し、道路を平坦にするな
ど、可也偉大な功績を残した。橋では攝津の長良橋、渡邊橋、近江の清水寺橋、瀬多橋
などを架した。港では魚住を始め、大輪田泊（後の兵庫港）、筑前博多などの修築につ
くした。道路では伊賀の國境や備前船坂山などを開いて、旅人の往來に便宜を與へた。
また彼れは、行基の舊蹟だつた河内狭山池の堤防が崩れか、つたのを作り直し、且つ
石の樋を六段ばかり設けた。それらの社會事業と共に、彼れが傳道に力めて、良忍一
派の念佛宗は、自然、民間に弘通さるゝに至つた。要するに、良忍、永觀、重源らは、
佛敎界に於ける新機運が動き始めたのを直覺して、其の先聲を爲した過渡期の人々で
ある。

(一)『吾妻鏡』を見ると、「實朝病あり」とり、「實朝疾あり」と云ふ記事が、元久年間に數回

出て居る。

(二)阿彌陀佛(Amita-Buddha)は西方極樂世界の教主である、阿彌陀瘦(Amitayus)阿彌陀婆(Amitābha)の二つの稱がある。前者は無量壽命を意味し、後者は無量光明を意味するの
で、無量壽佛、無量光佛とも譯する。妙樂大師は「諸經の讚る所、多く彌陀に在り」と云つて
ゐる。

(三)『古事談』參照。

(四)『沙石集』に「小原の僧顯眞座主、四十八日の間、往生要集の談義し給ふ事ありけり、法
然房の上人、俊乘房の上人(重源)など、談義の衆にて、小原の上人達、あまた座につらな
り、如法の後世の學問の談義なりけり。四十八日功を盡て、人退散しけるに、法然房俊乘房兩
上人ばかりはし近く居て、法然房申されけるは、此程の談義の、所詮いかゞ御心得候と俊乘
房に申されければ、秦太瓶一なりと執心とまらん物はすつべしとこそ心得候へと語らる。僧
正御簾のうちにてきゝ給ひて、上人たち何事を語り給ふぞと仰せられければ、俊乘房かくこ
そ申候へと、法然坊申されければ、御衣の袖に涙はらくとこぼし、此ほどの談義に、是程
に珍しき事、承らずとて、隨喜し給ひける由、或人語り傳へき」とある。

(五)『南無阿彌陀佛作善集』參照。

(六)『愚管抄』に「大方東大寺の俊乘坊房阿彌陀の化身といふ事出きて、わが身の名をば南
無阿彌陀佛と名乗り下の人の上に一字をきて、空阿彌陀佛、信阿彌陀佛などと云ふ名を、付
けゝるを、まことにやがて、我名にしたる尼法師多かり、はてに法然が弟子とて、かゝる事
どもしいてたる、誠に佛法の滅相うたがひなし」と記して居る。

(七)建久七年の太政官符に「應任東大寺大和尚重源申請。知識不_レ論_ニ神社佛寺權門勢家庄
園公地。令_レ伐_テ用造_ニ築魚住大輪田泊等_ニ石椽並一洲小島料村柯木竹等_ヲ。點進破損船瓦。兼雇_ニ
役河尻邊在家人夫事_ト」とある。

第三節 淨土宗の創唱

融通念佛の事を述べると、勢ひ淨土宗のことを述べるのが順序となる。此宗は最も
平民的で誰れも入り易く、修め易かつた。それは傳教、弘法らが曾て都市佛教を山岳
佛教に引上げて、自力難行によつて深遠の理論を構成し、合せて國家鎮護に資したと
ころの傾向とはちがつて、他力易行によつて平明の理論を構成し、個人救済に資する
とに力を入れた點に淨土宗の特色があつた。つまり、一度山上に引上げられた宗教を、
また新たに地上に引下したのである。そして一部の知識階級や貴族階級の成佛及び現
當の幸福を主眼とする方へ導いてゆかうとしたのである。形式佛教、末梢佛教の弊に
落ちた當時の宗教から人々を自由な世界へ解放しようとしたのである。それは一種の
宗教革命であつた。

日本に於ける淨土宗は、大體以上のやうな目的と旨意と時代の要求との下に宣傳さ

印度支那に於ける淨土宗

る、こととなつた。そして其始祖となつたのは、法然上人(源空、圓光大師)である。蓋し印度、支那に於ては、早くから此教義が唱へられて居た。印度では馬鳴、龍樹、天親、菩提流支、支那では曇鸞、道綽、善導などが其提唱者で、それへ法然を加へて八祖とするのである。以上の人々の中で、天親は『往生淨土論』を作つて、釋尊が言説した淨土三部經の要義を述べた。それで此宗旨では、淨土三部經と『往生淨土論』とを所依とするのである。

此宗は、現實界を穢土と見做して、死後人々が西方極樂淨土に往生することを理想とするところから、淨土宗と稱したのである。そして其教判に於ては、釋尊一代の諸教を聖道、淨土の二門に分ける。聖道門は此の土に於て、證果を得ようとする自力教のことで、淨土門は専ら彌陀の名號を唱へて、淨土に行つて、證果を得ようとする他力教のことである。支那の道綽禪師は『安樂集』二卷を作つて、其中で如上の教判を立てた。其中で「唯々淨土の一門のみ通入すべき道がある」と云つた。結局、此宗では、難行であるところの聖道門を擱いて、易行であるところの淨土門に赴き、力めて一般民衆を汎く教化しようとした。言ひ換へると、むづかしい理論は、力めてこれを避けて、實行し理解し易い教へを旨とし、唯々阿彌陀如來の本願を只管に信じて、其名號

淨土宗の教判

民衆的傾向

さへ一心に唱へて居れば、誰れでも成佛すると明示したのである。

法然が此宗を始めて唱へたのは、承安五年の頃で、高倉天皇の治世である。彼れは美作國久米押領使漆間時國の子で、長承二年四月の出生である。彼れは幼少の頃から



法然上人畫像

文珠と云はれたほどに聰明であつた。保延七年、彼れが九歳の時、父が不意に源定明のために殺されて世を去ると、其遺言によつて菩提寺の觀覺について佛道を修めた。六年ばかり修業を積み、やがて叡山に上つた。そこでは、北谷持實房

法然の修學時代

源光の室に入つたが、次ぎに有名な學匠泉圓について五年間勉學して、略々天台宗の奥儀を知つた。また彼れが出家したのは十五歳の時である。彼れは十八歳に達した時、皇圓の許を去つて、黒谷に住む叡空の許に赴いた。叡空は

叡空と法然

融通念佛宗の創唱者良忍の高弟である。そこで彼れの遁世の志を叡空に話すと、「前途多望な秀才が立身の道を捨て、遁世しようとするのは感心だ、御身は法爾法然の聖た、生れながらの世捨人の聖だ」と讃めて、法然房と云ひ、源空と云ふ名を與へた。

爾後、法然は二十五歳まで七年の間、叡空の門に居て、源信の『往生要集』を読み、専ら念佛を修した。また一切經及び諸宗の章疏しやうじゆを熱心に研究した。叡空は益々法然の前途に囑望して、先師良忍から傳へられた一乘圓頓の戒を法然に授けた。所が彼れは二十五歳になると、また胸中に疑念が生じて現狀では安心が得られないところから、黒谷を出て諸方に遊學した。當時彼れに接した三論宗の寛雅、法相宗の藏俊、華嚴宗の慶雅などは、いづれも其非凡の學識に服して、「智慧第一」の賞辭を惜まなかつた。

それから彼れは再び黒谷の幽棲に歸つて、度々、一切經を閲して、毎日靜思を續けてゆくうちに少からず煩悶した。それは知識や學問を積めば積むほど、却つて彼れを懷疑に導いたからだ。結局最後に善導の『觀經疏』の「一心專念彌陀名號」の文を見るに及んで、彼れは始めて澗然として悟り、斷乎として聖道門を擱いて、淨土門に歸する決心をした。で彼れは東山吉水に住居し、承安五年春、四十三歳で、淨土宗を唱へた。それは彼れが三十五年間の研學と精思との結果で、漸く限りない法悅に觸れたのであ

黒谷に於ける靜思

懷疑に沈んだ法然

る。そして悲しく世を去つた父の遺言を全うする時が來たのである。

こゝに、考へねばならぬことは、法然が『往生要集』及び善導の『觀經疏』から影響されて居ることである。『往生要集』には「往生極樂の教行は濁世末代の目足である」と云ひ、阿彌陀如來について「大悲倦くことなく、常に我身を照らしてたまふ」と述べて居る。また善導は淨土の教儀を整へた人で、『觀經疏』のほかに『往生禮讚』、『法事讚』などの著述がある。彼れは支那唐朝時代に出て、臨淄と云ふ町の出身だと傳へられる。彼れは太宗の貞觀中、道綽に歸依し、京師に出て念佛の一行を宣傳した。彼れは、質素な生活に甘んじて三十年間淨土門を説き、阿彌陀經十萬卷を寫した。また淨土の變相三百壁を描いた。傳説によると、彼れが念佛稱名すると、一聲を念する度に一の光明が其の口中から朗かに迸り出たさうである。かうして彼れは道俗の歡喜、欽仰するところとなつた。要するに、法然には以上のやうな經文や人物の影響が深かつたことを知つて置く必要がある。

法然が黒谷の幽棲で淨土宗を説くと最初から上下の歸依者が割合に多かつたが、年を経る毎に益々増加した。皇室を始め、尼將軍政子、關白九條兼實ら上流の歸信を得たが、また熊谷直實などの勇士も、法然を信じた。有名な『撰擇集』は、兼實の請ひによつて

法然に影響を與へた佛典

支那の名僧善導

『撰擇集』に
含まれた法
然の思想、
信念

法然が六十六歳の時に書いたものである。全文十六章から成つて、(第一)聖道門を捨て淨土門に歸すること、(第二)雜行を捨て、正行に歸することなど以下、具に念佛の要文を集めて其要義を示し、八種の撰擇を出して「念佛の一行は淨土三部の宗教であり三佛の本懐である」と述べて居る。法然は聖道門は行じ難く、淨土門は行じ易い。八宗の教へ——天台、眞言、俱舍、成實、三論、華嚴、律、法相——はすべて聖道門に屬し、淨土門のみ易行道であるとした。そして淨土宗のほかの宗旨は唯々一筋に極樂へ往生しようとする正行によらないで紛雜な行(雜行)によるが、淨土宗は五種の正行——禮拜、讀誦、供養(讚嘆)、唱名、觀察——により殊に專念に阿彌陀佛を禮拜し、供養し、讚嘆し、阿彌陀の國のみを觀じ、且つ『三部經』のみを讀誦する。そして此正行中特に唱名念佛に力點眼目を置き、それを以て極樂淨土へ人々が生れ得べき根本の修業だと法然は教へたのである。『撰擇集』の文章は、法然自身が書いたものでなくて弟子の安樂房、眞觀房(感西)に執筆せしめた。

法然の淨土宗は、教學的に見ると、如何にも單純で、貧弱な趣きがある。けれども當時の宗教界の形勢や、彼れが三十五年間の苦心、體驗から生れ出た提唱は、其實貧弱でもなければ又單純でもなかつた。そこに無量の新意義があつた。それは凡人が知

宗教の中心
生命を把握
す

識や學問などによつて、穿鑿三昧に入ることの非を知つて、直ぐに宗教の中心生命を掴んだからであり、また在來行はれた日本の佛教を一切「南無阿彌陀佛」の一行中(六)に總收してしまつたからだ。云ひ換へると、念佛の一行によつて、淨土に行き、佛顔に接して、信行一致の實を得ることを端的に教へたのである。此境地と法悦とは、自ら長い間度々靜思、煩悶を重ねた後に、そこへ辿り付いた體驗を有するものでなくては眞にわからない。それは其時分の宗教界で理智の遊戲に囚はれて居たものに對して大きな驚異であつた。

宗教界に於
ける弊風

善導の説い
た三心具足
の要と法然
の信仰の道

當時、貴族階級や僧侶のすべてが、形式に囚はれ紛雜な修行に没頭して、貴族らは造寺、供養、呪術、讀經などを多くするほど神佛の冥助が己れに加はると思ひ込んで居たし、僧侶も亦さうしたことを頻りに勧めて、自家の利益增收を計つて居た。さうした時に、最初から法然があらゆる形式を一排して、「唯々信心と念佛の一行によつてのみ人は救はれる」と喝破したことは、一つの大きな革命であつた。そして法然は往生淨土の正因として特に「信」の一念に重きを置き、至誠心、深心、回向發願心の三つを必要とした。善導はそれについて「三心を具するものは必ず淨土に生ずるが、若し一心をも缺くと、生ずることが出来ない」と云ふ意味を述べた。法然も以上の三心につ

救世の福音

いて精説し、殊に至誠心の説明(七)に至つては精緻、細微に入つた、結局、彼れは不退轉の信と云ふことに力點を置いたのである。

偉大な改革

かうして法然の宗教改革は、在來の寺院も、僧侶も、また雜行、形式も、一切不用のものだと云ふことにしてしまつた。そんなものがなくても、念佛の一行と信心さへあれば、悪人も貧民も娼婦も無智者も罪人も一切救はれて、彌陀の手に導かれて極樂へゆけるとした。「悪人すら救はれる。況んや善人をや」とは彼れの標語の一つであつた。かうなるに、人々には天台や眞言や法相、三論なども要らない。宗教が國家や政府の力に頼ることも要らない。當時にあつて、これほど大きな宗教改革はない。而もそれは法然が謙遜な態度とつ、ましい心持との中に斷行されたのである。こゝに至ると、法然の偉大がわかる。

かうして、法然の宗教は忽ち上下の僧俗をそれに共鳴させた。在來の貴族や知識階級のみならず、當時厭世的傾向を有して居た武士、平民の徒をも深く共鳴させた。其目ざましい成功は、勢ひ舊式に囚はれて居た僧侶らを怨嫉せしめた。果然、改革者がいつも其頭上に加へらるゝところの迫害が來た。また僧侶中には、理論的に堂々と正面から法然に反對して、『摧邪論』を著はした梅尾(トカノ)の明惠(みやゑ)の如き人もあつた。

法然に對する迫害の因

當時法然を煩はすことが多かつたのは、彼れの法弟の一部分に屬した末流の徒であつた。彼等は法然の眞意を知らないで、妄に他宗の徒に向つて挑戦した。「自分らは彌陀の大悲によつて淨土往生し得るけれども、他派のものはそれが出來ないからすべて地獄の徒である」と云ふやうなことを吹聴した。そして彼等は自ら増長して戒律を破り、放蕩に身を持ちくづした。それらは、さらぬだに、謙遜な法然に對してさへ惡意を抱いて居た他宗の人々に一層の憎怨を懷かせた。

別時念佛の流弊

それに法然の晩年には、其高弟安樂房、住蓮房らが「別時念佛」を行ひ、哀婉な調子で『六時禮讚』を誦じ、「念佛の行者は一向に念佛さへ專修すれば、婦女と交つても、魚鳥を喰べても差支へない、阿彌陀佛はそれを咎めないで、快く迎へて下さる」と放言したことが、一種の流弊を生じた。と云ふのは、かうした單純な言説、鼓吹が、遍く都鄙にひろがつて、殊に婦女らが多く安樂房らに歸依し、中には良人を捨て、尼となつたものが少くなかつたからである。そしてそれが甚(九)しく僧侶の風紀を紊亂した。蓋し淨土宗には最初から其宗旨を曲解する凡人に依頼心、懦弱心、厭世思想などを惹起せしむべき傾向を多く持つて居たのである。

それらの事から、法然は門下のために他宗の人々の反感や憎惡を挑撥した形となつ

た。それで興福寺の衆徒は解状を朝廷に上つて、適当な制裁を浄土宗の徒に加へられんことを請うた。法然はそれを聞いて、深く自派の末流の徒を戒むる必要を感じ、元久元年十一月七日、七箇條の起請文を嚴肅な心持で書いた。「若し此七箇條の制規に背くものは私の門人でない」と彼れは手強く云つた。そして起請文には彼れの弟子百八十九名が連署して宣誓した。

ところが、法然の弟子中には矢張師の戒めに背いて、他宗を誹謗したものがあつたので、興福寺の衆徒は再び激怒した。で、更に解状を朝廷に上つて、法然の徒が、國神、國體を輕視し不道德に墮せることを痛擊して、法然らを流罪に處せられるやう奏請した。一説によると、此時は諸宗のものが法然及び安樂、法本の三人を彈劾したとも、また興福、圍城、延暦の三寺が訴へに及んだともある。

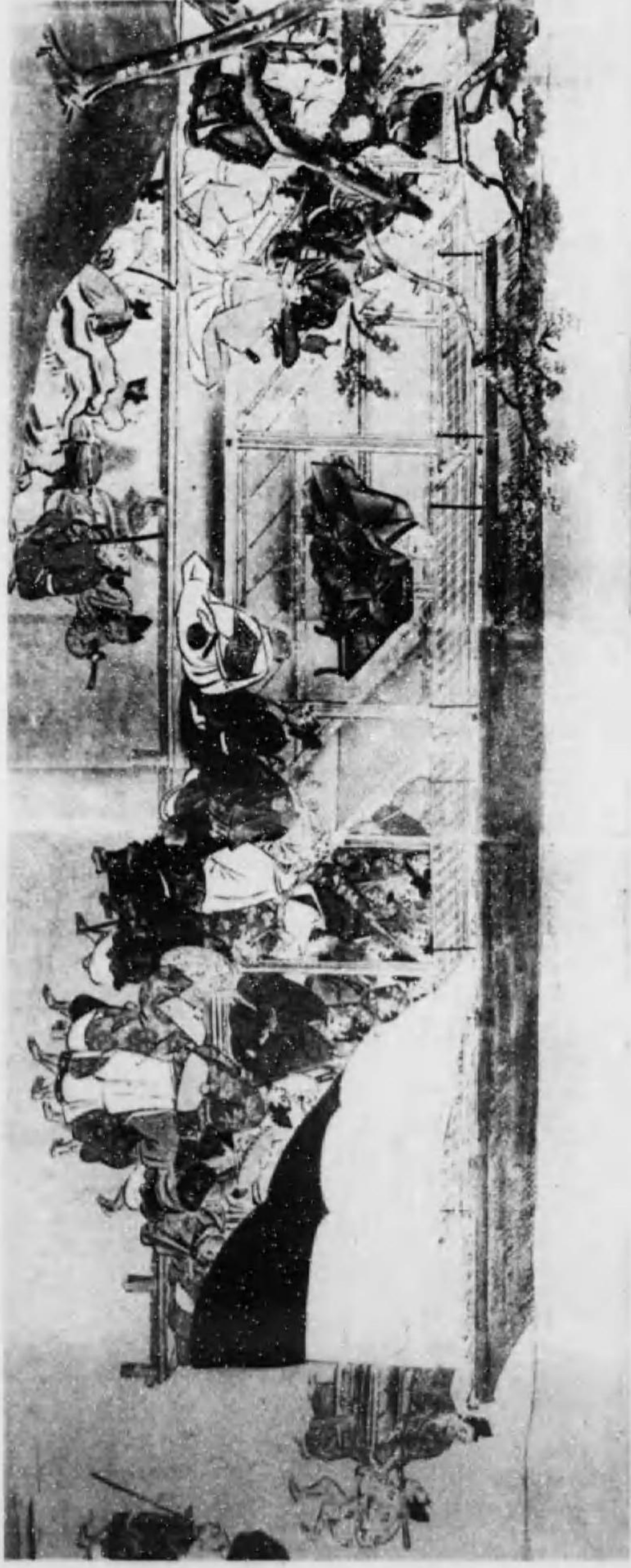
後鳥羽上皇は、色々詮議の末、法然は念佛を人々に勧めるだけであるから無罪とし、結局、安樂、法本の二人を所罰することにされた。蓋し當時、法然に歸依して、同情を彼れに寄せた指紳が少くなかつたからである。ところが、ここに法然らが上皇の逆鱗に觸れるやうな出来事が俄かに起つた。それは上皇が熊野へ行幸中、院に住へて居た二人の美女が安樂房らに歸依して、或夜突如院を抜け出し、急に尼となつたことで

法然に對する非難の聲

宮中を抜け出した二人の美女

配所の法然上人

「寺を建て、はならぬ、念佛の聲するところに
私がおるのである」と遺言して示寂した法然上人の高徳は、今更喋々するまでもない。彼れが七十五歳の高齡で讞殺に流された時には、其配所は上人を慕ふ衆法の人々で充たされた。高徳の配流は、畢竟弘法の範圍を一層擴めしめる佛陀の救ひの如きものであつた。圖は「法然上人繪傳」中の一部で、法然に歸依する人々が配所に集つて来る光景を描いたものである。



「葉ごと来る光景が面白いものである。

餅屋」中の一席で、お茶に頼む人々の頭
 割の焼くの時もこのように、圖に「お茶土人
 の頭割、學問屋の頭割が二層割とよる餅
 屋に土人が暮らす者の人々を赤くした。高橋
 中正氏の高橋と頼む二層を引いて、其頭
 人の高橋は、今更親とするものなり。餅屋の
 見ゆるものである」と証言して承知してお茶土
 「お茶屋」の図は、念のためするところの

頭割のお茶土人

安樂房らの
死刑と法然
らの流罪

親鸞も配流
さる

法然歿後に
於ける浄土
宗

ある。其事が上皇還幸の時に及んでわかつて、ひどく憤られ、承元元年正月、宣旨を下して専修念佛の徒を禁ぜられたのみならず、安樂以下四人の者は死刑に處せられ、法然は僧籍を削られて、姓名を藤井元彦と改めしめられて、七十五歳の老齡であるのに遙々土佐國へ流さるゝこととなつた。其他門弟中、重立つた五人のものも諸方へ流さるゝことになつた。其の中には善信房(親鸞)も居て越後に流された。幸ひ法然のみは、九條兼實の救解によつて讃岐に留まり、トケ月の後に至つて勅免されて攝津の勝尾寺に入ることが出来た。そして四年間そこに留まつて、建暦元年始めて歸洛する自山の身となつて、東山の太谷に留まることになつた。

法然が示寂したのは、建暦二年正月廿五日で、八十五歳の時であつた。其臨終に門人勢觀房(源智)の請ひによつて、有名な「一枚起請文」を一紙に留めて、宗義の祕要を書残した。また彼れは「寺を建て、はならぬ、念佛の聲するところに私が居るのである」と遺言した。彼れの歿後、其門下に居た多くの俊才らは、只管其宗義を熱心に鼓吹したので、叡山の僧徒は大にそれを憤り、頻りに朝廷に訴へたので、永久元年二月専修念佛禁制のことを仰せ出された。また嘉祿二年六月、叡山の僧徒らが、太谷にある法然の墳墓を發き出さうとする噂が高かつた。同年七月、朝廷は法然の門人隆寛、

法然門下の
諸秀才

幸經らを流罪に處した。けれども叡山では未だそれに満足しないで、日吉社司らと共に専修念佛宗の停廢を朝廷に向つて懇請した。かうした迫害が多いただけそれだけ、法然一派の宗教が如何に汎く世に行はれたかを知ることが出来る。

法然の門下は秀才が餘りに多かつたので、其所學によつて解釋を異にする風を生じ、凡そ六派に分裂した。其中聖光の鎮西派、證空の西山派、親鸞の眞宗などが殊に有力であつた。他に一念義、九品寺流、長樂寺流などがあつた。また鎌倉では、武士の一部が淨土宗に共鳴して、熊谷直實(一六)のほか、畠山重忠、及び親鸞に歸依した佐々木高綱らのやうな共鳴者が出來た。熊谷は敦盛を討つて以來、世の無常を感じ且つ親族久下直光と領地争ひをして、梶原景時のため不公平な裁斷を與へられると、世をはかなんで急に出家して、法然の弟子となつたのである。

尚ほ鎌倉でも一時、淨土宗は迫害されて、正治二年五月、幕府は念佛僧の袈裟を剥ぎ取つて燒棄したことがあつた。

(一)淨土三部經とは『無量壽經』、『觀無量壽經』、『阿彌陀經』である。
(二)道綽の『安樂集』に淨土門の事に言及して「問うて曰く、一切衆生皆佛性あり、遠劫より以來多佛に値ふべし。何に因てか今に至る迄、仍自ら生死に輪廻して火宅を出でざるや。」

答へて曰く、大乘の聖教に依るに真に二種の勝法を得て以て、生死を排はざるによる。是を以て火宅を出ず。何者をか二とする。一には謂く聖道、二には謂く往生淨土なり。其聖道の一種は今時證し難し。一には大聖を去る事遙遠なるに由る、二には理深く解微なるに由る。是故に大集月藏經に云く、我が末法時の中に億億の衆生行を起し道を修せんに、未だ一人も得る者あらず、當今は末法現に是れ五濁惡世なり、唯淨土の一門のみ通入すべき路」と書いてある。

(三)聖覺の『法然上人傳』(十六門記)参照。其中に「時に觀經散善義の一心專念阿彌陀の名號の文に至て、善導の元意を得たり。歡喜の餘りに、聞く人無かりしかども、予が如き下機の見法は、阿彌陀佛の法藏因位の昔、かねて定め置かるゝをやと、高聲に唱へて、感悅に徹し、落涙十行なりき」と法然の直話を記して居る。

(四)『往生要集』には「夫れ往生極樂の教行は濁世末代の目足なり。道俗貴賤誰か歸せざるものあらん。但し顯密の教法、その文一に非ず。事理の業因、その行惟多し。利智精進の人は未だ難しとなさず。予が如き頑魯のもの豈に敢てせんや」と云ひ「一々の光明、遍く十方を照して、念佛の衆生を攝取して捨てたまはず。我も亦かの攝取の中に在れども、煩惱眼を障へて見ることも能はずと雖も、大悲愍きことなくして常に我身を照したまふ」とある。

(五)『撰擇本願念佛集』中にある要目を擧げると(第一)(第二)は本文中にある通りで、(第三)は念佛を以て往生の本願とする事、(第四)三輩念佛往生の事、(第五)念佛の利益、(第六)末法に餘行皆滅して特り念佛を留むる事、(第七)彌陀の光明は唯念佛者を攝取する事、(第八)三心具足の必要、(第九)四修法の行用、(第十)彌陀佛の來迎には、唯念佛の行を讚嘆する事、

(第十一) 雜善に約對して念佛讚嘆の事、(第十二) 釋迦は定散の諸行を附屬せずして、唯々念佛を阿難に附屬した事、(第十三) 念佛多善根の事、(第十四) 六方恒沙の諸佛、諸行を證誠せずして獨り念佛を證誠せる事、(第十五) 諸佛が念佛行者を護念する事、(第十六) 釋迦が彌陀の名號を以て懇ろに舍利弗らに付屬せる事などである。

(六) 日蓮は「日本一國悉く法然の弟子となり終んぬ」と云うた。

(七) 法然の手紙に「至誠心と云ふは眞實心なり。その眞實と云ふは、身に振舞ひ口に言ひ心に思はんこと皆誠の心を具すべき也。即ち内は空しくして外を飾る心なきを言ふ也。此心は浮世をそむきて誠の道に赴くと覺しき人々の中に、よくく川意すべき心ばへにて候也」と云々と述べた。

(八) 安樂房は師秀の子、もと高階泰經の侍であつたが、出家して蓮西と號した。住蓮房は興福寺の僧實運の子である。

(九) 『明月記』参照。

(一〇) 七箇條の總證文中には「未だ是非を辨ぜざるの痴人にして聖教を離れ、師説を非として恣に私儀を述べ、妄に評論を企て、智者に咲はれ、愚人を迷亂することを停止すべき事」、念佛門に戒行なしと號して専ら婬酒食肉を勤め、適ま律儀を守るものを難行人と名け、彌陀の本願に懇るものは造惡を恐るゝ勿れと説くを停止すべき事」などが列擧して居る。

(一一) 興福寺の奏狀中に「我朝は本と是れ神國なり。百王、彼の苗裔を承け、四海其加護を仰ぐ。而るに専修の權永く神明を別へず。權化實類を論せず。宗廟祖社を恐はす。云々」とある。

(一二) 日蓮の『念佛無間地獄抄』及び『皇帝紀抄』参照。

(一三) 『一杵起請文』には「もろこし我が朝の智者達の沙汰し申さるゝ觀念の念にも非ず。又學問をして念の心を悟りて申す念佛にも非ず。唯往生極樂のためには南無阿彌陀佛と申して疑なく往生する心と思とりて申外には、別の子細候はず。但三心四修と申事の候は、皆決定して南無阿彌陀佛にて往生するぞと思ふ内に籠り候也。此外に奥深き事を存せば、二尊のあはれみにはづれ、本願にもれ候べし。念佛を信ぜん人は、たとひ一代の法を能々學すとも、一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無智のともがらに同して、智者のふるまひをせずして、只一向に念佛すべし」と記してある。

(一四) 『没後遺誠文』、『漢語燈錄』、『勅修御傳翼讀』等所載) 参照。

(一五) 當時、法然の教旨に對して、非難を加へたものの中には、彼れの學識修邁なことを知つて「あのやうな淺薄極まることを云つて居るのは、無智の徒を教化するための方便であらう」と云つた。で其無學の信者中には、熊谷直實や津戸三郎らの武人も居た。法然はそれに就て「熊谷入道、津戸の三郎は無智の者なればこそ、但だ念佛を勤めたれ、有智の人には必ずしも念佛には限るべからずと申すよし聞えて候らん。極めたるひが事にて候。其故は念佛の行は、元より有智無智に限らず、彌陀のむかし誓ひ給ひし本願も、普く一切衆の爲めなり。無智の爲には念佛を願じ、有智の爲には餘の深き行を願じ給ふ事なし」と述べた。

第四節 禪宗の輸入

達磨宗停止の令

建久五年七月のことである。京都に於て、朝廷から「達磨宗停止」の趣を宣下された。延暦寺の僧徒は、それを見て、「望み通り、達磨宗を排斥することが出来た」と云つて喜んだ。新宗教は常に舊宗教を保持してゆかうとするもの、ために迫害される。それは淨土宗も同じことで、其創唱者は必ず苦難を一身に受けなければならなかつた。達磨宗と云はれた禪宗も、最初はひどく其宣傳を妨害されたのである。

禪宗が日本へ招來された最初

禪宗が支那から日本へ輸入されたのは、鎌倉時代に始まつたことではなかつた。禪宗を支那から日本へ始めて招來したのは、白雉四年、遣唐使吉士長丹らの一行に従つて渡唐した道昭である。道昭は玄奘三藏、慧滿禪師らについて禪を學び、齊明天皇の六年に歸朝して、法相宗を人々に説く傍ら禪宗をも傳へたが、勿論、時機熟しなため、左程にひろがらなかつた。けれども從學したものは相當にあつたのだ。

北宋禪を傳へた道瑠律師

其後、聖武天皇の天平八年に唐の道瑠律師が日本へ來て、始めて北宋禪を傳へた。彼れは北宋禪の祖神秀に就て學んだ普寂の弟子であつた。當時、彼れは勅によつて大安寺の西唐院に住んで、『律藏行事鈔』を講じた。時に大安寺の老僧行表が、道瑠を敬慕して從學したので、特に心をこめて禪要を行表に授けた。行表は更に其弟子傳教(最澄)にそれを傳へた。で傳教の天台宗は、支那天台へ密戒を加へ且つ禪をも取り入れ

禪定の方式

た。そして彼れは叡山禪の始めを開いたのである。また弘法(空海)も支那へ渡つた時、北宋禪を學んだと傳へられて居るが、これは正確でない。けれども弘法は特に禪定を重んじた。勿論、禪定は佛教各宗の修行に缺くべからざるものとされて居て、華嚴の法界觀、眞言の阿字觀など、色々の方式がある。禪定を平たく云へば、靜慮のこと、釋尊の成道も亦一つはこれによつたのである。

慈覺と禪宗

傳教の次に禪宗をわが國へ招來したのは其弟子慈覺(圓仁)で、渡唐中、蕭慶中から、禪を學び日本へ歸つてから、禪院を建てようとしたが果さなかつた。其後義空が唐から來朝して禪宗を説いたが、さしたる反響もなく終つた。爾後、久しく禪宗のことを傳へようとするものがなくて中斷の形となつた。

覺阿の渡宋

ところが、後に覺阿、能忍、覺晏らの人々が禪風を鼓吹するに及んで、稍々勃興の機運に向ひ始めた。覺阿は天台宗の僧であつたが、支那(宋)に於て禪宗流行の風あるを聞き、其様子を知らうと思ひ立つて、法弟金慶と共に承安元年に渡宋した。そして靈隱寺の佛海禪師に就いて禪要を學び、其奥底に徹見した。彼れは金陵に遊んで、長

覺阿禪機を悟る

蕭の江岸で鼓聲を聞いた時に、豁然として禪機に悟入したのである。此際、彼れは五偈を以て感想を述べ、佛海の即可を得て歸朝した。そして彼れが叡山に居ると、高倉天

皇が覺阿の事を聞かれて宮中に召出し、禪宗について其説を求められると覺阿は唯々沈黙して、一管の笛を吹奏しただけであつた。そこに不言不語中に禪機があることを、彼れは暗示したのであらうけれども、廷臣らは其意味を解しなかつた。

覺阿の後に出了たのは能忍である。彼れは獨力禪要を極めて、攝津に三寶寺を建て、頻りに禪風を鼓吹して達磨宗開祖と自稱した。ところが保守的な僧侶中には、能忍には師承がないことを非難したので、能忍は發奮して、文治五年、其徒勝辨、練中の二人を渡宋させ、拙庵禪師に書幣を贈つて、能忍の所悟を示し印可を求めた。拙庵はそれを見て嘆賞した上、法衣、道號、達磨像贊などを勝辨らに託した。そして二僧がそれらを携へて歸朝すると、能忍の名聲が頓に高くなつた。そして拙庵から寄贈した『瀟山の警策』と云ふ一書を出版した。それに其派に屬するところの覺晏が大和方面で大に禪風を傳へたので、大分世間の注目を惹くやうになつた、かうした形勢になつたところへ、榮西が再度の渡宋から歸つて、禪宗宣傳の上に一期を劃するに至つた。

榮西は備中吉備津の人で、俗姓を智陽氏と云つた。永治元年四月二十日の出生である。彼れは十一歳の時、安養寺の靜心じやうしんについて學び、十四歳になると叡山に上つた。彼れは背が低くて、小柄な體質であつたから、一時同輩の嘲笑を受けたが、霸氣、才

達磨宗開祖
と自稱した
能忍

榮西の發憤
と研學

氣ある彼れはそれらのとに刺戟されて、一段の發奮を牛じた。後、靜心が歿したので一時郷里に歸り、十九歳の時、叡山へ來て、右辨から台教を學んだ。それから、山を下りて伯耆の大山たかやまに赴き、基好から密教を學んだ。そして彼れが叡山に歸つてくると、大藏經を研究して、學力、識見の上に著しい進歩をしたと同時に、傳教の遺志を繼承しようとする大願を立てた。それが動機で、渡宋することになり、仁安三年四月、西海から身を商船に託して明州の海岸に着いた。

彼れは天台山上つて、靈蹟を巡拜した上、半年ばかり滞留して、台宗の書籍などを多く求め、四年九月重源と共に歸朝した。ところが、其後彼れの向上心は、再度の入宋を思ひ立たさせた。そして其序に印度にも赴いて、佛蹟を巡拜しようとする志望を抱いた。で、彼れは肥前今津の誓願寺に赴いて、そこに逗留しつゝ、入宋の便船を待つたが便船が極めて少い時分のことであり、且つ種々の事情(五)があつたものと見えて思ひ立つてから十四年目の文治三年春にやつと入宋の途に就いた。それは榮西が四十八歳の時である。

支那に着くと、榮西は直ぐ印度へ渡らうとしたが、旅券が手に入らないため、それを實行することが出来ず、ひどく失望した。で支那に留つて、當時最も流行して居た

榮西再度の
渡宋

虛庵に禪を
學ぶ

九州方面に
初めて禪風
を宣揚す

京都方面に
於ける布教
上の困難

禪宗を研究することにした。それが爲め、彼れは天台山萬年寺に登り、虛庵について禪宗を學び、そこで數年を経過した。かうして業成つて、榮西が歸朝したのは建久二年七月のことである。

當時、榮西が始めて禪風を宣揚した地は九州方面であつた。それは民部大輔清貫よつゝに請ぜられて、肥前に禪院を立て、八月八日、始めて開宗したのである。彼れの招來した禪風は續々共鳴者を生じた。爾後建久四年までに數箇所に寺院を建てるやうになつて、目ざましく、九州を靡かせた。蓋し九州に於ける宣傳が成功した所以は、新宗風に對する壓迫や排斥が餘程少かつたにもよるであらう。で榮西は、今一步進んで、日本に於ける學藝の中心とも云ふべき京都に入つて、其新宗風を弘めようと決心した。彼れはかうして建久五年に入洛した。

京都では、九州のやうな具合に容易く禪風を宣揚するわけにゆかなかつた。既に達磨宗元祖を以て任じた能忍が、可也に舊宗派の反對を受けて居た。それに京都は尙ほ舊宗派の勢力が強くて、すべての新宗派は絶えざる壓迫を受けたのみならず、禪宗の存在は殆ど認められて居なかつた上に、榮西とても禪ばかり説いたのではなく、台密をも合せて説いたのである。唯々彼れの第二回入宋に於て主として禪を研究したところから、特に禪に力を入れたのである。けれども彼れの言説に對して耳を傾けようとするものが殆どなかつた。それに九州方面では、天台宗に屬して居た宮崎の良辨と云ふものが榮西の成功を嫉んで、朝廷へ榮西のことを讒した折柄、延曆寺興福寺らの一派が例によつて、禪宗を異端視して朝廷へ強訴したので、こゝに建久五年七月、達磨宗禁制となつて、能忍と共に榮西の前途には多大の障礙が横はるに至つたのである。それに榮西は翌年、朝廷からの命令によつて、九條兼實から喚問を受け、左大辨宗頼を通じて、禪宗の内容について辯明した。其時、彼れは「禪宗は我國に於て新しく唱へられたわけではない。傳教が既に『内證佛法相承血脈』に於て禪を説いて居る。良辨の徒はそれを知らぬのだ。若し禪宗が悪ければ、それを説いた傳教も悪いであらう。傳教が悪ければ、良辨らの奉ずる天台宗も悪いわけである。何となれば、天台宗は傳教が創唱したからだ」と云ふ意味のことを述べた。けれども舊宗派はそれを聞いて一層榮西に反對したのである。

榮西の著書
に於て戒め
た僧侶の不
品行

榮西の辨解

榮西は、それらの反對に向つて、自己の立場を明かにするため、『出家大綱』及び『興禪護國論』などを書いた。『出家大綱』では出家の守るべき本分を説いて、それとなく天台宗徒の破戒的行爲を説破した。そして榮西は佛徒が固く齋戒持律すべきことを力

菩薩戒につ
いての見解

説したのである。で彼れは菩薩戒のことに言及し、「其心は戒に従つて、専ら大悲般若の情を發し、衆生に於て憎愛の差別がない。佛法に於て、偏圓分別を離れ行すべきは速かに行ずる、學すべきは速かに學する。決して是非を競諍しない。唯、歩を菩薩境地に進めて、人天の福田と爲すべきである。是れが菩薩戒だ」と云つた。畢竟、破戒的な當時の僧侶を一般に戒めたのである。

『興禪護國
論』は偽作
であるとの
説

『興禪護國論』は、禪を以て國家鎮護に當る所以、及び榮西の唱ふる新宗旨が戒から始めて禪に究竟するところの要旨を明かにしたものである。一説に此書は偽作だとされて居るが、其論斷の根據が薄弱である。また假りに偽作だとしても、榮西の眞意のあるところは『興禪護國論』一篇に結收されて居る。然し大體に於て、偽作とすべき論據が乏しい以上は、これを榮西の作として差支へあるまい。殊に彼れの歿後六十九年目に出た一書(八)には、榮西の著作であることを裏書したものとさへある。

禪宗の大要
を説く

榮西は、本書に於て先づ戒を以て先となすべき所以を論じ、次に仁王經などを引用して「佛、般若を以て現在未來世の諸々の小國王に付囑し、以て護國の寶とした。其般若とは禪宗の事である」と説いた。そして特に禪宗の大體に言及して「禪宗は不立文字、教外別傳を表示し、教文に滯らず、只心印を傳へ、文字を離れ、言語を(九)し、

禪宗の秘要
を闡明す

直ぐに心源を指し以て人々を成佛せしむるものである」と解釋した。かうして順序を追うて禪宗の教旨に入り約教分、約禪分、約總相の三分を立し、鈍根の人は諸宗の教示を知つて、禪の歸着するところを知了すべきことを勧め、利根ある人は文字や心思に囚はれないで、凡聖の路を離れて參禪すべきことを説き、「教、禪、參、學、菩提、涅槃と云ふが如きはすべて一種の假名で、實際は所有が無い。佛の所説とてもすべて名字である、實に所説が無い。故に禪は文字の相を離れ、心縁の相を離れた不可思議、不可能の教へである」と述べ、龍樹菩薩の意を説いて「有も亦無、無も無、有無も亦無、非有非無も亦無、如是言説も亦無、戲無く、文字も無い。若しよくかゝ觀ずると、佛を知るとが出来る。そこに禪宗の妙旨がある」と結んだ。榮西が禪宗宣傳に如何に銳意したかが分る、且つ彼れは本書の最後に『未來記』を付して、「未來を追思するに、禪宗は空しく墜ちない。私が世を去るの後五十年、此宗旨が大に興るであらう」と説いた。勿論此『未來記』は、安永版の『興禪護國論』に載つて居るので、或は後人が恣まに附加したものであるかも知れない。

榮西の豫言

榮西が禪風を多少自由に發揚することが出来るやうになつたのは、正治元年、五十九歳で、鎌倉に入つてからである。彼れと鎌倉との因縁は決して淺くなかつた。建久

榮西が鎌倉に於ける成功

鎌倉幕府の宗教政策榮

榮西に歸依した政子と頼家

鎌倉時代後篇

六年六月、彼れが筑前博多に聖福寺を建てるとして、書を源頼朝に呈し、土地の寄附を得たことがあつた。で、彼れは舊文化に囚はれ、舊宗教に拘束され易い京都よりも、新文化を創始し、新宗教に渴仰する鎌倉に入つた方が、より多く宣傳上の成功を収めることが出来ようと思つて、こゝに壓迫の多い京都を離れて鎌倉に來たのであつた。果然其成績は最初から宜かつた。

當時の鎌倉は、正に不安、動搖の空氣が濃厚に漲つて居て、兄弟、同胞、親族らが權勢、利慾のために相陥擠し合ふやうな悲劇の連續を見たのであるから、心あるものは、沁々と人生の無常を感じ、或は宗教的意識の發生を體驗しないものがなかつたであらう。それに鎌倉では京都のやうに舊宗教の勢力が根を張つて居ない上に、文化的に京都に對抗してゆく上から幕府が自然新宗教を求めて居たので、京都よりは自由な空氣が瀰蔓して居た。さうした場合に關西で名僧として聞えた榮西が鎌倉に入ると、物の響きに應ずるやうに歸依者が出來たのである。

其第一の歸依者は、政子と將軍頼家とであつた、榮西は父頼朝の一週忌に頼家から招請されて導師となり、追福供養を行つた。また榮西は政子の發願によつて、鎌倉五山の第三位に列した壽福寺を龜谷に建つるに及び、其開祖となつた。其後、政子が壽

榮西の方便

建仁寺の創立

福寺に參詣した折、榮西は懇切に其教説を傳へた。かつたことから、榮西の名が關東に高くなつて其門下になつた榮朝が其頃、彼れに教へを請うたのである。

こゝに注意しなければならぬ事は、榮西が鎌倉で禪宗を主として説いたのではないことである。單に禪宗のみを説いても、またそれを主にして述べても、當時文化の素養が薄い鎌倉には、さうしたことを容易く諒解する知識階級が殆ど居なかつたのである。で彼れは眞言、天台などと合せて、其一部として禪を説き且つ祈禱、修法の依頼にも應じた。それは彼れが時勢上、迫害を避け、且つ次第に禪風を鼓吹してゆかうとした方便上、止むを得なかつたことであらう。

榮西が眞に其新宗風を護持し、弘布してゆく土臺を得たのは、建仁二年、頼家の發願によつて、京都鴨川の邊に建仁寺を建てるとなつてからである。それは約三年間の日子を費して、元文元年三月に完成したのである。建仁寺は後に出來た建長寺や圓覺寺とちがつて純粹の禪院ではなかつた。そこは台密禪三宗の道場となつて居た。そして延暦寺の末寺として存在したわけである。然し後には、官寺となり、臨濟宗派の本山となつて、純然たる禪院となつた。

榮西は建仁寺造營中も、度々鎌倉に下つて、教化に力めた。三代將軍實朝も亦彼れ

榮西の晩年

榮西の門下

能忍と榮西の功績

に歸依して、營中に請待したり、壽福寺で教へを聞いたりした。榮西の弟子行勇と實朝との法縁も、畢竟、榮西との關係によつて一層深くなつた趣があつた。かうして榮西の晩年は大體順潮に弘法を進めることが出来た。そして建永元年には勅命によつて、東大寺の幹事職となり、其造營のことを監督、成就した功によつて、紫衣を賜り、また權僧正となつた。爾後益々彼れの新宗風を發揚して、建保三年六月五日、建仁寺で示寂した。壽七十五歳である。其門下には、行勇、榮朝の二大高弟があつた。榮朝は上野長樂寺の開祖となり、行勇は壽福寺二世を襲ぎ、後また建仁寺に遷つて、師の法統を繼承した。此二人の教へを受けて出た名僧には、聖一、法燈の二國師がある。

要するに、榮西は能忍と共に、禪宗を弘布する先驅者となつた人である。彼等によつて、禪宗の種が、長く生ひ立つてゆくやうに、宗教界に蒔かれた。そして隱約の間に禪風が一部の人々に知られ、味解されるべき端緒が作られた。此意味に於て調和的ではあるが稍々微温であり、且つ俗權を求むる傾きが稍々見えたにもせよ、著述に講演に最もよくつくした榮西は、わが國禪宗の始祖と云ふことが出来よう。また彼れは禪味の淡々たる一面を象徴すべき喫茶の趣味を始めて、日本に傳へてそれを鼓吹した。此事はいづれ別に後に至つて説くであらう。禪宗勃興の事も亦北條時頼の時代に入つ

て、述べることにする。

(一)『扶桑略記』、『續日本記』参照。

(二)『朝野群載』第十七卷所載「弘法大師請乞入定處於高野峯」表参照。

(三)禪定の「禪」は梵語で、具さには「禪那」と云ふ。「定」は漢語、梵語ではそれを「三昧」と云ふのである。禪那三昧を梵漢兼稱して「禪定」と云ふ。禪那は思惟修或は靜慮と云ふ意味に譯する。

(四)覺阿の五偈は次のやうである。

航海來探教外傳。要離知見脫蹄筌。諸方參遍草鞋破。水在澄潭一月在天。

掃盡葛藤與知見。信手北來全體現。腦後圓光徹大虛。千機萬機一時轉。

妙處如何說向人。倒地便起自分明。騰地踏著故田地。倒裏幪頭孤路行。

求眞滅妄元非妙。卽妄明眞都是錯。堪笑靈山古老錘。當四拋下破木杓。

聖拳下喝少賣弄。說說是說非入泥水。截斷千差休指注。一聲歸笛囉囉哩。

(五)『元亨釋書』には榮西が平賴盛と親しく交り、賴盛の諫止によつて、久しく渡宋を見合はせたとして居る。

(六)般若(Prajna)は梵語で、慧、智慧、明、明度、遠離、清淨などと譯する。

(七)元祿時代に居た僧聖美諱の『禪籍志』には、余曾て『護國論』を讀むに文章太だ拙にして趣深からず。蓋し後人の偽作名を國師に誣ふる也とある。

(八)『沙石集』には「我が(榮西)滅後五十年に禪法興すべき由記しんき給へり。興禪護國論

と云ふ文作り給へり」とある。

(九)『興禪護國論』中の「大綱勸參門」参照。

(一〇)『筑前續風土記』参照。

(一一)『沙石集』に「國の風俗に背かすして、教門をひかへて戒律、天台、眞言などあひ兼ねて、一向の唐様を行ぜられず、時を待つ故にや」とある。

(一二)『千光祖師塔銘』、『沙石集』、『元享釋書』参照。

(一三)『喫茶養生記』参照。

第五節 律宗、華嚴宗の再興

佛教界に於ける律宗の趨勢

榮西が、禪宗の種を蒔いて歿する年から少し前に、天台律を再興した俊昉が宋から歸朝した。それは、建暦元年のことである。最初、律宗が日本へ招來されたのは孝謙天皇の天平勝寶六年に唐僧鑑眞が來朝して、東大寺に律壇を築き、傳戒を修した際にある。彼れは天平寶字三年に唐招提寺を築いて、戒律の要旨を講じた。其後、律宗は久しく不振の状態に陥つて居たが、實範が後嵯峨院の時代に出て、始めてそれを中興し、中川寺で律講を開いた。實範の後には貞慶(解脱上人)が出た。貞慶は四分律復興の根原を作つて、梅尾の明慧と並稱された高僧であつた。そして弟子戒如の門下覺盛

俊昉の天台律再興

叡尊、有嚴、圓晴の四人が、律宗のために盡して、東大寺の大佛の前で五戒十戒を白誓自受した。其中殊に唐招提寺の覺盛、西大寺の叡尊(興正菩薩)らが世に知られて居た。叡尊の門には、後に關東方面で弘通に力めた良觀を出した。

さうした時代に俊昉は天台律を再興したのである。彼れは字を不可棄と云つて、肥後飽田郡の出身である。夙に佛典に親み、十四歳の時、顯密二教を學んで、十八歳になつて落髮した。そして彼れは京都、奈良に遊學して、修養を積み、正治元年入宋して四分律、密禪などを學んだのである。彼れが宋に居た時分は、其學德の上に於て、僧俗から尊敬を受けた。そして在宋十二年の後、彼れが歸朝する日には、各種の典籍を多く持ち歸つた。それは律宗經書三百二十七卷、天台章疏七百餘卷、華嚴章疏百七十五卷、儒書二百五十六卷、雜書四百六十三卷、合して二千一百餘卷に上つた。他に佛舍利三粒、圖畫、碑帖、器物などを數多携へて來たのである。

彼れは嘉祿元年十月、大和守中原信房の盡力で、泉涌寺の開山となつて、尼將軍政子の崇敬を受けた。かうして彼れは天台律を再興したのである。それを覺盛、叡尊らの南京律に對して北京律と稱した。蓋し興律の地が異るところから、さうした特稱を生じたのである、そして俊昉の系統を受けた淨業(曇照律師)は、山城の人で最初三井

俊昉が持ち歸つた多数の典籍

泉涌寺の開山

二席渡宋した浄業

律宗の再興された所以

鎌倉時代後篇

一〇〇

に學び、後奈良の諸大寺を歴遊して素養を積んだ。彼れは順徳天皇の建保二年に宋に渡り、十四年間の研修を重ねてから、安貞二年歸朝して、京に戒光寺を建てた。當時戒律を學ぶものは争つて彼れの門に集つたが、天福二年彼れは尙ほ學徳向上を欲する一念から再び渡宋した。そして仁治二年に歸朝すると、京に東林寺を、九州に西林寺を建て、律宗振興に力めた。

律宗が鎌倉時代に入つて再興されたのは、當時舊宗教に固着して居た僧侶がひどく墮落して、戒律を破つたのみならず、法然の門下からも、淨土宗の眞意義を誤解した破戒僧が往々出た反動の勢に乗じた爲である。律宗は其教相判釋の上に於て、化教、制教の二に分ち、化教では經論の精神的方面、制教では律藏の儀式的な點を攝取し、更に前者を唯我、相空、性空の三つに、後者を圓教、實法、假名などに分ち、佛の小乘戒も圓教を透ほして見ると、大乘の戒律となると見るのである。要するに其主眼とするところは戒律で、五戒、八戒、六法、十戒、二百五十戒を人々に守持させようとするのである、大體に於て、小乘的であり、形式的である。そしてともすれば凡人がそのために佛教の末梢に墮し易い傾向がある。けれども破戒の僧侶が世と人とをひどく毒した流風が極度に達した時代には、反動的に一時勢ひを増して、こゝに律宗の

華嚴宗の再興

明惠の華嚴宗研究

明惠の隱遁と冥想生活

再興を見たのである。矢張り新機運が其背景となつて居るのである。

律宗と共に華嚴宗も亦明惠上人らによつて再興された。華嚴宗は聖武天皇の時代に始めて日本に傳つた幽妙な宗旨である。我國で其開祖となつたのは、良辨である、彼れは聖武天皇から金鍾寺を賜つて、そこへ其の師審祥を請じて『華嚴經』の講義を開いた。其後法脈が鎌倉時代に傳はつて明惠は華嚴宗第十七世の法脈を嗣いだのである。

明惠は紀伊有田郡の人で、早く其父母に別れた。そして彼れが九歳の時、京の高尾山に登つて其叔父上覺に養はれ、十六歳で出家した。後間もなく、彼れは東大寺で戒を受け、名を成辨と付けたが、後に高辨と改めた。明惠は少年時代から、華嚴、法相、俱舍宗などを學び、殊に華嚴宗に共鳴して、建久四年、二十一歳の頃、東大寺に赴いて一兩年留まつて研究した。ところが、當時、東大寺の僧侶が多く黨弊に囚はれて墮落して居たのを見て、深くそれを嘆き、高尾山に歸つた。

其後、建久六年になつて、彼れは靜かな幽棲に籠つて、華嚴宗の教旨を徹底的に研究すると同時に、固く戒律を守つて、高潔な生を送りたいとの考へから、郷里紀州湯淺の白上峯に籠ることになつた。そこに數年間、冥想の日を送つてから再び京へ出たが爾後白上峯と高雄山との間を時々往復して居た。そして彼れは、高雄では後進のた

釋尊に對する信仰

めに、文覺上人の勸めによつて華嚴經を講述した。彼れは始終、釋尊を敬慕して、印度の文化や風物を慕つたところから、一度印度へ赴かうとして、それがため、特に『印度行程記』^(五)まで作つたのであるが、大病に罹つた爲め、終に渡航の事を斷念しなければならなかつた。けれども彼れは一方に於て、次第に學徳を以て世の崇敬を受け、建永の頃、院宣によつて華嚴宗復興のため、樽尾の地を朝廷から賜り、そこに高山寺を建てた。一體、明恵は、若い時から、隱遁生活を喜ぶ風があつたので、高山寺に住むやうになつてからも、西の峯の閑寂を愛して、三間一面の草庵を作り、そこで沈思し、冥想した。畢竟彼れは身心清淨で、俗世の執着一切を脱離して、無慾無私の生活を送つた人である。かうした風は、ひとり、彼れのみならず、律宗を再興した貞慶にもあつた。貞慶は僧侶の墮落を疾んで、笠置山中に退隱して後、また世に出なかつた人である。かうした隱遁生活は、ともすると、消極的獨善的になる傾向を有したけれども、明恵にはさうした弊が殆どなかつた。彼れは寛喜四年正月、六十歳で示寂した。其著書は七十餘卷に上つた。其中で法然の『選擇集』を破した『摧邪論』及び其の補遺『莊嚴記』は當時の宗教界に波瀾を生じた著書である。また自選の『遺心和歌集』などがある。

無私無慾の人

南都第一學匠

名僧輩出

明恵の後に出了た凝然は、南都第一の學匠と稱せられた。彼れは伊豫の出身で、戒壇院に居た。其著書一千卷に上つた中で『華嚴五教賢聖鈔』(六十卷)、『五教章通路記』(五十二卷)が殊に有名である。其他『三國佛法傳通緣起』、『淨土法門源流章』などがあつた。彼れの門下から、禪爾、盛譽、湛容などの俊才が出た。

其他法相宗、三論宗などにも名僧が出た。要するに、これを淨土宗、淨土眞宗、禪宗、日蓮宗などに比すると、素より劃期的な運動が見られないけれども、個人として學徳が優れて、いづれも戒律を嚴守し心身の清淨、純潔を保つて人々が少くなかつた。たとひ、其中には、隱逸の風がある人もないではなかつたにもせよ、其隱逸と云ふことさへが、鎌倉初期乃至平安末期の濁つて行詰つて居た佛教界には、一滴の眞清水であつたのだ。かうして律宗華嚴宗などの方面に於ても、新しい時代が正に眼の前に展開されようとしたことを暗示したのである。

(一)『四分律』六十一卷は律宗の所依で、曇無徳の誦出したものである。それを解釋した書には支那の激照大師の鈔疏がある。

(二)『沙石集』參照。

(三)『元亨釋書』參照。

(四)五戒は不殺生、不偷盜、不邪淫、不妄語、不飲酒など、六法は殺畜生、盜三錢、摩觸、

小妾語、飲酒、非時食などである。

(五)明惠は「印度は佛生國也、依戀慕之思難抑……」と記して居る。

(六)文學博士辻善之助氏の『明惠上人』中に、「上人が常に人に對していつたことに、佛になりても何かせん、道を成して何かせん、一切求め心を捨はてし、徒ら者(身心を道の中に入れて、雜念を起さず、坐相を亂らす)に成りかへりて、死も角も、私にあてがふ事なくして、飢來れば食し、寒來れば被るばかりにて、一生はて給はば大地をば打はつすとも、道をうちはつす事は有まじきとある」と述べてある。

第三章 政治史上に於ける最も險惡な時代相

第一節 困難な地位に起つた實朝

義時の勢力
強し

義時が時政に代つて執權となつて以來、彼れの權勢は日を追つて増加した。承元々々年正月、彼れは相模守となつて從五位上に叙せられたが、それにつれて弟の時房が武藏守となつた。爾來、武藏、相模の兩國は、北條家出身の人物で執權の職に居るものが、それに任ぜられる慣例となつた。

攝政九條良
經暗殺の噂

義時が相模守に任ぜられた前年(元久三年)三月七日、京都では攝政九條良經が突如として三十八歳の壯齡で死んだ。それについて暗殺されたと云ふ噂が高かつた。其暗殺された原因としては、良經が文藝、筆札に長けて居たことが挙げられて居るのは頗る奇である。彼れは當時の鴻儒清原頼業から、幼少の時に經史を學び、政治的方面よりも、より多く文學的方面に長けて居た。歌人として、文人として、書家として非凡の才能が良經にあつた。

それで彼れを暗殺した首謀者は、歌人として自己を凌がうとするのを妬んだ藤原定

暗殺の首謀者
を以て擬せられた人

圓滿な良經の人物

死因は遺傳性の腦疾患

兼實歿す

家だと云ふものがあれば、『新古今集』の序者たるべき望みを達しなかつた菅原爲長だとするものもある。或は良經が幕府に親近して、而も才能拔群であることを忌んだ頼實、兼子夫婦がしたこと、後鳥羽上皇がそれに與られた形跡があると奇抜な想像をするものもあつた。要するに、どれもこれも、其推想が餘りに正鵠を失つて居る。いづれも暗殺の原因としては、餘りに薄弱であるのみならず、第一にさう推想するさへ小説的に過ぎる。殊に良經は極温厚な性質で、政務に練達して居たが、政治上では、別段自己の野心を有つて居た形跡がない。また幕府の勢力と結び付いて、仕事をしようとした點も見當らない。結局、彼れは何人にも憎悪されるべき缺陷を其性格中に持つて居なかつた。して見ると、暗殺されるべき事情も亦殆どないのである。

唯、彼れが寢床の中で、冷めたく呼吸を引取つて横はつて居たので、暗殺の風聞を生じたのではないかと思はれる。一説に遺傳性の腦疾患のために急死したのではあるまいかと想像を下した史家があるが、中らなくとも遠くはない推定だと信ぜられる。良經の兄良通も會て二十二歳で、矢張、同じやうな死方をしたのである。良經の歿後、其次席に居た左大臣藤原家實が攝政に任ぜられたが、間もなくそれを辭して、建永元年十二月關白に任ぜられた。良經の父兼實が悲痛に沈む中に五十九歳で歿したのは其

順德天皇の即位

殺氣充滿せる鎌倉に於ける黨争

兵亂起らんとする徵候

翌建永二年四月のことである。

其後、京都には暫く事がなかつたが、承元四年十一月、土御門天皇が十六歳で皇太子に位を譲られた。かうして順德天皇の治世となつたのであるが、それは後鳥羽上皇の思召によるのである。そして良經が生前望んだ其女立子入内のことは、其前年三月に決せられた。そして後、立子は女御となつて、東一條院と稱した。こゝに注意すべきは、土御門の讓位について、朝廷から幕府へは少しも諮詢されなかつたことである。

京都の様子は、大體平穩であつたが、鎌倉は依然として殺氣立つて居た。義時、政子を中心とした北條一派と、三浦の一派を形造つて居た和田義盛、三浦義村らを中心とする武權派とが、陰に睨み合つて居た。また義時、政子らのために、政治上殆ど實權を有するものが出来なかつた實朝及び其一派のものが、何となく、不平、不穩の空氣を漂はして居た。それらの他に前將軍頼家の悲しい最期や其遺兒らに同情して居た一派のものや、地方豪族中、鎌倉の形勢に嫌らないものが矢張り殺氣立つて居た。かうして鎌倉には、いつか爆發すべき兵亂の徵候が隠々として動いて居た。結局、誰れかが、實權を握つて表裏共に政治的統一を實現しない限りは、どうしても、形勢の暗轉

實朝に對す
壓迫

と動搖とを避けるわけにゆかなかつた。

さうした形勢の間に置かれた若い實朝の地位は可也に困難であつた。聰明な彼れには兄頼家の悲劇のうちに潜む暗い運命がわからないことはなかつたと思はれる。若し



源實朝木像

政治上に於て、彼れが頼家のやうに無謀なことをするとしたら、政子、義時は、彼れを第二の頼家たるべき運命により早く導くかも知れない境地にあるとは、彼れにも直覺されたであらうと思はれる。假りにさうでないとしても、政子、義時らの政治的干渉や實權把握は、いつも實朝に取つて重苦しい壓迫であつたらう。殊に義時の心中は恐らく、實朝に取つて一つの底知れぬ謎であつたかも知れなかつた。

實朝の性格

それに實朝の性質や趣味は、大體に於て其周圍と一致しなかつた。彼れの性質は感傷的で、神経質で、天才的で、詩人肌で、嚴に云へば政治家肌ではなかつた。そして世故に長けないで表裏反覆するやうなことは、彼れには出来なかつた。けれど、政治

境遇と運命
とが激成した
悲劇の人

上に於て頼家よりは遙かに立優つて居た。また彼れは京都文化の擁護者で、すべて京都の公卿の好む風尚を彼れも亦好んだ。武張つた事、殺伐な事などは彼れの氣に入らなかつた。大體、頼朝の方針は京都文化に對峙して鎌倉文化を創建すると同時に武家と公家趣味とを截然として別なものとすにあつた。ところが、實朝はさうした方針を殆ど打ちくづすやうな傾向を有つて居た。

彼れの生涯を晩期と中期との二期に分けると、彼れの性格と運命とが其境遇と相觸れて、次第に悲劇的な方へ導かれたとがわかる。彼れが穩和な、純真な、温い、涙脆い人から、次第に反抗的で自棄的で焦燥し易く、熱狂し易い方へと赴いた様子が晩期に至つて現はれた理由もわかる。彼れには最初から性格上、神経質で多感多病で悲劇的なところがあつたが、それに強い衝動を與へたのは、時代と境遇と運命とである。彼れのやうな時代、彼れのやうな境遇、彼れのやうな運命の大波の中に立つて、誰れか悲劇へ導かれないものがあらう。

政治家として
の實朝

實朝の本領は、政治家としてよりも、より多く歌人としての方面にあつた。けれども彼れの中期の時代は、相當に彼れが最上の力を政治上につくした跡が明かにある。勿論、どの點までが彼れの思慮から出て、どの點までが義時、政子らの思慮や補導か

ら出たのか判明しないけれども、大體に於て、彼れが政治上にも、其聰明と温情とを發揚したところが見えて居る。殊に彼れの直轄地に於ける農民に對する同情や、彼れが其方面に實施した社會政策や、また對朝廷策に於て勤王的精神を有したとなどは、恐らく、温情ある彼れの胸中に最初から存したものであつたらうと察せられる。

頼朝の遺策
踏襲

彼れの政治上の方針は概して眞面目に父頼朝の遺策を踏襲して、餘り破格的なことをしないやうにした。勿論、彼れの脈管には彼れの父母に似ない温い血が流れて居たから、世の苦勞を知らない割合に臣下及び民衆に對する同情が深かつた。然し神經質なところがあつたから、臣下でも彼れの潔癖に觸れて、其感情を激せしむるやうな場合は、時に峻嚴な態度を示すことがないではなかつた。

亡き父に對
する敬慕

彼れは父頼朝の人物を心から敬仰して居た。殊に其政治的巨人であることに對して深く傾倒して居た。彼れの心眼には、いつも彼れを愛した亡父の佛がはつきりと映つて居た。で彼れは度々、亡父の靈を祭つてある法華堂に參詣した。また君の恩、父の德に報ずるため、建曆二年、大倉郷に大慈寺を建立した。かうした風であるから、彼れは其家人から亡父の遺書を差出さしめたり、或は古老から、父の生前に於ける言行などを聞いて、施政上の參考に資した。そして元久元年令を發し、莊園の事務はす

先例尊重

べて亡父の時の例によることを一般將士に告げた。また何事についても、頼朝時代の先例を權威あるものとして尊重した。彼れが建永元年に亡父から將士が拜領した土地は聊かの罪を犯したやうな場合には改補しないこと、特に大罪を犯した時のほかは没收しないことに定めたのも、畢竟、其父の爲したことを尊重して、將士の心を安んぜしめるためであつた。

實朝の温情
發揮

彼れは「御家人」と稱した部下の將士に對して大體に於て、同情のある態度で臨んだ。建曆二年將士が、訴訟のため遙々、鎌倉へ出てくる不便や費川を除くため、幕府の直轄地へは、特に奉行を派遣して、其土地で裁判を開く一先例を始めた。また彼れは、出來得る限り、自分が訴訟を親裁することに力めて、「^(二)庭中」へ人民が來て直訴することをも許した上、成るべく敏活に公明に裁斷を與へる方針で進んだ。彼れは奉行らが訴訟事件を延滞させて置くと、奉行を督勵して一定の期限内にそれらを決裁して、人々に迷惑させぬやうにした。

訴訟上峻嚴
と公平を示
す

彼れの訴訟に對する裁決振りは、其一方が餘りに不合理なことをする場合、時として峻嚴な態度や公平を嚴守する風を示した。建保五年五月、彼れが幼少時代から歸依して居た壽福寺の行勇が、所領に關する訴へで、自分の親しい人のために再三實朝

に嘆願すると、彼れは斷乎としてそれを斥けた。其時、彼れは容を改めて行勇に向ひ「私は平生僧を尊んで居るが、政治上のことについて貴僧が容喙されるのは宜くない。それよりも自分の修行に熱中すべきである」と告げた。行勇はそれを怨んで、涙ながらに實朝の許を辭去して寺へ歸ると、門を閉ぢて出なかつた。後で實朝はそれを聞いて氣の毒に思ひ、翌日、壽福寺の禪室に行勇を訪うて慰めたので、行勇は却つて恐懼した。これは政治方面に於ける實朝に就ての美談である。

彼れは、幕府に於ける制度、法規が亂れるのを防ぐために、相當の配慮をした。で元久元年、關東諸國の守護の檢斷、地頭の所務などは、先例によつて嚴しく沙汰すべきことを命じた。建保三年には、京都守護の任に當つて居たもの、怠慢を責め、大番に一箇月缺勤したものは、其罰として改めて三箇月の勤務を命じた。要するに、こゝにも彼れが頼朝の遺制を嚴守しようとした心持が出て居た。それで彼れは時として、頼朝の行爲に見出されさうな峻嚴さを示す場合があつた。義盛と列んで、武權の中心人物とも云ふべき三浦義村に屬した代官が小笠原御牧の牧士と争鬪した時、~~義村を~~義村に歸して、其奉行を罷めさせたことがあつた。また義盛が其一族胤長が罪に落して捕へられた爲めに、頻りに實朝に救解を求めた際、實朝は義盛に同情し乍らも、政

實朝の言動
に現はれた
頼朝の遺風

治上の公正を保つてそれを許さなかつた。かうした點は實朝が政治的に優れたところであつた。

殊に彼れが幕府の直轄地に施した社會政策には多少見るべき點があつた。勿論、それへは、義時の考へがいくらか加はつて居たのではないかと推せらるゝ點があつた。其上に實朝の民衆に對する同情が加はつたものと見て差支へないかと思はれる。で、承元元年、彼れは武藏國に於ける荒蕪地を開墾することとし、次ぎに建保二年、季候不順で農作物減收を見たところから、關東分國のすべてに向つて、其年の秋から毎年一箇所づゝ、年貢の三分二を免除することを許した。それから建保三年には、令を發して、諸國關渡の地頭に對し、船賃に當てる所の料田を置いて旅行者の煩を省くことにした。それは、旅行上不便が多かつた當時にあつて、何人も必要を感じた點であつた。其他、建曆元年には、武藏、駿河、越後の土地臺帳を整頓したり、建保元年に南都十

實朝の社會
政策

實朝の宗教
政策

實朝の宗教政策は、大體、頼朝の遺風を繼承して、神佛を崇敬する態度を示した。伊勢神宮に對しては、殊に彼れの尊敬が深かつた。彼れは使を派して、神宮に駿馬を獻じたり、或は神宮の上納米を忘つた地頭を叱責して、直ぐにそれを上進せしめたこ

まがあつた。鶴岡八幡宮も彼れが信心を怠らなかつたところである。また榮西や行勇らの名僧を重んじて、其法談を聞いたことや度々寺へ参詣したことは既に述べた通りである。

彼れの對朝廷策は、其父の尊皇主義に一步を進めたものであつた。實朝の名は後鳥羽上皇から賜つたところのものである。既に早くから、さうした深い結縁があつた上に、彼れは上皇と同じく和歌を好み、且つ京都文化の憧憬者であつたから、朝廷を尊み、上皇を仰慕した。建保五年、上皇が病に臥された時は、鎌倉から特に使を馳せて御惱平癒の大法を修したことがあつた。それに京都の守護に始終、心を川ひたことも、彼れが尊皇主義の人であつたことを示した。彼れの和歌には、さうした感情が流露して居る。

けれども彼れは頼朝の先例尊重から、幕府の立場を忘れて、一も二もなく尊皇主義に傾いたと云ふのではなかつた。彼れは、幕府に心を寄せて居た西園寺公經を擁護したり、備後國太田莊地頭三善善信を改補すべき朝命を受けて、頼朝の遺制を尊重することを理由としてそれを拒んだりしたことがあつた。それは僅かな例にすぎないけれども、彼れの尊皇主義が幕府の立場を閑却しなかつたことを示して居た。

實朝の對朝廷策

尊皇主義的傾向

幕府の立場を顧慮す

實朝の政治上に於ける缺點

以上、政治家としての實朝の美點をより多くを叙したわけであるが、勿論彼れには缺點もあつた。彼れには女謁の弊や私的感情に制せられて部下を偏愛する所から、時に濫賞に失したり、或は武藝を尊重しなかつたりした弊があつた。或は思ひやりの深いところから、自然、政治上の公正を忘れたやうな場合もあつた。建保元年、泉親衡が謀叛して、義盛の子義直、義重及び弟胤長がそれに關連して捕へられた時、義盛が頻りに釋放の事を哀訴したので深く彼れに同感して、義直、義重を許したことがあつた。殊に晩期の彼れは、運命と境遇とのために自棄的、反抗的となつて、常軌を逸するやうな場合が往々あつた。それは元來、政治家肌よりも詩人肌な彼れに取つては、止むを得ない缺點であつた。

(一)『尊卑分脈』参照。『月刈藻集』には「七日夜、真經殿の天井の上よりいかなる野心の者のせしにや、長き竹に刃をいらかみ突き殺し参らせたりとぞ、後人語りけり」とある。

(二)『續本朝通鑑』参照。

(三)『六代勝事記』及び『愚管抄』参照。

(四)『愚管抄』には「三月七日やうもなく寢死せられにけり。天下の驚き云ふばかりなし」とある。

(五)文學博士三浦周行氏の『鎌倉時代史』二四一頁参照。

(六) 庭中は將軍が親臨する法廷である。實朝の時代に始まった。

(七) 實朝の有名な歌に「山はさけ海はあせなん世なりとも君にふた心我あらめやも」といふのがある。

(八) 『吾妻鏡』に重忠の子で僧となつた重慶謀叛の由に就て、長沼宗政が出かけて重慶を討つて歸つた際、實朝は重慶を許す積りであつたので、宗政を責めると「當代者以_二歌鞠_一爲_レ樂、武藝似_レ廢。以_二女性_一爲_レ宗、勇士知_レ無_レ之。又沒收之地者、不_レ被_レ充_二勳功之族_一、多以賜_二青女等_一。所謂榛谷四郎重朝遺跡給_二五條局_一。以_二中山四郎重政跡_一、賜_二下總局_一」云々と切諫したことが記されてある。

第二節 歌人としての實朝

實朝が幼少時代からの生活と教養とは、自然彼れをして京都文化の崇拜者、憧憬者とならしめた。政治上のことを除くと、彼れは何でも京都の文物を熱愛した。或意味に於て、彼れは頼朝の遺制に背いてまでも、知らずく鎌倉の特色を没却して、一般の風尚を京都化せしめようと力めた場合があつた。彼れが深く和歌を嗜み、花鳥風月を愛し、文學的社交を愛し、白拍子を愛し、蹴鞠を愛し、饗宴を愛したのは、主としてそれがためであつた。

京都文化の
憧憬者

和歌の上に
於て定家の
指導を受く

京都に於け
る歌壇全盛

歌人として
偉大な上皇

和歌は實朝の生命であつた。政治方面で窮屈と不自由と壓迫とを感じた彼れも、和歌の世界では、歡喜と自由と感興とを恣にする事が出来て、打ちくつろいだ。彼れは、侍讀文章博士源仲章から、文學的教養を與へられた。仲章は諸子百家(二)の書に通じて居たから、實朝の知識、趣味を開發し、指導してゆくに相當力があつたことと思はれる。また和歌は夙に藤原定家の指導を受けて、進歩のあとが著しかつた。そして彼れは定家から贈つた『近代秀歌』詠歌口傳』などによつて和歌の道を研究した。後、彼れは定家が秘藏した『萬葉集』を読んで深くそれに傾倒して、彼れの個性にふさはしい歌を咏むやうになつた。彼れの歌才は定家が嘆賞したところである。

當時京都では、歌壇全盛の時代を現出して居た。それは院政が相當に勢よくて文運勃興の餘裕が出来た上に、後鳥羽上皇が殊に和歌を好ませられて、其保護、獎勵に當られた爲めである。上皇には一面政治的才能があり、他面詩人的性情があつた。其詩人的方面が發露して、文藝の愛好者となられたのである。殊に上皇は歌人として傑出して居られた。其歌には帝王の威嚴と氣格とがあつた。一例を挙げると「ほのくくと春こそ空にきにけらし、天の香具山霞たなびく」、「奥山のおどろが下もふみわけて、道ある世ぞと人に知らせん」などの秀吟を作られた。土御門、順徳、二皇も上皇の影響

有力な歌人の輩出

を受けられ、且つ天資の歌才を有せられたと見えて、和歌の上に非凡の趣を示された。また臣下の人々には、藤原良経が攝政の地位を占めると同時に歌壇の雄鎮として知られ、其叔父で天台座主である僧慈圓も優れた技倆を有つて居た。就中藤原家隆、同定家の二人は共に列んで歌壇に一大雙玉のやうに輝いた。其他男子には俊慧、秀能、寂蓮、長明などが名を馳せ、女流では式子内親王、宮内卿、俊成女、丹後、越前などが世に知られた。かうして多くの才人が一時に現はれたので、歌壇の盛観は、小説や漢詩文の不振を償つて餘りがあつた。そしてこゝに國文學史上に於ける「新古今時代」を作つたのである。それは平安朝に於て『古今和歌集』が撰せられた延喜時代にくらべて少しも遜色がなかつた。

新古今時代の現出

『新古今集』は其以前に出た『千載集』の傾向を善い意味に於て完成したものである。『金葉集』、『詞花集』などが粗雑になり過ぎた弊を矯めたのが『千載集』であるが、『新古今』は其後を受けて、用語の洗練や情景の融和を計つて、新生面を開いた。云ひ換へると、詠物、叙景の歌が多くなると同時に、詞藻の上にあらゆる技巧をつくして華美な潤色を加へるに至つたのである。で三十一文字の短詩形中に於て、當時の歌人は出来るだけ、變化を試みようとして、句の轉換や助辭、テニヲハの省略や漢詩文の句調

家隆と定家

を取り入れる事などをした。かうした特色を最もよく代表したのは家隆と定家とである。家隆は殊に上皇の殊寵を得て、多吟を以て知られて居た。其作無量六萬首に及んだ。其歌風は穩健であるが往々平凡に流れる傾向があつた、其詠には「旅人の袖吹き

かへす秋風に夕日さびしき山のかげ橋」眺めつ、
いくたび袖にくもるらむ時雨に更くる有明の月」
などがある。



藤 定家は一家の歌學を組織して、『古來風體抄』を
原 著はした藤原俊成の子で、夙に名家の嗣として、
定 努力精進を續け、優れた才藻、學識を發揮した。
家 象 として歌の上にて、細かな技巧をつくして、殆
ど剩すところがなかつた。そこに彼れの長所があ

つた。其代りに複雑な思想を短詩形中に強ひて盛り入れようとして朦朧體に陥つことも往々あつた。一年も経ぬいのる契は初瀬山尾上の鐘のよその夕ぐれ」の如きは其一例である。其歌風は「春の夜の夢のうき橋とだえして峯に別る、横雲の空」、「みそら行く月もまらかし足引のよしの、里の雪のあさりに」、

定家の歌風

歌學上に一見識を立てた定家

彼れの作歌についての意見

「實朝の『萬葉集』研究

「袖に吹けさぞな旅路の夢も見じ思ふ方よりかよふ浦風」などに現はれて居る。定家は其父の遺業を受けて歌學の上に意を注ぎ、殊に晩年に至つて精力をこゝに傾けた觀があつた。彼れは日常、種々の異本を涉獵し校訂して、古書類の定本及び其註釋を作つた。彼れの『源氏奥入』は『源氏物語』の註釋の先驅であり、『土佐日記』、『源氏物語』、『伊勢物語』などの定本は彼れの手によつて完全なものが出來たのである。其歌學の大要は『毎月抄』、『詠歌大概』、『近代秀歌』などに於て窺ふことが出来る。彼れの作歌意見は内容に於ては幽玄を主とし、形體に於ては優麗を主とすると云ふに歸着して居た。就中、彼れは詞句の上ではどこまでも範を古歌に取るべきことを主張した。そして彼れが深く親んだのは『萬葉』、『古今』、『源氏』の三書であつた。

實朝は、定家の研究した『萬葉』の影響を受けて、彼れ独自の歌風を作つたのである。定家、家隆らが京都のローカル・カラーを帯びて居るとすれば、實朝は鎌倉のローカル・カラーを帯びて居た。前者が雲上人の氣分を反映して居るとすれば、後者は武家の氣風を反映して居た。實朝の歌には、武將の氣格が備はつて、調子が雄渾で比較的に眞實味が籠つて居た。其の歌風は「箱根路をわがこえくれば伊豆の海や沖の小島に波のよる見ゆ」、「おほ君の勅をかしこみち、は、に心はわくとも人にいはめやも」、「大

實朝の歌風

海の磯もとゞろに寄る浪のわれて碎けて裂けて散るかも」、「ひんがしの國に我をれば朝日さすはこやの山のかげと成りにき」、「もの、ふのやなみつくらふこての上に霞たばしる那須のしの原」などを見て推想することが出來よう。彼れの家集を『金槐和歌集』と稱した。

彼れの師定家は、彼れの歌才を嘆賞して、『新勅選集』には、彼れの歌二十餘首を收めた。一つは幕府に好意を示すためであつたらうと思はれるけれども、矢張り實朝の歌にも、独自の風韻があつたからでもあらう。かうして實朝は、鎌倉に居て定家の教へを受けつゝ、遙かに京都の歌壇勃興の勢に聲援して居たのである。そして彼れは京の宮廷に於て、度々歌會が催されるのを摸して、鎌倉でも時々歌會を開いた。『吾妻鏡』には、其都度歌會のあつたことが記されてある。建保元年二月には、幕府で和歌會が催ほされて、歌題は『梅花契萬春』と云ふのであつた。其翌月も會があつた。建保五年三月には、觀花の歸途、實朝が藤原行光の邸に立寄つて歌會を開き、終つて臘月の光りを浴びて館に歸つた。當時彼れの和歌に對する熱心は鎌倉に同好者を生じた。それは廣元、泰時、義村らを始め内藤知親、東重胤、結城朝光らであつた。彼れまた後鳥羽上皇が遊幸を喜ばれ、花鳥風月や山水の景趣を愛せられたやうに、

鎌倉に於ける歌會

實朝の趣味
生活

鎌倉附近の名勝を訪ひ、風月に吟嘯することを喜んだ。春は永福寺の花を眺め、或は遙かに三浦、横須賀方面へ出かけて、花見の興に耽つた。夏は海邊の月光にあこがれて、晚風に涼を迎へた。秋は由比濱、森戸浦を訪うて、明月を賞し、武藏野を逍遙して、草花、蟲聲に秋思を味つた。冬は雪見に打興じ乍ら、芳醇な酒を飲み、和歌、管絃の遊びをした。そして四季折々、酒宴に夜を徹して、宿酔に惱まされたことがあつた。

歌を咏んで
實朝に嘆賞
させた武人

そこに實朝の歌人としての生活味が流露して居た。時には彼れ自身將軍であり、政治家であることをまるで忘れてしまつて、純粹な歌人の心持になつたこともあつた。彼れは臣下の紀康綱が秀逸の歌を咏んだのを喜んで、卽座に彼れを賞して、一枚の下文に數箇所の地頭職たるべきことを記して與へた。また泉親衡の謀叛に加はつた澁河兼守が十首の歌を咏んで愁訴したと云ふので赦免の恩典を與へたことがあつた。それは義時の眉を擧めたことであつたらうけれども、實朝の天真がそこに現はれて居た。

鎌倉を京都
化せんとす

彼れは京都宮廷に於ける年中行事などに興味を有つて、雙紙合や繪合や鬮鶏や蹴鞠などを行つた。また時には、白拍子、遊女などを館へ呼び寄せて童形に扮せしめ、延年の興遊を見たともあつた。彼れはかうして京都文化に對する憧憬に浸つて居たが、

學藝獎勵

繪卷も京都に於て作らせ、障子の畫の故實に就いては、矢張り京都の博識家に教へを求めると云ふやうな具合であつた。それらは一面京都から來た夫人の感化も、與つて力があつたらしい。其他別に實朝の發意に出たものとして、學藝獎勵の傾向を示したのは、其近侍中から學藝優秀のもの十八人を選んで、窈かに唐太宗が政事の要を問うた十八學士(¹¹)に擬して、學問所番として交代に祇候せしめ、和漢の故事などを語らせたことであつた。北條泰時は其中の一人に選ばれた。

實朝と長明

こゝに興味を覺えるのは、建曆元年、實朝が鴨長明を引見して居たことである。『方丈記』は長明の著述として知られて居るが、其實、眞の作者は長明(¹²)でないらしい、一體、鎌倉時代には、文學上に於ける僞書が往々作られたので、定家の歌學書と稱するものさへ、僞書が數種もあると云ふ具合である。『宇治拾遺物語』を『今昔物語』の作者の手になつと誣ひたり、『撰集抄』を西行の著であるとしたり、僞書續出の風があつた。

僞書百出

『方丈記』が長明の著述でないとする、長明は單に歌人として傑出して居たことになる。實朝が長明に逢つたのも主として長明の和歌に對して諒解があつた爲めでなかつたか？ 長明は當時に於ける厭世思想家を代表して居た趣があつた。彼れは近衛天皇の久壽元年に生れて、應保元年宮中に奉仕し、從五位下に叙せられたとも傳へられ

長明の閱歴

長明の遁世

て居るが、はつきりしたことはわからぬのである。唯、彼れが後鳥羽上皇に召されて和歌所の寄人となつたことだけは正確である。彼れの歌は『新古今集』に彼れが提出した十二首のすべてを収められて、非常に歡喜した。後彼れは、父祖の業を繼いで、鴨社の神官とならうとして朝廷に請うたが、許されぬ所から、急に世をはかなみ、薙髮して蓮胤と號し、大原山に隠れた。そして更に日野山の奥へ這入つて、方丈の庵を構へたと傳へられて居る。『方丈記』を書かなかつたとしても、彼れには『方丈記』の厭世的な氣分、情調が附き纏つて居たことは蔽ふことが出来ない。さうした衰世の人が詩人肌の實朝と逢つて、歡晤したことは、雙方、意氣の合致するところがあつたらう。

實朝の趣味中心の生活は、彼れの氣鬱を散せしめたであらうけれども、義時は、それがため、實朝が武藝を閑却するのを非とした。で、義時は實朝の武藝に對する興味を喚び起すために、小御所の庭で御家人の弓術を競はせて、實朝の觀覽を請うたことがあつた。また義時は折を見て、廣元と共に實朝を切諫して、武事に熱中するやうに勧めたことがあつた。かうした點で、義時の趣味と實朝の趣味とはまるで一致しなかつた。

(一)『明月記』参照。

實朝の武藝
閑却

(二)『空華日工集』参照。

(三)文學博士藤岡作太郎氏著『國文學史講話』二一〇、二一一頁に「當時作家の滔々として自信に乏しく、古代の作品に眩惑し、藝術的良心に缺けるの極、古人に假托せる偽書の續出を見るに至れり。(中略)夜牛の寢覺、とりかへばや物語等を改作して、平安朝時代のまゝなる名稱を存して、恬として恥ぢざるが如き、石清水物語の一名に附するに、源氏に先だてる正三位の題を以てせるが如き、松浦ノ宮物語を以て貞觀三年の作となせるが如き、その愚終に及ぶべからず。かの宇治拾遺物語に擬するに今昔物語と同じ撰者を以てせるも、正にこの好例なり。陋劣なる悪戯はこれのみに止まらず、發心集を以て鴨長明の著に擬し、撰集抄を拈出し來りて僧西行の名を強ひたり。今行はるゝところの寶物集を康賴の作といひ、方丈記を長明の筆に成れりといふも信じ難し」とある。

(四)『方丈記』に「行く川の流は絶えずして、然かも本の水に有らず。淀に浮ぶ泡沫は、且つ消え且つ結びて、久しく滯る事無し。世の中に在る人と、住處と、亦た斯くの如し。玉敷の都の中に、棟を並べ、甍を争へる、尊き、卑しき人の住は、代々を経て盡きせぬ物なれど、是れを眞かと尋ねれば、昔在りし家は稀なり。或は去年焼けて今年は造り、或は大家滅びて小家となる。住む人も亦是れに同じ。處も變らず、人も多けれど、古へ見し人は、二三十人が中に、僅に一人二人なり。朝に死に、夕に生るゝ習、唯だ水の泡にぞ似たりける。知らず、生れ死ぬる人、何方より來りて、何方へか去る。また知らず、假の宿、誰が爲にか心を惱まし、何によりてか目を悦ばしむる。其の主人と住處と、無常を争ひ去る様、言はゞ朝顔の露

に異ならず。或は露落ちて、花残り。残りりと云へども、朝日に枯れぬ。或は花萎みて、露猶ほ消えず。消えずと云へども、夕を待つ事無し」と嘆いて居る。

第三節 和田義盛の滅亡

義時と義盛
とは兩立し
難し

實朝が詩の夢、歡樂の夢に酔ひつゝ、ある時、突如として彼れに現實曝露の悲みを痛感せしめたのは、武權黨中最も強族であり、其中心人物であつた和田義盛の滅亡したことである。蓋し義盛と義時とは、どうしても兩立し難い關係にあつた。年輩、閱歴から云ふと、義盛は遙かに義時の先輩であるのみならず、久しく侍所別當(長官)として、武權黨の間に重んぜられて來た。彼れの眼から義時を見ると、未だ貫目に乏しい若輩に過ぎなかつた。ところが、時政の歿後、義時が執權となつて、地位に於ても、義盛を凌駕してしまつたので、それがひどく義盛の感情を害ねた。それに承元三年五月、義盛が晩年を飾るため、上總國司を望んだ時に實朝はそれを許したが、政子は家人が國司となることは頼朝以來の禁制であると云つて許さなかつた。それには義時、廣元らが議に與つて居た。そして義盛の請願書は三年間握り潰されて、到頭其目的を達しなかつた。義盛はそれらの事から一層、義時、廣元らを憎み、殊に義時のするこ

義時の眼に
映つた義盛

とがすべて政子らと結託して、將軍の親戚だと云ふ特權を亂用して、先輩を輕視するやうに思はれてならなかつたらしい。衝突の種は既に早くから蒔かれて居たのである。

一方、義時の立場から義盛を見ると、人物は凡庸でありながら、武權黨の中心人物として、ともすると、元老としての聲望、勳功を恃んで、幕府の秩序を破壊しかねない邪魔物のやうに思はれた。北條家の基礎を固めゆくについても亦、義盛の存在は、時として義時を脅す感じがしてならなかつたらしい。で、早晚義盛一族を剷除せねばならぬと云ふことは、智謀の深い野心家の義時が考慮の中に早くから潜んで居た問題であつたらうと思はれる。

實朝の調停
的苦心

かうして義時と義盛との間が圓滑にゆかぬことを夙に悟つて、其衝突を防がうとした一人は實朝であつた。實朝は同情深い人物であつたから、義盛が拵直で、年輩、閱歴の上に於て尊重すべきものあるを知り、いつも善意を以て義盛の云爲を見て居た。そして義盛が義時の權勢について憤るところを力めて抑へて來たらしい。けれども實朝には、其亡父のやうな人格的重量がなかつたから、義盛を抑へることも、義時を制することもむづかしかつた。で兩者の争鬭は結局演出されなければならぬ運命の上に

泉親衡の謀叛

僧安念をして鎌倉に遊説せしむ

和田義盛の子息ら陰謀に加擔す

置かれて居た。

折柄、建保元年二月、思ひがけなくも、義盛と義時との間に烈しい感情の衝突を生ずる事件が持ち上つた。それは泉親衡の謀叛である。親衡は信濃源氏の一人で、かねて當時の幕府に對して不平を抱いて居た。で彼れは頼家の最期に同情して其遺兒千壽丸を將軍に擁立しようとして云ふ陰謀を企てた。千壽丸は頼家の三男で、後に實朝を暗殺した公曉の弟である。親衡は建暦元年の頃から頻りに密謀を進めたが、同志の一人青栗七郎(爲廣)の弟で天台宗の僧となつてゐる阿靜房安念の辯舌を頼母しく思つて、彼れを鎌倉に派し、祕かに同志を勧誘せしめた。

安念は鎌倉に居て、熱心に同志を募る間に、かねて義時と不和の間柄であるところの義盛の子で、少壯の元氣に満ちた義重、義直及び義盛の姪胤長らを説得して盟約に加はらせた。安念は鎌倉幕府の元老義盛の一族を身方に引入れたのをひどく喜んだ。かうして親衡の同志は三百餘人に上つた。ところが、建暦二年十二月、何となく、鎌倉が不穩で、はつきり知れぬ乍らも、將士らの間に謀叛を企てたものがあるとの噂が立つて、誰れも安心しなかつた。其時は何事もなく濟んだが、建保元年二月に至つて、安念が千葉介成胤に欺かれて逮捕さるゝに及んで、親衡の陰謀悉く露顯してしまつた。

義重、義直、胤長ら捕へらる

義盛幕府に赴いて二子を救ふ
義盛再度の嘆願に一族九十八人を率ゐて幕府に赴く

義時が義盛に對する恐意

それが爲め、鎌倉はまた一時騒いだ。

陰謀發覺の際、逸早く親衡のみは何處へか逃亡してしまつたが、其他の黨與は大抵前後して幕府の手に捕へられた。和田義重、義直、胤長らの三人も亦其厄に罹つた。當時、上總伊北の庄に歸つて、靜閑を樂んで居た義盛は、其事を聞くと、大に驚いて急に鎌倉へ出た。そして幕府に行き、其子弟が一時の無分別から、親衡や安念のために誘惑されたことを辯明して、其釋放を嘆願した。

此時、實朝は義盛多年の勳功を思ひ、且つ其衷情に動かされて、義重、義直の二人のみは特に宥恕した。義盛は非常に喜んで、實朝の仁惠を感謝して退出した。ところがひとり胤長のみが未だ許されずに居るので、義盛は人情上、傍觀するわけに行かなくなつた。で親戚を會して、其事を協議した上、一族九十八人を率ゐて、幕府に行き、威儀を正して胤長の赦免を嘆願した。

實朝は、尙ほ義盛の請ひを容れようとしたが、義時が手強く、其事に反對した。胤長は主謀者の一人である以上、それを許すと、後來に惡例を残すと云つて、止むなく義盛の嘆願を斥けた。其時、義時はどこまでも、意地悪く義盛に當つて、胤長を縛して義盛一族の面前を通過させて、面目を失はしめた上、陸奥に配流したのである。蓋

義盛の缺點

し義盛が、一人の甥の罪を許されんことを請うため、少くとも、外見上、示威的に一族九十八人のものを率ゐて幕府に赴いたのは、どうしても不穩の態度だとして非難されるべきところがあつた。單に義盛一人が九十八人を代表して、嘆願しに方が穩當で宜かつたのである。此點に於いて彼れは義時をして巧みに乗せしむべき機會を與へた上、事は豫期に反して却つて彼れの侍所別當としての威嚴を損することになつた。

義時、義盛を激昂せしむ

けれども義時の態度も亦挑撥的で、穩當を失して居たのは云ふまでもない。彼れは義盛に屈辱を與へるやうなことをして平氣で居たのである。否、義盛の怒りを挑撥して、結局自滅に導かうとしたのである。で義盛は、ひどく激昂して、義時の冷かな處置を憤つた。そして其後、胤長の宅地を、義盛から切に賜りたいことを幕府に望んで一旦許されたが、これも亦義時が實朝の背後に居て術計を用ひた結果、義時自ら賜ることになつた。此事のため再び義盛の面目を傷け、且つ彼れを怒らせた。

義時の術策

義時の覺悟と用意

義盛が激昂、憤怒するであらうとは、豫め義時の期して居たところである。またそれから、義盛が兵を擧げて、義時を討たうとして、謀叛の形に墮するであらうことも豫期したことだ。たとひ、多少の犠牲を拂つても、一日も早く義盛を自滅させることは、彼れが衷心切望したところである。義時が文武兩權を一手に收めて、鎌倉の將士

義盛竊かに伊勢神宮に祈願す

を一統するには、必ず義盛の存在を一掃しなければならなかつたからである。

果然、正直な義盛は、最早鬱勃たる不平を抑へかねて、兵を擧げて、元兇と目ざす義時を誅しようとするに至つた。それは建保元年三月中旬に近い頃である。其時分から、義盛の邸には頻りに一味のものが出入して殺氣立つて居た。殊に四月二十四日、義盛が歸依して居た僧尊道房を奉幣祈禱のため、伊勢太神宮に派するに當つて、表面は事情あつて、尊道房が生國伊勢に歸るやう暇を出したやうに見せたが、それと聞いて、不審を抱くものが少くなかつた。そして義盛について流言が頻りに行はれた。

其頃、實朝は酒間、義盛の一族であるところの山内正宣(三)らに盃を與へた時、正宣の顔色、様子などを見て、豫め和田合戦の起るべきことを推察した。それに色々の流言があつたので、愈々義盛が擧兵に及ぶであらうことを察し、宮内兵衛尉公さんご氏を義盛の許へ派して、慰諭しようとした。其時、義盛は「故右大將の薨後、兎角君臣の間が疎遠になり、且つ愁訴の事が少しも採用されないのを悔ゆるのみで、別段逆心を抱かぬことは天神地祇の知ろし召さるゝところでございます。唯々賊臣が居て兎角君の禍を醸し出さうとするのを憎む次第でございます」と答へた。

けれども義盛の家では、頻りに兵具を調へて居るので、公氏は歸つて其旨を實朝に

實朝兵亂を未前に知つて義盛を諭す

義盛の辨解
和解の色を
繕ふ

上申した。實朝は愈々不安に思つて、再び使者を義盛の許に送つて慰諭を加へたが、義盛は其時露骨に義時の人物を指弾し、且つ「一族中の少壯輩が、頻に義時の姦佞を憤つて誅伐を加へようと騒ぐので、今は制することが出来ずに自分も亦同意した」と云ふことを明かに答へたと『吾妻鏡』にある。此點、事實かどうか不明である。恐らく義盛は實朝の再度の慰諭によつて、意を曲けて和解しようと決心した様子を表面に示して體裁を繕ひ、機を見て突如義時及びそれに黨する文權黨の領袖廣元らを討たうと考へたと見た方が眞に近いであらう。

朝夷名義秀
の剛力

かうして義盛は五月二日、俄かに起つて、其族黨一百五十騎及び郎從三百餘人を三隊に分ち、一隊は幕府を他の二隊は手を分つて義時、廣元の邸を烈しく攻め立てた。義時の方では、一旦勘當した一子朝時の勇武に目を付けて喚び寄せなどして、豫め義盛の暴發に備へて居たので、別に驚き騒ぐやうなことはなかつた。政子及び實朝夫人を鶴岡別當坊に避難させ、自分は、實朝を守つて幕府に居た。義盛一族はいづれも武勇の優れた人々だから、朝夷三郎義秀の如きは、幕府の總門を力任せに打破つて猛獅のやうに亂入し、直ぐ火を放つて、一舉、幕府を焼拂ひ、實朝を法華堂に避難せしむるやうな勢だつた。義秀の勇戦に對して、義時の方は、泰時、朝時らがよく戦つた。

義村の變心

結局、義盛の軍は少勢であり、義時の方は幕府の勢力を利用して、多數の軍勢を以て、攻め立てた上に途中、力と恃んだ三浦義村が急に變心して、義時に身方したので義盛は少からぬ打撃を受けた。

横山時兼の
應援

かうして二日は夜に入つてからも、兩軍よく戦つて勝敗を決することが出来なかつたが、翌三日に入つて、義盛の軍は漸く疲勢を増し、次第に退いて由比濱に引上げた。折柄武藏七黨の一に數へられた横山黨の嫡流横山時兼が義盛の急に應じて來援したので、義盛もそれに力を得て、一度頽勢を盛返した。ところが夕刻に入つて、義盛が戦死したので、統率者を失つた義盛一族は、到頭壞亂してしまつた。時に義盛は六十七歳であつた。其際、朝盛、義氏、義直、義重らはいづれも父と運命をひとしくしたが、長男常盛は一度甲州に逃れて誅せられ、義秀は逃れて房州に渡り、高麗國へ赴いたと傳へられる。

義盛一族滅
亡

義村の不明

幕府は、一時義時、廣元兩人の奉書を以て近國の御家人に令を發して、義盛の軍を討たしめ、鎮定後、西海方面へ逃れた義盛の殘黨を捕へさせた。また和田、横山らの所領を沒收して、戦功ある將士に與へたが、泰時のみは固辭して受けなかつた。三浦義村は途中變心して、義時の身方となつたところから、特に優遇されて厩別當に補せ

られた。けれども義村の地位は矢張り義盛に次いで、三浦一黨の間に重きを爲したから、義時のために早晚術策に乗せられて自滅しなければならぬ運命の下にあつた。義村はそれを意識したかどうか？ 尙義盛の夫人度會氏は、ひとり釋放されて淋しい日を送つた。

當時、京都では、五月九日、鎌倉に戦亂があつた報知に接して、上下騒動した。在京の武士はいづれも急に鎌倉へ赴かうとした。ところが、後鳥羽上皇がそれを留めて、京都の守備に當らしめられたので、亂終るまで不安の思ひを抱きながらいづれも京都に居た。そして京都では、建保二年に至つて、前年、出家して榮實と號した千壽が、他のものに擁せられて謀叛しようとする噂があつたので、廣元の家人らが不意に攻め寄せて榮實を殺した。

要するに、此騒動で一番要領を得て、竊かに會心の笑を洩らしたのは義時である。彼れは義盛の職を襲うて、新たに侍所別當を兼任したので、關東に於ける文武の大權は悉く彼れの手へ歸した。また侍所の所司には、義時の腹心金室行親を任用したので、所司の權は景時の頃にくらべると非常に縮小されて、單に一屬僚に過ぎないことになつた。後、建保六年には、泰時が侍所別當になつたが、結局、義時がすべてを支配し

頼家の子殺
さる

文武の實權
義時に歸す

たのである。かうして北條の一門が繁昌する時、義時の父時政は建保三年七十八歳で歿した。

(一)『保曆間記』に義盛について「頼朝の時は侍所などして、さるべき仁體也けるが、義時に權を取られて、今は主従の如し、物憂を思ひて指も不出」とある。

(二)『吾妻鏡』参照。

(三)『明月記』には義盛に「有和解之景色」として居る。

(四)『諸家系圖纂』、『佐野本系圖』、『續本朝通鑑』、『大日本史』等参照、『全讀志』、『讀陽管筆錄』等によると、義秀の遺跡が讃岐にあるとして居る。また義盛の末子、和田八郎義國は上野に逃れたとの説が『上野名跡志』に出て居る。

第四節 最後の悲劇

義盛一族の悲壯な最期は、確かに實朝に幻滅的な感じを沁々與へた。彼れは義盛に同情して、其滅亡を未前に防ぐと共に、鎌倉を兵火の巷にするであらうことをも防がうとした。ところが、豫期はすべて、義時らの術策、祕計によつて裏切られてしまつた。彼れが建保元年冬、壽福寺で、義盛一族の冥福を修した時、無限の感慨に沈んでであらう。

實朝の幻滅
の悲み

意志の人と
情の人との
背離

所詮、情の人實朝と意志の人義時とは一致し得なかつた。實朝が思ふところは概して義時の理解し得ないところであり、義時の思ふところは實朝の氣に入らぬことが少くなかつた。それに政子、廣元らも亦義時と略々同じ考へ方をしたのであるから、義時と實朝の間は次第に乖離してゆくのみであつた。そして時々義時や廣元が、實朝に諫言するとも實朝に取つては不快な感じを起させた。で實朝は廣元に對して、賴朝時代のやうに、事毎に諮詢することをやめて、政治上では自分一個の考へですべて進んでゆかうとする傾向を示して來た。

さうした傾向が最もよく現はれた一例は、實朝が官爵に關する先例をまるで無視したことである。彼れの父賴朝は正二位權大納言兼右大將までしか進まなかつたのに、實朝は正二位右大臣まで進んだ。彼れの昇進は義時、廣元らに瞠目せしむるのに迅速で、建保元年二月、既に正二位となつて居た。同六年正月には權大納言に任ぜられ、而も辭しないでそれを受けた。兎角、任叙については先例を楯に取つて、彼是詮議の喧ましい朝廷で、實朝の異數な昇進を遮らうとするものがなかつたのは寧ろ異とせねばならぬ。『承久記』などにあるやうに所謂「官打」によつて、上皇が實朝を位負けさせようとされた噂も、其邊から出たのであらう。或は上皇と實朝との間に何等かの默

實朝の官爵
についての
先例無視

「官打」の説

契があるのではなかつたかと推想するものさへある。けれどもそれらに就ては、別段確かな證據がない。けれども上皇が實朝に對して相當好意を有せられたことは、實朝が歌道に熱心なのを聞いて建保三年宮中歌合の謄本を特に賜つた事などによつて察することが出来る。

ところが、政子、義時らは、實朝が官爵についての先例無視に全く反對であつた。で、建保四年、大江廣元に旨を告げて「故右大將は子孫に餘慶を残すため、官位の宣下がある毎に辭退して來られた。然るに實朝が齡三十に満たないで、異數の昇進をするのは、故右大將の意思を無視したものである」と云つて、實朝を切諫させた。そして廣元は、政子、義時の意を實朝に傳へ、且つ「成るべくは、征夷大將軍のほかは一切官を辭退され、老境に入つてから大將を兼ねられる方がよろしうございませう」と述べた。實朝は、廣元の云ふところに至極同感を表したが、實は反對であつた。それは、第一に彼れに一人の愛兒もなく、且つ其運命は、頗る危殆に瀕して居るやうに感じたので、「源氏の正統は自分の一代で盡きるにちがひあるまいから、思ひ切つて官歴を進めて貰つて、聊か自分の生を飾りたい」と考へたらしいのである。實朝が慄然として、其胸中を廣元に告げると、廣元もそれ以上何と云つて宜いかわからなくなつて

實朝の沈痛
な感慨

渡宋の計畫

沈黙してしまつた。

其時分、實朝は一方で、渡宋の計畫を建て、宋から來た陳和卿に命じて大船を作らしめて居る最中であつた。實朝が陳和卿を知つたのは、建保四年六月のことである。陳和卿は後白河法皇の時、東大寺造營の總大工を勤め、大佛を鑄造し、大佛殿を建てるについて功勞が多かつたので、平氏没官領となつた伊賀國山田郡の地を朝廷から賜つた。其後、建久六年二月、頼朝が東大寺供養に臨んで、重慶上人を介して陳和卿を引見しようとした時、陳和卿は頼朝が成功の蔭に幾多の人の血を流したのを非難して、斷然、頼朝に逢ふことを謝絶した。其上、彼れは頼朝から彼れに贈つた金銀や馬を斥け、唯々奥州征伐に用ひられた甲冑と鞍だけを受取り、他は寺に寄附してしまつた。要するに、彼れには、藝術家らしいプライドがあつたのだが、稍々それが極端に馳せて、故らに奇矯を衒つた氣味があつた。

陳和卿の性質と奇矯な行爲

陳和卿は、其後、自己の技倆を恃んで、往々常軌を逸するやうなことをしたので、自然東大寺に留まつて居ることが出来なくなつた。で、彼れは、失意の境を逃れるつもりで、建保四年、實朝に逢ふため鎌倉へ來た。實朝が彼れを引見すると、彼れは不思議な夢のやうなことを話した。それによると、實朝の前身は宋の醫王山の長老で、

實朝の前身

陳和卿に共鳴す

陳和卿が前世で其門弟となつて師事したことがあると云ふのである。ところが、詩人的な實朝はある日、夢の中に宋に遊んである寺に入り一人の高僧から、矢張り陳和卿が云つたやうに「あなたの前身は宋醫王山の長老であつた」と告げられたと見たことがあつた。で一も二もなく、陳和卿に共鳴してしまつた。一説によると當時榮西も亦實朝と同一の夢を見たので、一層陳和卿の説を信じたと傳へて居る。

陳和卿は實朝に對して、頻りに渡宋のことを勧め、彼れが案内役を勤めようと云ひ出した。で實朝の遊意は切に動いた。史家の中には此渡宋の計畫を沒常識のやうに云ふけれども、それは實朝を理解しないからである。實朝は詩人肌で、實行よりも、より多く空想に耽り易く、且つ異國情調に憧憬^{あこが}れて居た。そこへ當時、彼れの境遇と運命とが、彼れを自棄的、反抗的にならしめる點があつたので、苦悶^{くもん}、鬱憂^{ふさ}、懊惱^{あうなう}が絶えず續いた。單に形式上、傀儡的な將軍となつて政務に齷齪したり、政子、義時らに制肘されて居るよりは、萬里の風濤を蹴破つて大陸の空氣に嗷嘯しようと思ふやうになつたのである。未だ極めて若い彼れとしては、無理のないことであつたらう。そして彼れの地位やそれに纏ひ付いた束縛を顧みて居る餘裕も何もなかつたらう。

實朝は、陳和卿が會て東大寺に居た時、大佛殿造營のために必要な數丈の大柱を無

實朝の苦悶

渡宋の準備

斷で使用して唐船を造り、大に叱られたことがあつたと聞いて居たかどうかからな
いけれども、兎も角、造船術に長じて居るのを知つて、こゝに大船建造に著手せしめ
た。當時、實朝は十一月に入つてから、渡宋の準備を始め、六十餘人の隨行者を選定
した。そして結城朝光に其事を管理させた。義時らはそれを聞いて極力諫止したが、
實朝はどうしても聽き入れなかつた。

唐船の建造
成る

ところが、其後、陳和卿は頻りに大船の工事を急いで、建保五年四月漸く完成した
ので、實朝は非常に喜んで、其進水式に義時ら以下を従へて臨んだ。そして信濃守光
行を行事として、數百人の人夫を督して、由比浦に泛べようと試みた。けれども陳和
卿の技術が不十分であつた爲めか、又他に原因があつた爲めか、午の刻から申の刻ま
で力をつくして曳いても、船底は沙上に膠着して動かなかつた。折角、實朝が夢みた
渡宋計畫も、それが爲めまるで水の泡になつてしまつた。陳和卿の行衛も亦不明とな
つた。

造船の失敗

支那へ使命
十二人を派
す

實朝は其後、自分が行かぬ代りに、僧良眞ら十二人のものを宋へ派し、能仁寺に於
て、佛牙の舍利を求めさせ、それが日本へ齎らされると、勝長壽院に安置し、後、大
慈寺に遷した。ところが、後に北條貞時が大慈寺から更に圓覺寺の舍利殿に遷した。

實朝の官位
昇進の熱望

かうして、實朝は彼れの鬱陶しい氣分にまぎらはせるべく排け口を失つてしまつた。

此頃、實朝の官位昇進は極めて急激であつた。それは實朝の希望によつたのである。
彼れは建保六年二月十日、使者を京都に派して、自分から求めて、左近衛大將に任せ
られるやう懇願した。朝廷では先例によつて實朝を右近衛大將に任じようとの内議が
一決したが、幕府から更に懇請するところがあつたので、特に當時、左近衛大將であ
つた右大臣九條道家にそれを辭せしめて、始めて實朝を左近衛大將に任ずることにな
つた。そして勅命によつて、帶劍を聽し、隨身兵杖を賜つた。そして彼れは左馬寮御
監を兼ねるに至つた。それから間もなく、勅使が鎌倉に下つて、朝廷からの宣旨を傳
へたので、實朝は非常に喜び、心から勅使を優遇するに力めた。當時、北條泰時も、
讃岐守に任せられたが、泰時は謙退してそれを辭した。畢竟北條一家の家法と實朝の
行き方とはまるで異つて居たのである。

實朝の喜び

昇進につい
ての祝賀

實朝は、右について、花々しく拜賀の式を行ふことにした。で後鳥羽上皇は其事を
聞召して、特に播磨守藤原忠綱を鎌倉に派して、儀式に必要な車や調度の類を實朝に
賜つた。また其扈從として幕府に親みある公卿らが五人ばかり鎌倉へ赴くことを許さ
れた。六月二十七日、實朝の拜賀は鶴岡八幡宮で華美に行はれた。藤原忠綱らに對す